表記。珠云く、「題目は首座。」

ウ 纔有毫末許。四威儀の間に於て、纔に無明生せば、ハに領覽せらる、直に須らく八面玲瓏にして、縱橫の寬ふところなかるべし、忠曰く、「覽は通じて攬に作る、攝持なり、言ろはわづかに佛法の知見を存せば、則ち人の爲に領納攬持せらるる也。」珠云く、「領覽はのみこみとらるゝうかゞひ知らる、脚跟を見さがさる、みすかさるを云ふ。

エ 佛法罪人。妄りに首座の名位に登る故に、爲の字は「これ」と讀みくせするあり。

オ 隈々逕々。隈は水曲、逕なり、逕は鳥獸なり、蓋し皆迂曲の貌、紀談上に「臨濟の語に云く、然も鷹々慌々なりと雖も、且つ隈隈逕々ならず」と、珠云く、「くど〳〵、どち〳〵」或抄に云く、「隈々は迂曲のことに逕々は「鳥毛のことに用ふ」と。

カ 牛死牛活。委委隨隨、迂曲にして全機なく、魂不散底の死人なり、珠云く、「息があるでもなし、ないでもなし」と。

キ 二十四氣。時節に輪ぜらる、珠云く、「こねまぜらるゝなり、二十四氣は、やれ且氣じや、四九の日じやと。」車は車の輪の動くこと。

ク 七顚八倒。十二時に使はれ、一切の境に役せらる、珠云く、「もがきまはつて、主人となることならぬ」

ケ 叢林茂盛。首座の職分。珠云く、いかなる明師の會裏でも、人を得ずんば、十分に此の道をとり行はれぬ。」

コ 空手來空。光明藏達磨の章に「寶曇曰く、吾が祖の中國に入るや、初めより放光動地の禪なく、亦雨法如雲の蓋なく、又世と俯仰するの事なし、當時之を氣むに、指して壁觀婆羅門と爲すに過ぎず、其の空拳を奮つて實効を求むるに及んで、烏獲が力、孟賁か勇あり、百の摩騰竺法蘭と雖も、爾かく較らずと。」珠云く、「佛法は一なめも手に付けてをならぬ、又目玉ばかり大きくて來た。」

サ 已是揭廳。是多の來者を接す。珠云く、「直指人心、單傳心印、其の空拳來去の處直に廳を揭げ土を簸て、人天の眼つぶしうたれた」或抄に云く、「說法度人なり。」

シ 曲爲今時。空手にして來去す、却つて是の如く爲人の處あり、珠云く、「今時は淳季末代じや、本懷ではなけれども」と。

ス 黃梅七百。黃梅は蘄州雅上眞惠禪寺黃梅山といふ、五祖弘忍大滿禪師の會下に七百の名衲あり。

セ 希求佛法　珠云く、「時時に勤めて拂拭せよ」と、かせざまはる、數種の禪等の佛法を。

ソ 盧行者一人。盧は六祖慧能大師の俗姓なり。おそずりばうさまじや。

タ 眼不識字。珠云く、「佛の字も法の字も目に入らぬ、本來無一物と、大衆に供養するの米を舂く、かつたり〳〵。」

チ 西天衣盂。この事は六祖壇經に詳なり、佛法を求めず、文字を識らず、却つて是の如く害授の處あり、是れ古德の示すところ、未だ所出を審にせず、珠云く、「迦葉より傳來の衣と鉢盂と、傳燈の信を表す」

ツ 此門海泊。珠云く、「祖師の此の門庭浪があらくよりつかれぬ、それ故命懸絲の如しじや、かうしたことじや、あゝしたことしやなどと」

テ 夙有靈骨。夙薰佛種、英靈府の筋骨、珠云く、「此の一著子を耳にはさむが靈骨じや。」忠曰く、「生々般若を薰習したるを、夙有二靈骨一と云ふ、靈骨なければ天子に生れても佛法を聞いても面白くおぼしめさぬ、故に其の果盡きぬれば惡道へ落ちさせ玉はねばならぬ。」

ト 曲巧方便。委曲の義巧方便。珠云く、「正眼に見來れば、棒喝も曲巧方便、何ぞ況んや上堂小參をや。」

ナ 直下從上。吾が門老宿を稱して老凍膿と曰ふ、報恩錄に見ゆ、珠云く、「窠臼はすみ處、拂拭するの無一物のと云ふ、窠窟踏翻はけとばしてしまへ。」

ニ 全身空手。已上は古德を引いて事一向なし、獨り大根の者、超脫して祖師禪を擔荷するを示す、珠云く、「空手にして來り空手にして去ると、これが達磨の全身へんてつもないあばら骨。」

ヌ 何患。珠云く、「人があの人は達磨の骨髓は得ぬのと云つても苦しうない世間の人の知らぬは苦しうない佛祖が知音じや。」

ネ 名實行解。起頭の言を摘んで結ぶて、文禪者の天台に之くを送るの須」あり、蓋し其の時此の法語を書して之に附與する乎。

ノ 梓文禪人。偈頌の部に「冷泉にし

ハ 古之英特。珠云く、「此の文、三段、或は一戲なり、眞實參禪抱道の人」

ヒ 遠行千里。遠は四海九州。

フ 不求珍寶。孔子家語の觀周篇に、「孔子周を去るに及んで、老子之を送りて曰く、「吾れ聞く、富貴の者は人を送るに財を以てす、仁者は人を送るに言を以てすと、吾れ富貴なること能はずと雖も、而も仁者の號を竊めり、請ふ、子を送るに言を以てせん乎、凡そ當今の人、聰明深察にして、死に近きものは好んで人を譏り議るものなり、博辯閎遠にして其の身を危うするは好んで人の惡を發する者なり」と。

ヘ 入道要徑。吾が門の鮮送は廣くは

ホ 師家既把。珠云く、「其の時、師家把不住とは老婆禪。」向上宗乘のとりしまりがしつかりせぬ故、愛着心が起つて、却つて眞正の悟門を妨ぐ。

㋓蓋し此の門は、湊泊し易からず、㋔若し夙に靈骨あらば、揚盾瞬目の㋕曲巧方便を待たず、㋖直下に從上の老凍膿の窠窟を蹈翻して、㋗全身空手にして來り、空手にして去る底の一著子を擔荷せん。豈に快ならざらん哉。㋘何ぞ思へん、㋙名實行解の、時に昭著せざることを也

㋚　梓文禪人に示す。

㋛古の英特、㋜遠く千里に行くときは、㋝珍寶を求めずして、一言を乞ふ、㋞師家既に把不定にして、未だ㋟直に其の入道の要徑を述ぶることを免れず、㋠儻し皮下に血ありて、言外に歸を知らば、㋡亦忝ちざらんや矣。㋢近年此の風頗る盛なり、總に衆に入れば、㋣先づ牛腰の軸を以て、法語を求めて參學門庭の㋤設けと爲す、㋥其の緊切の處は、㋦無事甲裏に颺在す

禪門類聚の遊山門の語を見よ。

㋠皮下有血。筋力血脈ある底の大丈夫の漢。珠云く、「靈骨ある大丈夫、いたさかゆさを知る活人。」慙を知る漢、活漢なり。

㋡亦不忝。忝は辱なり、此の一節は總論、古より此の風あり今文禪法語を乞ふに依つて、之に託して開張す、珠云く、「宗教を忝めざるなり。」

㋢近年此風。珠云く、「垂誡の法語を乞ふの風。」

㋣牛腰之軸。牛腰は大册巨軸を謂ふ、李白詩集の醉後に王曆陽に贈る詩に、「書禿三千兎毫、詩載二兩牛腰二」。卷軸多くして牛に駄しつべしといふこと。珠云く、「乍入叢林、あはてはて、彼の知識、此の禪師に墨跡法語を乞ひまはる。」

㋤設。珠云く、「道具だてにする。」

㋥其緊切處。肝要の工夫公案はどこへかほおりやつて。」

㋦無事甲裏。之を以て念と爲ざる也、此れは學者の弊を謂ふ。

㋧大方老禿兵。叢下の老將、珠云く、「世界國土の口すぎ坊主似せ知識。」

㋨波辯彫割。珠云く、「波辯はしきべつなり、口、辯巧に任せて云ひまゝに言ひまはし、彫割は文章のつやをつけること。」

㋩從而絡之。學者を縛絡す、從は追從也、絡惑はすなり。

㋪新學此丘。珠云く、「初發心が大切なものなるに。」

㋫飲此狐涎。野狐涎沫、以て邪師の涕唾に喩へつべし。

㋬終身翹股。此れは師家の弊を謂ふ、此の一節は、別して法語の弊を述べて、以て鑑戒と爲す。

㋭魯祖逢僧。古人孤峻を述ぶ、魯祖は達磨大師。

㋮廬谷見僧。この因緣は顯孝錄に見ゆ。

㋯電光石火。珠云く、「いかんと見れば野鐵水、とつくに龍はない。」

㋰領與不領。二大老の用處、領超なること此の如し、豈に他の領不領を管せん乎。珠云く、「這裏に到つては合點してもしないでも。」

㋱豈背類我。兒孫を咒するの語なり

㋲寶林錄に見ゆ。珠云く、「此の如き二大宗匠、からせよ、あゝせよとこやかましく。」

㋳瑞在語言。此の一節は禪證頓脫ば法語にあらざることを述ぶ。珠云く、「垂戒の法語に。」

㋴高山流水。正に善知識を撰むべし事緣は報恩錄に見ゆ。珠云く、「面壁閉門等高き調べ。」伯牙善く琴を彈じて高山流水の趣を爲す、則ち鐘子期其の音を知る。貴知音とは珠云く、「きゝ手がない知り手がない、ないからかう云ふ。」佛祖も目をつけ及ばぬものを。

㋵鄭衛之門。禮記の樂記に「鄭衛の音は亂世の音なり。」註に「鄭衛の地は濱なり、大河沙の地なり、土薄き故に、其の人氣、輕浮なり、其の地平下なる故に、其の質、柔靡なり、其の地肥饒耕耨を貴さず、故に其の人の心、怠惰なり、その人の性情此の如し、其の聲音も亦然り、故に其の樂を聞かば、人をして此の如く懈慢せしむる也。」今は邪師の聲教に喩ふなり、此の一節は宗師を撰ぶべきことを述ぶ、是れ送行の故なり。

㋶無波李新恩。無波は叢し法號か、李は姓、新恩は官なり、秀才なり忠曰く、「文獻通考の選舉考に曰く唐朝勳あり、及第を賜ふ、以て特恩を表すと。」或抄に「無波は齋號又は軒號か。」

㋷達磨祖師。此の文十段なり。

㋸黃鐘大呂。前律歷志に「黃は中の色、君の服なり、鐘は種なり、天の中數は五、五を聲となす、聲は宮に上す、五聲焉より大なるは莫し、地の中數は六、六を律と爲す律は形あり、色あり、色は黃を上とす、五色焉より盛なるはなし、故に陽氣、種を黃泉に施す、萬物に孳萌す云云、子に始まりて十一月に在り、大呂の呂は旅なり言ふ意は陰大に黃鐘を旅助し、氣を宣べて而物を牙(きざ)すなり、丑に位して十二月にあり、」溪曰く、「廓然無聖の法曲を將つて、官商の正律呂に比す。」

㋹天聽無私。武帝契はず、達磨の奏する所、骨節旨を失するが故なり珠云く、「天鑑無私の如く、あらゆる天聽に達すれども、骨律節奏、武帝の旨を失ふ。」又云く、「なにを云ふも、達磨の心印の妙典をきゝとゞけられなんた。」失旨は拍子をうしなひたるなり。

㋺度江航葦。絕は度なり、航葦は佛祖贊の渡蘆のところにあり、見よ。珠云く、「蘆葦にうちのり、楊子江

而して ㋕大方の老禿兵、㋖又其の波辯を縱にして、文彩を雕割して、㋗從つて之を絡はず。㋘新學の比丘をして、㋙此の狐涎を飲んで、㋚身を終るまで脫し難からしむ。良に悲しみつべし也。㋛魯祖は僧に逢ふて面壁して坐し、㋜麻谷は僧を見て、便ち門を閉却す。㋝電光石火、㋞領と不領と俱に第二に落つ。㋟豈に肯つて類我類我といつて、㋠語言に墮在せんや。所以に㋡高山流水、只だ知音を貴ぶ、㋢鄭衛の門は、速かに須らく耳を掩ふべし。

㋣　無波の李新恩に示す。

㋤達磨祖師、西天より十萬里の水雲を歷て、此の土に至る。首め梁主に對して、奏するに㋥黃鐘大呂の聲を以てす、㋦天聽私なしと雖も、而も音節旨を失せり。㋧遂に江を絕り葦を航し㋨少林に面壁して、㋩直下に壁立萬仞を坐斷す歲月既に邁いて、㋪香風四に馳す、㋫名相を圍して、善く其の然ることを求むるものあり。㋬壁立萬仞の處に向つて、意旨を傾得す。禮三拜して、位に依つて立つ。則ち曰く汝吾が髓を得たりと。此れ降り已往、㋭宗分れ派列つて、壁立萬仞底の一著子を傳持して、㋮碁のごとくに天下に布けり、皎かなること日星の若し。此れ㋯大力量、㋰大根器、㋱大因緣に非ずんば、㋲率に湊泊し難し。去歲暑熱くが如し、㋳閣下㋴遠く孤頂を披いて、㋵直ちに茅廬に造る、㋶風標を揖することを獲たり。㋷語を出すの間に㋸已に佛法中の人たることを知る。今の士大夫は、㋹爵を尊び祿を崇んで、汲汲然たり。何の暇あつて、㋺分陰も此に及ばんや、㋻靈山に親

㋕大方。大乘。㋖文彩。文章。㋗從つて。從つて。㋘新學。新學。比丘。僧。㋙狐涎。狐の涎。㋚身。身。㋛魯祖。魯祖は僧。逢ふて。逢ふて。面壁して。面壁して。坐し。坐し。㋜麻谷。麻谷。㋝電光石火。電光石火。㋞領。領。不領。不領。俱に。俱に。第二。第二。㋟豈。豈。肯つて。肯つて。類我。類我。㋠語言。語言。墮在。墮在。㋡高山流水。高山流水。㋢鄭衛。鄭衛。㋣無波。無波。李新恩。李新恩。㋤達磨。達磨。祖師。祖師。㋥黃鐘大呂。黃鐘大呂。㋦天聽。天聽。㋧遂。遂。江。江。葦。葦。㋨少林。少林。㋩直下。直下。壁立萬仞。壁立萬仞。坐斷。坐斷。㋪香風。香風。馳。馳。㋫名相。名相。圍。圍。㋬壁立萬仞。壁立萬仞。㋭宗分。宗分。派列。派列。㋮碁。碁。㋯大力量。大力量。㋰大根器。大根器。㋱大因緣。大因緣。㋲湊泊。湊泊。難。難。㋳閣下。閣下。㋴遠く。遠く。孤頂。孤頂。㋵直ち。直ち。茅廬。茅廬。㋶風標。風標。揖。揖。㋷語。語。出。出。㋸已。已。佛法。佛法。㋹爵。爵。尊び。尊び。祿。祿。崇んで。崇んで。㋺分陰。分陰。㋻靈山。靈山。親。親。

を渡りて。」

㋨面壁少林。一統志に「河南府の少林寺は登封縣の西少室山の北麓にあり、後魏の時に建つ、梁の時には達磨此に居て面壁九年。」

㋩直下坐斷。直に擧揚の處なし。珠云く、「佛祖も眼を付け及ぼさぬ處に。」

㋪香風四馳。孝明詔をもたらして徵し、慧可風を聞いて赴く等。珠云く、「どこともの、四百餘州へ道德の香が匂ひわたつて來た。」

㋫圍名相。面。城を以て禽獸を愛ふと圍と曰ふ。香風名相を圍して來むるものは、即ち慧可大師なり、忠曰く、「二祖未だ佛心宗に歸せざる已前を謂ふなり、言ふ意は、初め教家の名相の爲めに圍拘せらる、後に制つて善く教外の旨を求むるなり、其の然るとは其の

遠磨を指す、然は相を離すの旨なり。」珠云く、「其の然ることとは教外の旨甚深などと云ふことを知りてなり。」

㋬壁立萬仞。珠云く、「外諸緣を息め、心を覺めて不可得なりと云ふところにをいふて。」溪云く、「壁立萬仞は投機の證なり。寶林錄にも見ゆ。」

㋭宗分派列。五宗七宗、みなもと南宗北宗分れ、流派別立す。

㋮碁布天下。碁の如くに布き、星の如くに列るは、其の周徧ないふ。

㋯此非大力量。猛勇にして正法を荷擔する底。

㋰大根器。深を聞いて怖畏せず精進薰鍊する底。珠云く、「崖に臨んで退く底のやかたではない。」

㋱大因緣。夙世般若の大因緣ありて、今日正法に會遇する底。珠云く、「生々世々、大因緣な

くては耳へ入らぬ、大切な心宗。」

㋲卒難海泊。壁立萬仞の故に、已上は從上宗趣の的旨を示す。

㋳閣下。大官の稱、忠曰く、「李新恩を指すなり、」閣と圍とは音義相通ず、すべて貴人の敬稱に用ふ。

㋴遠披孤頂。孤頂は山頭なり、この錄の延禍に云ふが如し、「萬松孤頂の雲と作ると雖も」と。珠云く、「孤頂は孤頂の雲霧を、往來もなき山頭をば、披は琴なり、はるゝ。」

㋵直造茅廬。茅廬は徑山を云ふ。

㋶獲揖風標。其の人の風儀標致なり。珠云く、「風致標貌を揖接することが出來きた。」

㋷出語。珠云く、「ぽつ〳〵はなすあひだに。」

㋸已佛法中人。珠云く、「今時の經薄なみ〳〵の人でない。」

㋹尊爵崇祿。珠云く、「位に目がくれ、俸祿に心が迷ふて、せか〳〵あがきまはる。」汲々は勤念にして休息せざるなり、「利に汲々たるが如し」と溫公も諫院記に云ふ。

㋺分陰及此。晉の陶侃、常に人に語つて曰く、「大禹聖人すら乃ち寸陰を惜む、衆人は當に分陰を惜むべし」と。及此とは佛法をいふ。珠云く、「寸分の光陰も無上の妙道のことは思ひ出さず、爵祿衣食のことのみ心に念ふ。」

㋻靈山親記別。記別の別は別に作るが正しと四教儀中の集解に出づ、分契なり。慧林の經音義には、「分簡(わりふ)なり」とあり、忠曰く、「佛其の人の後世に、如レ此如レ此なるべしと說くを經に記別といふ。」

㋼根於性者。佛の記別を承けて第八阿賴耶性に薰種するを云ふ。珠云く、「佛性に根本する

しく記別を承けて、㊅性に根づくものに非ざるよりは、㊆疇か克く闖らん邪。㊇玆に又藥輪を沐して、㊈衷曲披露す。㊉自ら愧ぢ自ら悔ゆ㊋道に於て切切たること、誠に知んぬべし矣。㊌夙業深重にして、㊍身塵勞に墮すと。喩すことを蒙る。㊎若し一念未だ興らざる己前に向つて、㊏輪廻生死を照破して、聖凡の情量に落ちずんば、㊐便ち是れ出塵の羅漢ならん。㊑何の戶牖の以て窺測すべきかあらん、㊒何の文理の以て揣量すべきかあらん。何の生死の以て怖畏すべきかあらん。何の佛道の以て咨參すべきかあらん、㊓鐵圍欒㊔是れ箇の清淨の慈門なり、㊕更に毫髮許りも欠少することなし。所以に、古德、㊖一言半句を垂れて、世の良藥と爲して衆生の㊗日用紛飛して、㊘有に著し、空に著するの病を治せんと欲す。㊙殊に知らず、㊚返つて以て病を執して藥と爲ることを、㊛良に悲しみつべし也。㊜數ふる所の如きんば㊝思ふ所と爲す所と、兩人あるが如し、㊞此れ皆浮塵の繫念より起る所なり。㊟若し能く思ふ所を推窮すれば、則便ち三人あり。㊠三人則ち一人、一人則ち三人なり。㊡乃至百千萬億人即ち是れ一人㊢一人即ち是れ百千萬億人なり。㊣者の㊤一人に和して、㊥新羅檀特國裏に歸向して、却つて㊦欺欺地に、㊧歸り來つて道く、㊨力と。㊩儞はこれ阿誰ぞ、㊪者裏に到つて、㊫便ち善財の彌勒樓閣に入るが如し。㊬勝妙の境界、悉く目前に在り、㊭誰だ恐らくは深信不及にして、轉た迷悶を增んことを。㊮但だ乎を下すことなき處に向つて承當し、無所得の處にして㊯受用せ

㊅性に根づくものに非ざるよりは。「性に根づくものに非ざるもの。」

㊆疇克闖耶。闖、通じて疇に作る。已上は無波の佛法を欽慕することを嘆美す。珠云く、「因緣なくては、かくはあるまい。」

㊇玆又沐藥輪。文藥筆輪。珠云く、「沐は恩に沐するが如きの沐にして、讀閱。」或抄に「沐は塗るなり。」

㊈披露衷曲。方寸の蘊む所、誠衷委曲珠云く、「覆藏なく仰せきけられた。」

㊉自愧自悔。蓋し夙業の重を愧づ、身の塵勞に墮するを悔ゆ珠云く、「蓋し胷中此の言あり佛法に力を得ず、今更口をしい。」

㊋於道切切。切急に之を求むること知るべし。此れはすべて來書を標す。珠云く、「切切は親切、又は懇切。」

㊌身墮塵勞。此の問意を救はんことを要す。珠云く、「妻子眷屬世間通事。」

㊍向一念未興。珠云く、「盆のことでもない、正月のことでもない、即今じゃ。」

㊎輪廻生死。珠云く、「地獄天堂上下四維の輪廻生死を脫却して佛だの凡夫だのと云ふ、分別を離れ切つて。」

㊏出塵羅漢。金剛經に「離欲の阿羅漢といふが如し、これ一切の塵垢欲漏を出離するなり名義集に、阿羅漢は不生、殘滅、應供等と翻す。」

㊐有何戶牖。戶牖は知識の門庭且つ善別の境界をいふ、牖は垣なり、小城なり、珠曰く、「轉廻生死を破照する境界なれば、戶牖を窺ふことも文理を量ることも、生死を怖ることもない。」忠曰く、「蓋しみな問書中の語か戶牖を窺ふとは少分を見るなり、佛理の少分を見ることを得んと欲するなり。文理を揣量する者、佛語祖語の文言の理致なり。」

㊑有何文理。揣は楚委の切。是なり、高下を度るをいふ。珠云く、「文古道理。」

㊒鐵圍欒。沒巴鼻。珠云く、「內もなく外もなく。」

㊓清淨慈門。佛境界を謂ふ、「珠云く、「これを知らぬゆゑ、生死流轉となる、無孔鐵鎚當面拋。」

㊔無毫髮許。畫圓成の故なり、此の一節は直に蒼破す。

㊕一言半句。珠云く、「涅槃に入らず、背觸す。」

㊖日用紛飛。妄念紛飛散亂。

㊗著有著空。有に著するの衆生を見れば、爲に無相を說く、只だ二邊の病を治するなり、別に一定の法なし。

㊘不知。珠云く、「それじやものを、思ひもよらぬこと。」

㊙執病爲藥。今夙業塵勞の嘆は古德の教戒の因つて生ずるところなり、却つてこれ二邊の病を出でず、珠云く、「今時のものゝ病は知解情識、その知解で、生死出離の藥とする及びもない。」

㊚良可悲。此の一節は教戒に泥んで、旁に忘念を起すことを責む。

㊛如所教。來書に教示するところ。

㊜所思所爲。思は塵勞を恐るゝ底、爲は塵勞に墮する底、珠云く、「自ら愧ぢ自ら悔ゆ、身塵勞に墮す等、つねのしわざなり。」

㊝此皆浮塵。浮塵は其の體虛妄にして、所據なし。珠云く、「とらへやうもない、たはいもない妄想。」

㊞若能所御。所思を推究すれば必ず能思の人あり、共に三人

なり。珠云く、「思ふ所と爲す所との二を、よく〳〵思案して見るものと、三人あるやうな。」

㋐三人則一人。見分相分、自證分共に一心を離れずの故に、珠云く、「腹の中に魂が三つあるやうな。」

㋑百千萬億。珠云く、「日用紛飛の念直にこれ一念心上なり。」

㋒一人即是。恒沙の心數、一心を離るゝの外、異體あるにあらず。珠云く、「鈴鼓の鬼神のやうに。」

㋓和者一人。珠云く、「其の百千萬億人を根本一人にして。」

㋔掃向新羅。淨慈の後錄に、所謂無生國裏に豎向するの意なり。新羅は朝鮮國のうちなり五代の唐の時王建高氏に代つて地を闢き、益々廣め、古の新羅百濟を并せて一と爲す。檀特は西域の地、彈多落迦なり、東西の外夷を舉ぐ、珠云く「背觸をぶちやぶれ。」

㋕却欺欺地。珠云く、「しづ〳〵、のつし〳〵と。」徐なり、ゆるやかなり。

㋖歸來道囝。珠云く、「我が屋へとつくりもどつて、」囝は「さあ」「かあ」なり。〈その下から力を入れて出すこゑ。唐人の船を牽くこゑなり。

㋗儞是阿誰。顏子坐忘の境界、徑山の後錄に見ゆ。珠云く、「おれは誰れじや」と。或抄に「囝といふ底のもの、これ何物ぞ、儞はこれ誰ぞとみつけうる底に到らねば、眞の一人にあらず。」

㋘到者裏。珠云く、「とつくりと到著して見ると。」

㋙善財彌勒。これは頌古の部に詳なり、又寶林錄にも見ゆ。

㋚膠妙境界。珠云く、「殊勝不可思議」、又云く、「六方恒沙の諸佛心、此の一指頭」、くはしく舊華嚴六十の入法界品に「衞時、善財童子、敬遶ニ彌勒菩薩、合掌白言云云」とあり、看るべし。

㋛性恐深信。此の一節は來書の旨趣兩般なることを責めて、一道掃蕩の要を示す。

㋜無下手處。珠云く、「さしもゆるさず、しばし射てみよじや。」

㋝受用即是。珠云く、「飯を喫し便を放したり、第二第三とぐづついつたことでない。」

㋞直截簡徑。此の一節は別に頓超の路、省簡徑要の方を示す。

㋟門下。門下、閣下、皆大官の稱、李新は蓋し高位のみ、黃門となりしを以てなり、李が官なり。

㋠難知其病。珠云く、「知解情識、浮塵繫念皆、是れ病。」

㋡自作障礙。謂はゆる夙業重くして塵勞に隨す、此の念自ら道を障ふ。珠云く、「自業自得の病。」

㋢自然無思。攀緣不可得の處に向つて看過せば、必ず所思悉く服從すべし。前段の言を繼ふて結歸す。珠云く、「みなのはらにある、王寶殿に登るが如く、きまゝ一ぱい。」孟子の公孫丑にも「無思無服」とあり。

ば、便ち是れ第一等の㋟直截簡徑の法門ならん。

㋠門下、其の病を知ると雖も、而も㋡其の病を去ること能はざるものは、㋢乃ち自ら障礙を作すなり。請ふ、壁立萬仞の處に向つて看よ、㋣自然に思ふとして服せずといふことなけん。

㋤日本國の心禪人に示す。

㋥佛法の至要は、㋦初めより殊方異域の間なし只だ當人の㋧不羣の氣槩を負ふて、猛に㋨精彩を著けて、直下に一切の得失是非を坐斷して、㋩信得及し、把得定して、㋪狐巍峭峙にして、㋫生涯を立せず、㋬靜照無私にして、㋭靈然として自得せんことを要す。切に㋮無明窠子の裡に向つて、㋯安りに卜度を行ずることを得ざれ。㋰纔かに聖量を存すれば、關感通せず、㋱更に須らく那邊に轉向すべし。㋲青天の怒雷、飄

㋤心禪人。元亨釋書を按ずるに松島の法心、鷲峰の疊心、共に宋に入つて法を得、然れども虛堂に見ゆるの事なし、舊說に云く、「明心西堂なり、海月と號す、法を大川に嗣ぐ」龍溪抄に「南禪寺前の草河長老となすは非なりと、忠は歸殿せり、草河は眞覺上人、名は思順天祐と號す、入宋して北澗簡に嗣ぐ。」

㋥佛法至要。珠云く、「この文は二段なり、至要は本來の面目のこと。」

㋦殊方異域。六祖の所謂人は即ち南北あるも、佛性豈に然らんやの意なり。珠云く、「天竺の唐土のと、昔の今の男の女の差別はない。」

㋧負不羣氣槩。出羣拔萃。

㋨精彩。或抄に云く、「なほ智光と言ふが如し。」精神光彩。

㋩不立生涯。珠云く、「生涯は活計なり、見處を認めて泥滯する、是れを活計生涯と云ふ。」

㋪靜照無私。寂靜智照物を鑑み私なし。或抄に「靜照は定惠。」

㋫信得及把。珠云く、「背觸だにぶち破つてあるならば、生死を說すと、信得及し把得定す。」

㋬孤巍峭峙。峻峙は屹立なり。珠云く、「須彌百億、脊梁骨、天に二つの日なく、地に二つの王なしと云ふが如し。」

㋭靈然自得。已上は直下修入の要門を示す。珠云く、「我れしらず不思議に手に入り來る。」

㋮無明窠子。珠云く、「煩惱の穴の中。」

㋯妄行卜度。意識に落ちて工夫を費すを謂ふ。

㋰纔存聖量。忠曰く、「幽感はなほ交涉といふが如し。」聖量は佛見法見、枵殿に云く、「若し聖解を作さば、即ち群邪を受けん」と。今言ふは只だ箇の聖量

風の灑雪の如くにして、㋓自然に頭頭礙を出でば、㋔至要の妙と㋕冥に相脗合せむ。㋖行脚の大事を辨せずることを患ひざれ、㋗生死の漏念脱せざることを愁ひざれ。無依無欲の地に㋘逗到して㋙理事混融し、功動絶待して、㋚方に自己の家珍を運出して、孤陋を賑濟して、孤ならざるべし。㋛遠く鯨波に泛んで、知識を參尋す今則ち故都に還らんと欲す。㋜月朗かに風高く㋝日を指して到るべし。却つて㋞從上の所得を將つて、㋟大根を啓迪して、日本國内をして悉皆成佛せしめて、㋠無餘ならば、誠に忝ぢざらん也。苟或尚ほ知見を存して、㋡區宇に墮在せば、更に須らく再び海を過ぎ來るべし。㋢老拳終に安りに發せじ。

㋣　行者智潮に示す。

㋓自然頭頭。珠云く、「聖量とはすこしでもをれば、此れほどの事を得たと思へば、一關は玄關、惑は惑動、此れを悟門となす、然るにわづかに聖量を存せば、則ち悟路塞る。」惑の字に帶濁の義あり。

㋔更須轉向那邊。那邊は聖量等の念未だ生ぜざる已前を指す。珠云く、「智見不及の處。」

㋕冥然雷。胸昇清冷凛々然たり。珠云く、「物に依倚せず、沒蹤跡じや、快活脫洒の義。」

㋖自然頭頭。珠云く、「背觸が手に入つてくると自然に出レ礙は出身の一路をなり。」

㋗至要之妙。首めに所謂佛法の至要。

㋘逗相脗合。脗は音「ふん」、波際なきこと。莊子の齊物論篇に曰く、「日月に傍き、宇宙を挾んで、其の脗合を爲す」と注に脗合とは渾然相合して縫牀なき也。珠云く、「ころ〳〵と同體とならん。」已上は勞を遣し正を示す。

㋙行脚大事。珠云く、「只だ是れ背觸三昧、無字一片。」

㋗生死漏念。溪云く、「此の二の者は祟佛の大旨なり、今之を患ひざらしむ、眞筒深要の方なり。」珠云く、「生死解脫するとは、絶念を當の諸漏つきたる了事の衲僧のこと。「不レ愁とはそれも、まあ、なげくことはない。」

㋘無依無欲。一向に就し將ち去る。珠云く、「脫體背觸の端的須彌山をおつ立てた如く」と。

㋙理事混融。如上の地位に到つては則ち覺行圓成するが故に所謂大事漏念の理事、自然に無礙混融し去る、其の功動實に對待を絶するなり、珠云く「理は空諦、事は假諦、混融とは、とろ〳〵と葛粉をといたしなり。「俗結角」といへり。

㋚方自己家。賑は贍なり、濟なり、今ば利他の謂なり、已上は自己統一に做し將ち去珍て、然して後人を利することを示す。珠云く、「自己家珍鱗の寶ではない、孤陋は門外の窮子苦の衆生、不レ孤は、かたみひいきはせぬ、孤獨自利の二乘の穴におちぬやうに。」

㋛遠泛鯨波。萬里の遠海を謂ふ。珠云く、「鯨は大海に非ずんば居らず故に洪波又は鯨波といふ、心禪人日本國より大法を求むるが爲め來るを云ふ。」

㋜月朗風高。珠云く、「天氣も晴れわたり。」

㋝指日可到。珠云く、「日出づる處をば。」

㋞將從上所得。珠云く、「初め宋國へ渡り、辛苦して得たる。」

㋟啓迪大根。啓迪は開發なり、大乘の根器を開導するなり、書經の太甲上に「後人を啓迪す」と、注に「子孫を開導するなり。」

㋠無餘。無餘は、有餘に對す、餘すことなし、眞究竟なり。

㋡墮在區宇。この語は寶林錄にも見ゆ。珠云く、「なまじひにはこの中にをらば、小刀細工小家の中に。」

㋢老拳終安。重ねて爲に點發すべしとなり、已上は得法、歸鄉の事を述べて兼ねて開法來道の心を激發す。珠云く、「老拳とは、めつたにはあたへんとなり。」

㋣行者。釋氏要覽上師資の部に「行者は善見律に云く、善男子ありて出家を欲求す、未だ衣鉢を得ず、寺中に依つて住せんと欲するものを、呼頭波羅沙と名づく、今詳にせば、此の方の行者の若きならん」日本の五山などには、むかしありし、無知無得法尚ほ捨つ可し、何ぞ況んや非法をや、すつきとあいてはない、絶待じや。」或抄に云く、「これは行脚の大事、これは自利をいふ。」

㋤優婆塞。この譯、本文中にあり、この法語は四段なり、珠云く、「この法語中そとばくの工夫あり。」

㋥四衆之一數。諸經に、所謂比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の四部の衆。

㋦精持苦行。珠云く、「精進持戒。」名義集に「優婆塞は唐には近事男と言ふ、近事といふは諸佛の法に親近承事する故に」と。

㋧來道業兩。虚行者の禪巖碓坊の門に於て身賤役に服し、精苦承事して終に道業を成し、衣法を傳へて然して後に南海に到つて剃髮得度するが如し。珠云く、「無上の妙道を得たいと云ふが、第一番じや、出家得度、剃髮染衣の身となることは次ぎじや。」

㋨悉舍僧房。殿堂僧房。

㋩莫不有之。珠云く、「行者發心求法のもの。」

㋪款入中國。中國は大唐なり、譯は

㋐優婆塞といふは、吾が佛の會中、㋑四衆の一數なり。㋒精持苦行して、佛僧に承事して、㋓道業を先にして得度を後にす。世尊入滅して、道法遐に五天竺國に被らしめてより、㋔佛舍僧廬に㋕之れあらずといふこと莫し。㋖敎、中國に入るに遠んで、梵語を譯して唐言を正ず、之を名づけて行者と曰ふ。藍し㋗有德有行の所稱なり。㋘其の數既に廣し、漢唐より以來、㋙官を設け局を置いて試經得度す。㋚海內の奇髦俊彥の、㋛寒暑を冒歷して、㋜經を窮め論を討ね以て所業を試むるに至つては、其の間に㋝僧科に中ることを獲るものは、㋞官より黃牒を給ふて、剃度して僧と爲す。然して後、㋟雲を肩にし絲を頂にし、㋠艱を履み險を涉つて、數千里の遙なるを憚らず、師を尋ね道を訪ふて、㋡人天性命の學を究明す。㋢醞釀すること既に久しうして、㋣文彩發露するときは、㋤王臣尊禮して、人天の師と爲る。㋥一言一句、㋦光明殊勝にして、㋧後世の法と爲る。㋨此れ古今の通論、㋩出家兒の大禮なり、㋪南渡の後、㋫吾が敎の日に興るを見る　爲に、㋬綾紙を出して緒幣に易ふ、㋭庶はくは得るものゝ寡うして入るものゝ稀ならんことを欲す。㋮殊に知らず㋯物は事に隨つて變ずることを。㋰一たび利域に隨すれば、㋱百計紛拏して、㋲以て進納の計を謀る。㋳之を得るものは、㋴形服殊なりと雖も、㋵事海に昇沈す。㋶之を失するものは、㋷窮困相煎じて、㋸山澤に老斃す。㋹前人の敎海に優游し、文義を披尋して、㋺所得を試みられて、法服を披るものの如くならんことを要すと

陳なり、內外の言を陳說するなり。「正」唐言」とは優婆塞とは近事男のことゝまぎらはしくないやうに」と珠抄にいへり。

㋗有德有行。已上は行者の來由名義を述ぶ。珠云く、「道德を具有し、正行を有するの名とすべきなり。」

㋘其數既廣。珠云く、「優婆塞と云ふに、かず〳〵あり、書老少壯、又正事男と云ふ、順緣逆緣の發心さま〳〵ある。」

㋙設官置局。行者の數廣大の故に、官を設いて之を治す。漢の明帝の特恩度僧、唐の中宗の試經度僧、宋の仁宗の試天下童行等なり。珠云く、「官は奉行、局は役所、官人の所居なり、出家のもの、知識ともなるべき者は許す、其の人器量才智を試みて、出對を許さる。」

㋚寒暑。冒は犯なり、珠云く、「冒歷は身にうけ蒙むるなり。」

㋛窮經討論。珠云く、「佛經の意を研究し、論藏の旨を探討す以てそのしわざをためす。」

㋜僧科。品科で、僧侶の試驗。

㋝官給黃牒。黃牒のことは育王錄に見ゆ、勅書なり。

㋞肩雲頂絲。雲を肩にすとは袈裟を搭するを謂ふ、絲を頂くとは白髮をいふ、言ふ意行脚して年數を歷るなり。珠云く「頭に雪をいただいた如く、まつ白になるまで行脚をする。」

㋟艱。涉險。珠云く、「四海九州艱難を越えて。」

㋠人天性命。珠云く、「性命の學とは本具底の佛性、本命元辰の道學をきはむ。」

㋡醞釀既久。造酒の言を以て修練長養の功に喩ふ。珠云く、「醞釀は久しく釀すなり、十年二十年、滯行密用。」

㋢文彩發露。囊錐方に露はる香風四に聽す、珠云く、「道德の文彩。」

㋣王臣。王公大臣の歸依。

㋤一言一句。一言吐き出せば。

㋥光明殊勝。日の如く月の如く爲後世法。末世末代の法則となる。

㋦此古今通論」相違のない定り

㋧出家兒之。已上は得度得果、始末之大段を述ぶ。

㋨南渡之後。宋の高宗、汴より杭に移る、已下の七主を南宋と稱す。忠曰く、「大金の兵、徽宗、欽宗を以て北に歸る、徽宗の子康王、臨安に即位す、此を南渡と爲す。」

㋩吾敎。佛法なり。

㋪出綾紙。綾は紋帛なり、緒記通塞志を按ずるに「紹興三年八月治平の末より始めて度牒を鬻ぐ、舊は黃紙を以てす、印造僞爲のもの多し、戶部朱異始めて奏して僧道をして勅綾牒を用ふ。志磐曰く、但だ紙牒を用ひ、之をして辨じ易からしめ、今既に汙し賣る、其の價を重うせんと欲す、故に勅綾を用ふ、品官の告身に比例す、亦朝廷の僧を重んずるを見るなり。」珠云く、「今は綾紙を出し、昔の緒幣に易ふ、すなはち交鈔なり、だん〳〵納官錢が貴くなるゆゑ、ふだつかひにかへる。」前の淨慈錄に見ゆ。

も、ケ復た得ることなし也。智潮、フ近事すること且つ久し、凡そコ衲子の往來して、サ或はケ凡勘辨引驗し、シ或は驚罵呵咄するを見て、ス凡に隱り壁に聽いて、セ善本激起す。ソ紙を捧げて下拜して、タ願はくば法藥を求めんといふ。チ老僧覺えず大笑す、ツ然も佛なしと雖も、テ也た放光を解す。ト筆に信せて姑く梗槩の萬一を述べて、ナ以て勤勞に酬ゆ。要且つニ一點も佛法の道理の、ヌ汝が耳根を汚すなし。之を思へ。

走名奔す、珠云く、「世間有漏の事海に昇沈して、眞實解脫の志なし」ノ矢之者。上に反す、珠云く、「志あるものでも金銀が乏しく。」オ窮困相煎。其の急迫を謂ふ。ク老鼈山澤。鼈は仆るなり、死するなり。珠云く、「深山大澤にをひくづほれて、」又云く、「公議がすまぬゆゑ、山林の中に老いくちてしまふ。」ヤ優游敎海。珠云く、「佛祖の敎海に優游するは、ゆたかにおよぐこと、敎經をとつくり見とほすこと、文句義理を披見尋覓する。」或抄に、「前人は度牒。」マ試所得而。前の試經得度の人を謂ふ。ケ無復得也。已上は度牒を欲して、利途に涉るの弊を遠ぶ。珠云く、「默息倦りあり。」フ近事且久。珠云く、「智潮は行者を近事男と云ふ故、佛僧に近事すること久し。」コ衲子往來。珠云く、「行脚の衲子。」サ勘辨引驗。引驗證明。珠云く、「背觸はどうじや、隻手はどうきいたと勘辨し、引接點驗し。」シ怒罵呵咄。珠云く、「怒罵はこれ古風なり、人情存せず。」ス隱凡壁聽。洞山密に曹山に付し、跡山身を凡下に潛めて竊に聽くの類なり、この錄の立僧晉說に見ゆ吾が宗を慕ひ求めて、凡により壁間にきく。セ激起善本。善心の本根を憤激發起す。ソ捧紙下拜。珠云く、「紙を捧げて法語を乞ひ、下頭拜手。」タ願求法藥。珠云く、「御示を願ふと云ふて來た。」チ老僧不覺。其の下愚を忘れて法を希求するの善心を愛す。珠云く、「奇怪なことを言ひ出したと大笑す。」ツ雖然無佛。珠云く、「見性の眼はなけれども。」或抄に云く、「行者の自己の眞佛未だ現露せず。」テ也解放光。智潮が心上未だ眞佛現前せずと雖も、今此の淨善心を發して般若を求む、謂つべし放光を解すと。珠云く、「深心眞に放光。」ト信筆姑述。梗は略なり、出家來道の大略を述ぶるなり。ナ以酬勤勞。近事の久しきに依るなり。ニ一點佛法。珠云く、「芥子粒ほども藏通別圓、四諦十二因緣等の佛法の道理。」ヌ汚汝耳根。所謂佛の一字、心田を汚すが故なり、此の樓を以て宜しく護持思念すべし、已上は智潮之を求むるに依つて其の意に應ず、且つ法の繫縛を施さゞるを遠ぶ、珠云く、「若し一點でもあらばじや直下に是れ水を汲めばくむまゝ、茶を飲めばのむまゝ、此の外に一點もなし。」鶴林(白隱)大師曰く、「息耕老師智潮に示すの一篇、者般惡毒の爛葛藤、惜むべし孝子不レ逐レ虎、呵呵」と。或抄に云く、「畢竟佛法は外にあるものでなし、故に我れ筆を勞するも、汝が耳根を汚すなじやと。」

ネ庶得者寡。綾羅辨し易からざるが故に、僧中に入るもの稀なり。或抄に云く、「綾紙は價高きが故に。」ノ珠不知。珠云く、「大きなことのまちがひ。」ハ物隨事變。珠云く、「世界の事と云ふものは貴い、勢狀なれども投人の取りあつかひが設々風儀かはる。」ヒ一隨利域。珠云く、「その後は賄賂を以てすればどんなものでも出家をゆるされる。」フ百計紛拏。拏ほ奴加の切、通じて拏に作る、女居の切、亂に相搏持するなり、珠云く、「みぐるしい袖の下にとりみだす。」ヘ謀進納之計。珠云く、「貨錢ちつとでも餘けいにとりこむ工面。」又云く、「さつぱり公儀の御益にことよせて、試經試業もむようになつた。」ホ得之者。進納の計を得るもの珠云く、「出家の度牒を得るものは。」或抄に「度牒錢を朝廷に納むるものを云ふ。」マ形服殊。形は圓頂、服は方袍なり、謂つべし世人の形服と殊なり。珠云く、「すがたは出家らしくすぐれたれども。」ミ昇沈事海。世事に參與して利

法語終

序　㊀跋

㊁金剛經の序

㈠入城、持鉢、洗足、宴趺、㈡幸に自ら可憐生、㈢端なく善現に出で來つて、箇の希有と道はれて、㈣伎倆消盡す。直饒ひ㈤分分字字、葛藤を說き盡すも、終に是れ㈥註解し出さず、㈦子休禪人、㈧其の敗闕の處を知つて、㈨三十二人を率ゐて、㈩力めて之が與に耻を雪む。儻し⑪毫端未だ擧せざる已前に於て、⑫黃面老子を救ひ得ば、⑬偉ならざるべけん哉。其の⑭紙を引べ墨を行ぬるが如きんば、⑮劒去つて久し矣

㊂梵書の心經に跋す

㊂橫鈎の三點、月に似星の如し。㊃老胡機關を

㊀序。叙と同じ、又緒なり。

㊀跋。殿なり、後序を謂ふ。

㊁金剛經。大般若波羅密多經の第五百七十七卷能斷金剛分といふあり、同じき經なり、唐の玄奘三藏の譯なり、この金剛經と云ふ單行本は、姚秦の鳩摩羅什三藏の譯したるものならん。金剛は金中の精剛、至堅至利、能く萬物を碎く、此の經能く衆生の疑執を斷す故に名づく、經は典常と訓ず

㈠入城持鉢。法會因由分、珠云く、「佛、舍衛大城に入り、持鉢乞食訖つて、本處に還り至つて足を洗ひ、已に座を敷いて坐す。

㈡幸自可憐生。憐は愛なり、言ふ意は入城等の如き、一一天眞任運にして、敢て奇特玄妙の人耳を汙すなし、幸に自ら愛すべしと。珠云く、「虛堂が五字に云ふておいた、此れを見るに、きつい段のある事じや。」或抄に云く、「一言半句をとがめ處、みごとな境界。」

㈢無端被善。端なくとは、「ゆくりなく」なり、善現の事は栢巖錄に見ゆ。善現起請分。珠云く、「如來の甚深の處を見付けて。」

㈣伎倆消盡。言ふ意は善現に勘破せられて、世尊の巧能已に消盡するなり。珠云く、「如來も鼻油を引いて居た處に希有なり、世尊と云はれて。」

用ひ盡せども、ㇾ一生拈弄し出さず。若し更に其の㋕象象曲曲を伽へて、㋖自ら海外より得來ると謂はゞ、何ぞ㋗楚人の雞を以て鳳と爲るに異ならん。㋘恁麼なることを得んと要せば、直に須らく盡大地の明眼の㋙譯師、㋚口を啓く處なうして、㋛方に斯の旨に合ふべし。

㋜應庵和尚の書に跋す

㋝圜悟道く、「蘄州于、㋞得ることは則ち得たり腦後に一錐を少く」と。㋟虎丘に見えて、牛窓欞を過ぐるに逮んで㋠頷然として頓に脫す」。㋡東山正續を起すこと、㋢杲日の天に麗いて、衆星の耀を掩ふが如し。㋣凡そ片言隻字も、江湖に落つれば、之を得る者、夜光を獲るが如くす㋤道の人を感せしむること此の如し。㋥嘗て蓮華峯の諸衲と往來す。㋦其の書飾を觀るに、㋧

㋨分分字字。一分二分、三十二分。

㋩註解不出。善現の勘破する所は、即ち解前の妙旨なり、豈に註解し得てん乎。珠云く、此の希有なり、「世尊と云ふた端的はじや、とても〳〵。」

㋪子休譯人。功德主。

㋫知其敗闕處。佛の敗闕を知つて。

㋬準三十二人。蓋し惟忖するに子休三十二人を準ゐて、經中の三十二分を以て各各一分を書して師を請じて序を製せしめて、以て供養に充つるなり金剛洪武の註を按ずるに、「三十二分は相應へて梁の昭明大子の立つる所と爲す、元の譯本にはなし」、或義に、「子休三十二家の註を準集したる乎、今十七家の註あればなり。」

㋭力與之雪恥。雪は洗なり、淨を以て義と爲す、或抄に、「之れは世尊のために。」

㋮毫端未舉。珠云く、「一筆をもたぬさき、背觸の中に於て。」

㋯黃面老子。珠云く、「希有なり世尊と云はぬ前に、合點したならば、爭竟無字の金剛こそよけれ。」

㋰可不儻哉。倚は奇なり、大なり。

㋱引紙行墨。紙をひろげ墨をつけまはる。

㋲劫去久矣。この語は寶林錄に見ゆ、運は刻の義初めには詮下の深旨を激示し、子休已下は今の功を嘆し、且つ腕力を出して結す。

㋳梵書。漢字に譯せざる底なり紀談上に曰く、「心經は乃ち唐の太宗玄奘法師に詔して譯する所、纔に五十四句二百六十七字耳、夫の大般若經六百卷を該ねて、賢首等六人の註疏を敢む。」本朝の叢林、梵語心

筆力清勁にして、㋴鳳鹿翔舞す、㋵人をして之を畏れしむ。

㋸横鈎三點。この文は珠云く、「三段なり、是れ心の字を表す横鈎は月に似て三點は星の如きなり。」珠云く、「鈎を横へ三點を下す、橫鈎月に似て三點星の如し」

㋹老胡機關。報恩錄の結夏にも見ゆ珠云く、「老胡は錯錯を云ふ、四十九年說き盡せども、此の心字を說き盡す事はならぬ、機關は度生方便を云ふ。」

㋺一生拈弄。已上は心を讚嘆す。珠云く、「とうとう、からくりの錄をひねくりだされた。」

㋻象々曲曲。象は音「ろく、」木を刻むなり、共に禁字の迂曲を表す。

㋼海外得來。西域は出ち外夷なるが故、海外と云ふ、珠云く、「紙にかいたは經ではない。」

㋽楚人以雞。誤つて鵝を以て貴と爲すの義、事は寶林に見ゆ。已上は經を讚ふ。雪ふ意は此れを以て心法と作す、大に誤り了れり。」

㋾要得恁麼。恁麼は今語當の義。

㋿譯師。法語に見えたり。

㌀無啓口處。已上は梵書なり、珠云く、「面目を見た人でなければしらぬこと。」

㌁應菴和尚書。偈書なり、此の跋は三段なり。

㌂圓悟遺。應菴錄に、「蘄州黃梅の人、族は江氏。」このことは松源錄の普說に載す。

㌃得則得腦。珠云く、「つんふり全身大道である、たゞ一錐の不足があるとは、あいつだと云ふことをしらぬ。」大悟を嵗くをいふ。

㌄虎丘牛過。蓋し此の話に參じて大法を明むるのみ、本錄に云く、「雪居に至りて圓悟を禮す、悟一見して痛くために提策す、悟の窗に入るに及んで、指して彰敎に見えしきなり。」珠云く、「牛窓欞を過ぐるに逮んで頷然として脫す」

㌅東山正續。珠云く、「東山は五祖法演なり、虛堂、臨濟正宗とは云はずに、東山正續の統を起すと云つたと、雲門宗の中興なる故なり。」

㌆杲日麗天。杲は明なり。以て應菴に比す、衆星を以て諸方に比す、已上は應菴の諡實超邁することを述ぶるなり。珠云く、「應菴の道光りて、天下の螢火はなくなつてしまう、敎虎丘に移る、師待して行く未だ半載ならずして頓に大法を明らむ。」上の圓悟の言并に師の悟緣を收めず。

㌇頷然頓脫。上の一錐を承けて囊推頷脫の事を用ひて、以て大悟の義をさとす事は寶林錄に見ゆ。珠云く、「禪宗にかうした換骨のあることを知れ。」頷は環なりと史記注索隱にあり。

㌈東山正續。珠云く、「東山は五祖法演なり、虛堂、臨濟正宗とは云はずに、東山正續の統を起すと云つたと、雲門宗の中興なる故なり。」

㌉杲日麗天。杲は明なり。以て應菴に比す、衆星を以て諸方に比す、已上は應菴の諡實超邁することを述ぶるなり。珠云く、「應菴の道光りて、天下の螢火はなくなつてし

腦の會あり、忠曰く、「日本鎌倉建長寺に傳簡す、現刊の關溪和尚語錄尾に附刊す」と。

まう。

㋐片言隻字。雲水家の手に落つを喜ぶ。

㋑道之感人。此の小節は人の其の書を寶惜するを述ぶ。珠云く、「道德は正續の統を起されたゆゑ。」

㋒蓮華峰諸。蓮華峰は天台にあり、即ち雲門宗の祥庵開法の地なり、往來は書を以て相酬酢するなり、書は應菴。

㋓見其書飾。飾は論語の憲問に「子羽之を脩飾し」と、註に「脩飾は之を增損するを謂ふ」と、今は只だ文飾の意か、珠云く、「書畫整飾で、墨跡見事なるを云ふ、體彩をいふ」

㋔筆力清勁。勁は健なり。清はあかぬけ、勁は手づよし。

㋕風度翔舞。風度は風儀法度、翔舞は鸞翔り鳳舞ふ、これ其の文章變化の妙なり、珠云く、「手跡の流義自燈自在なるを云ふ。」

㋖使人畏之。其の風度此の如し。故に人をして畏敬せしむるなり、此の小節は直に文の美を嘆ずるなり

序跋

眞讃

㋗自讃

㋘不開罵人口、難以見其慈。㋙不徵衲子病、難以表其師。㋚似之則殃門添禍、㋛否之則鳳林吒之。㋜畫工筆熟不識伊、㋝白髮毿毿箇是誰。㋞咄。

㋟蓬萊宣長老の請

㋠啐啄之機、㋡臨崖一拶。㋢虎嘯龍吟、二九十八。㋣宣禪自是惡寃家、㋤學伊豈止頂門瞎。

妙源首座の請

㋥道不可傳、㋦貌不可繪。㋧冷坐深雲、㋨虎眎百怪。㋩源遠流長滅正宗、

㋪眞讃。眞は眞影寫照、贊は人の美を稱す、忠曰く、「生貌を圖畫するを眞と謂ふなり、」「昔し漢の司馬相如が初めて荊軻を贊す、その詞亡すといへども、後人之を祖として、著作甚だ衆し、唐の時、用ひて以て士を試むるに至つて則ち其の世の爲めに尙せらるゝこと久し矣」と文體明辨四十八に出づ。

㋫自讃。蓋し自ら畫工に命じて眞影を圖せしめ、又自讃を製して將來に遺すなり、後面は皆門人の請に應ず。

不開罵人口。怒罵呵咄は皆乖慈門の故に珠云く、「學者を接しあまくちではいかぬ、此れを禪宗の慈といふ、又在家では父を慈母を悲といふ。」

㋬不徵衲子病。懲迦じて徵に作る、戒なり、珠云く、「好き醫師の、躰中の邪毒をおいはらひ、病をなほすか如くなる、此れを眞の師といふ。」

㋭難以表其師。宗師の職分の故に。

㋮似之則殃門。似は肖像の故に言ろは本形肖像、重重禍を惹き來れり、珠云く、「本形已にこれ殃形を圖して相似たらば則ち殃の上に又禍を添ふ。」

㋯否之則鳳林。方語に、「注解不得」と顯孝錄に出づ。珠云く「似ざるときは、若し一向に本形に似ずんば則ち杜撰胡亂。」

或抄に「胡亂に指注するの義。」

ハ畫工筆熟。伊は眞を指す、珠云く「張僧繇でも畫舟でも、中々ゑがきうることはならぬ。」

ニ白髮穆々。穆は音さん、毛の長きなり。

ホ咄。珠云く、「やい、虛堂はどこに居るぞ」と。

ヘ蓬萊。これは寺名か

ト啐啄之機。師資因緣、會遇の機感なり、鳥の殼を出づるが如し、子啐し母啄す、同一時なり、珠云く「自己と公案と心と境と交徹したる端的。」

チ臨崖一拶。萬仞懸崖、放身命の處に臨んで翻地に一拶す、是れ則ち啐啄の機、投合の時節なり、宣公と師資の緣、合することを表す、珠云く、「うんとおし落されて、ふつと息をふき出すと直に虎じゃ。」

リ虎嘯龍吟。此の兩句は師資優劣なきことを表す、たとへば虎嘯くと龍吟ずと二九と十八との如し、珠云く、「臨レ崖一拶、大死一番したの上のこと故。」

ヌ宣禪自是。宣公、寃家結び得て法嗣と成る故に。珠云く、「おぬしどもあだかたきではない。」

ル學伊豈止。伊とは紙帽に露るる底の眞を指す、頂門睹すとは本分の那一眼を睹するを謂ふ、言ふ意は頂門睹すると雖も、唯に非ず、吾が正法赤裸却すべしと、珠曰く、「虛堂がまねをするな、頂門ばかりではない、一切智何もかも皆睹す。」

ヲ道不可傳。眞道無體の故に、珠云く、「傳ふべきは眞道に非ず。」

ワ貌不可繪。眞佛無形の故に。珠云く、「繪くべきは眞貌に非ず。二句に妙の字を含む。」

カ冷坐深雲。空山の最上に坐するを謂ふ。珠云く、「此の虛堂は何ともしれぬ處に居て、冷坐は煩惱菩提迷悟凡聖の沙汰ない、ひえきつた處にゐてじや。」

タ虎師百怪。百怪は百獸の妖怪、以て諸方の異解邪見をたとへる。珠云く、「出たならば食つてくれようと、しりめににちむ。」

レ源遠流長。これは源の字を打す、所謂源深うして流長し、正宗を滅するとは臨濟の正法眼藏を三聖に付屬の機を用ふ、妙源は乃ち的子の故に。珠曰く、「佛祖の不識の源より出づ。」

ソ睹驢趁大隊。外面正法眼藏睹驢邊に向つて滅却するの緣を取つて、底裡に正傳は諸の旁出に同じからざることを稱す。珠云く、「如來の藏通別圓も、祖師の一千七百則も皆佛性のこと、恰もおはぎといふも小山伏しと云ふも、牡丹餅のことなる　、法眼なき粥飯因果を知らぬ知識を云ふ、」又云く、「臨濟の大勢づれにならふて云ふではない、此の妙源もその處がある」と。「隊は五十人を云ふ」と前の報不比睹驢趁大隊。

ツ無隱侍者の請

ネ斗斗哨哨、雷驅電馳。

ナ垂手入鄽。

ラ虛空臺鑿、秋水一痕。

ム凜然風彩、何處求眞。

ウ大方出沒兮、全生全殺。

ヰ叢林悠悠兮、獨角一麟。

ノ無補侍者の請

オ計較拙於鳩、軒昂老而虎。

ク聞必意消、見者難觀。

ヤ到頭不識寶中主、黑漆竹篦劈面揮。

マ師資誰謂無禪補。

ケ法雲首座の請

ツ斗斗哨哨、雷驅電馳。師資因緣、會遇の機感なり、鳥の殼を出づるが如し、子啐し母啄す、同一時なり、珠云く「自己と公案と心と境と交徹したる端的。」

ナ臨崖一拶。萬仞懸崖、放身命の處に臨んで翻地に一拶す、是れ則ち啐啄の機、投合の時節なり、宣公と師資の緣、合することを表す、珠云く、「うんとおし落されて、ふつと息をふき出すと直に虎じゃ。」

ラ虛空臺鑿。頂相は「ちんさう」とよみくせする、夫の本分面上猶ほ虛空に臺鑿の微物を突出するが如しと。言ろは未だ空寂に歸せざるに、早く這の頂相を見ればなり、珠云ふ、「虛空が像を是の如くかきた處は。」

ム目前離遏密。頂相已に目前分明の故に遮遏密藏し難きなり、晴に無隱の義を述ぶ、遏は絕なり、密は靜なり、珠云く、「虛堂が面目をつき出してからは、かくしはならぬ。」

ウ冷落有誰知。家風已に敗露する故に。珠云く、「破家散宅、回ることは、たんとも思ひ定められぬ境界。」

ヰ垂手入鄽。物象の外は即ち眞空寂滅の域なり、珠云く、「他方世界に遊ばず、虛堂は未だ閒寂せず、やつぱり峯頂に坐してゐる」と。

ラ虛空臺鑿。頂相は「ちんさう」とよみくせする、夫の本分面上猶ほ虛空に臺鑿の微物を突出するが如しと。言ろは未だ空寂に歸せざるに、早く這の頂相を見ればなり、珠云ふ、「虛堂が像を是の如くかきた處は。」

ム目前離遏密。頂相已に目前分明の故に遮遏密藏し難きなり、晴に無隱の義を述ぶ、遏は絕なり、密は靜なり、珠云く、「虛堂が面目をつき出してからは、かくしはならぬ。」

ウ冷落有誰知。家風已に敗露する故に。珠云く、「破家散宅、

㊀吻鳴伊㊁那得知、㊂寒酸看不上眼、㊃手面移東換西、㊄拱良工手、㊅破衲僧疑。㊆行水到窮處、坐看雲起時。

佛にも似ず菩薩にも似ず、虛堂はじまんで云つた。或抄に云く、「たとひ大虛は盡くることあるとも、虛堂が眞相は遷謝なし、是の故に謂ふ、誰あつてか眞相冷落の時節を知らんと。」

㊇父攘羊子證之。論語の子路の篇にある注に曰く、「由あつて盜むを攘といふ」と。面目家醜

今外に揚ぐる故なり、又これ暗に無陰の義を述ぶ。珠云く、この無陰めがおれが像を德ありげに畫いて、耻辱をあたへる」或抄に云く「是レ賊レ知賊の義、褒美の謂なり。」

㊈從數萬古。萬古は盡未來を謂ふ、黑風は黑業の惡風なり、法華の普門品に見ゆ、此の眞に依つて未來際宗風の傳に任するなり、珠云く「まゝの皮よ、いつまでもおれが惡名をさらさうとも、自作自受せることはない。」

㊉本立藏主。偈頌の部に「立禪人平山之頌」あり、蓋し其の號なり、此の肖像、今京都の妙心寺に在り、その末尾に云く、「本立藏主繪二老僧圖一請レ贊、寶祐戊午三月、虛堂叟智愚、書二于育王明月堂一。」この肖像は現今國寶に編入せらる曲錄に賂し竹篦を持ち、烏靴の遺影なり。

㊋春山萬疊。珠云く、「四十九年の說法にかけやう。」又云く、「虛堂の面目現在。」

㊌秋水一痕。秋水は妙心寺に在る眞碧一遍、文字の外に意味こぼれあふれる、虛堂はこゝに居らるる。」

㊍凜然風彩。珠云く、「花のさきしも鳥の啼くのも。」

㊎何處來眞。珠云く、「春山春水の外別に虛堂はどこに居る。」龍溪曰く「若し眞相を論ぜば、則ち春山春水の上、凜然たる面目風彩、常露現前す、更に何れの處にか之を求めんとなり。」

㊏大方出沒。珠云く、「十方世界に出たり入つたり、大道を中でねたりをきたり。」大方は大道を知るところの歷々。

㊐全生全殺。珠云く、「生くべきときは、さあこそ、千手千眼龐に入り細に入りて應接す、殺すべきときは、いかな〳〵、きなふそらに飛ぶ鳥のあと、あと形はみせぬ。」溪曰く、「眞相大方の中に於て、出生入死任運自如にして、絲關する所なし。」方は道なり、所謂虛無の大道なり、已上は讚辭盡きぬ矣、妙心寺のには殺は然とあり。

㊑叢林俳々。俳々は言はんと欲して言ふこと能はず、虛堂が威風俊邁なること一麟の群獸に抽づるが如し、故に叢林の諸衲みな氣を呑み犀を呑んで口を開いて之に敵するものあることなく、徒に俳々たるのみ、珠云く、「俳々は佛乎祖乎、諸方にてなんとか謗誹したく思つても、どうも虛堂が肖像をまことにかいたは、此の獨角の一麟じや俳々はどうも口へはだせぬ。なぜ世界に居るものでない、其の隣と云ふもの、皆みたことがあるか。」忠曰く、「諸方叢林」「妬慢の心虛堂を謗るなり。」

㊒無補侍者。偈頌の部に「無補侍者遊方の頌」あり。

㊓計較拙於。鳩は性拙し、巢を爲ること能はず、珠云く、「平生の庇生とりあつかひ、鳩の不訓法なよりまだつたない、我が居處も工面せぬ。」

㊔軒昂老而虎。軒昂は高舉の貌、言ふ意は計較の時に於て拙鳩の如く軒昂の時に於て老虎に似たり、珠云く、「氣宇王の如く、つつ立ちあがつて虎よりもたけたりで、妄想知解をくひやぶる。」

㊕聞必意消。珠云く、「宗匠の名をきけば忘想もなくなる、一箇半箇云ひ出して聞く者あれば」と。

㊖見者無觀。其の成名を聞くときは則ち意消し、其の風彩を見るときは則ち觀がたし、已上の四句、本分の眞相を形橫す。珠云く、「つらをあげて見ることはならぬ。」

㊗到頭不識。到頭は端的の意、賓中主は靈利の學者。珠云く、「到頭は暴竟の義、徹頭なり、暴竟肖像なんどまつかうに對したところはなま〳〵しい全身あれども、そりや知り手がない、賓中主とは今繪にかいたは賓なれども、此の中全體主。」又云く「面前の萬法を賓とす、自己の心性を主とす。」

㊘黑漆竹篦。言ふ意は令行の端的に當りて、久參靈利の漢を問はずとは、劈面に便ち打つなり、珠云く「佛來も也た打し、祖來も也た打し迷ふ故に凡聖つらだしはならぬ。」

㊙師資誰謂。車苑一に「老氏の曰く善人は不善人の師、不善人は善人の資と、說者の曰く、善人に不善人あつて、然して後善救の功著る故に資と曰ふ。」今師資吾人に稗補なしといふべからすと也。無補の字を打す。珠云く、「竹篦劈面抑、若如レ此則吾汝師資、宗教に補ひあり、不レ可レ言レ無レ補なり。」

㊚法雲首座。法雲は寶林錄の編者なり、承天開祖法雲、虛堂に嗣ぐ、續傳燈に傳あり。

㊛咿嗚咿。咿は況傷の切、呻なり、嗚は烏靴、苦呻今悲嘆の靴、珠云く、「さても是非がない。」

㊜那得知。先づ悲嘆して曰く、那ぞ知ることを得んと、其の應、下面の如し、珠云く、「あつあ、見手がない知り手がない。」又云く、「なるほど知り手もないはづ、佛乎祖乎」

㊝寒酸看上眼。形相寒酸、「儉陋にして看るべからざるなり、俗に賤猥

の人を寒酸と云ふ。珠云く、「此の處を見付けると寒毛卓竪なり、此のわらうを眞實みたなれば、ぞっとして見ることはならぬ。」又云く「見るかげもなきを寒酸と云ふ、又儒者の貧乏をも云ふ、不上眼は目につかぬなり、人のきりやう好きかを目につくを看上と云ふ。」

㋑手面移東。忠曰く、「手の字は面と言ふに過ぎず、那一人の面容定むべからざるをいふ、之を東とすれば忽ち西となる、手面の故事は通論に云く、「梁の武帝、張僧繇に詔して寶誌の像を寫さしむ云云、既にして指を以て面門を點して分披して十二面觀音を出す云云、竟に寫すこと能はず。」

㋺拱良工手。手面の句を承けて言ふ、雙ひ良手書工も也く須らく拱手して立つべし。珠云く、「虛堂が像をかんとすれば、いかなる名畫師も手をつかねる。」

㋩破衲僧疑。寒酸の言句を承けて言ふ、從來草貧の疑を破る。珠云く「さこそあるかなれき〳〵のものも目をさます。」或抄に云く、「寒酸惡辣の手段を以て換するが故に、衲僧の疑團、一時に消破。」

㋥行到水窮。雲の字を打す。此の兩點は唐王維、終南の別業の詩なり皆道遙自得の境界なり、今は本分眞箇の面目を示す。珠云く、如上の端的は法雲の雲の字を用ひたけれど、此れは虛堂がかくれがじや。」

眞讃終

㋭雙林夏前告香普說

古の宗師の爲人㋬直截は、㋮凡そ所望あれば只だ問處に就いて、之が與に㋯執を破す、㋰初めより實義なし。㋱後來梁生つて箭を招いて、㋲語言に形はす。乃ち普說あり。

普說は首め㋳眞淨和尙より出でたり、㋴三佛より以來、皆普說あり、㋵怒罵呵咄鞭策誨勵して其の㋶大心の衲子をして、㋷進工に勇ましむるに非ずといふことなし。

㋸近世の宗師、㋹問普說あり、文體多きことを㋺尙んで、古人直截爲人の處を見ず、大いに㋻場屋中の論策に似て一般なり。㋼其の所從を

㋭雙林。上の第二卷に出づ、參看すべし。

㋮告香。「どうかう」とよますならはせなり。百丈清規告香の下に云く、「夏前毎に告香、新歸堂の者、參頭一人を推して雖那和會し定めて、衆と同じく侍司(堂頭和尙の)に詣して禀して云く、新掛搭の兄弟和尙の告香普說を求めんと欲す如し住持允從せば、即ち堂司に報じて告香の圖を出さしむと。」又云く、「古法に未だ告香に預らずんば入室を許さず。」大慧普說第三に虎丘沼禪老請する中に云く、「一百年前、もと普說なし、因に熙寧、元祐の間、眞淨和尙、洞山歸宗に居せし時、方めて普說あり、大衆は學者を開悟するを以て心と爲す、然れども古人箇の法門を立つ。亦自ら出處より何を以て之を知る、見ずや大華嚴經離世間品に、普慧菩薩雲の如く二百の問を起す、普賢菩薩瓶の如く二千の酬を瀉ぐ、中に於て一問あり、曰く何等を名けて普說三世と爲すと答へて曰く、佛子菩薩摩訶薩十種あり、三世を說く云云と。」忠曰く、「昔は古刹の切、普請、啓なり、闕雅に請なり

㋽侍者法雲編

攻むるに及んで、㋕乃ち藥貼上の語にして、人の病を療ずること能はず、徒に其の末流をして㋖紛紛として傳集し秘蓄して、以て㋗本參に當てしむ。殊に知らず、㋘我が王庫の內に、是の如きの刀なきことを。

㋙德山道く、㋚亦佛なく亦祖なし。達磨は元是れ㋛老朦聃。釋迦老子は㋜乾屎橛、㋝十二分敎は是れ㋞神鬼簿、㋟四果㋠三賢は是れ㋡古塚を守る鬼、㋢盡く皆自救不了」と。㋣是れ即ち一期の方便なり、㋤早く是れ蛇を畫いて足を添ふ。

㋥臨濟道く、「山僧往日、曾て㋦毘尼の中に向つて心を留む、數十年の間、㋧經論を披尋す。後來㋨方に是れ濟世の表顯なることを知つて、遂に乃ち一時に拋却して、意を發して參禪す。㋩善知識に遇ふて、方に㋪道眼明白なることを得

香を師家に挿みて普說を請求し、或は開示を求むるの意を啓するなり、この事、象器箋中に詳かに辨ず。」珠曰く、「告香は衆に告ぐるに香を燒いて著說は發心修行、證悟發道、化他向上向下、因緣譬喩是非大小より、三世古今に至るまでみな普周(ゆきわたり)說示するなり。

㋫侍者。前に見ゆ。

㋬法雲。寶林錄編者と同じ。

㋭直截。珠云く、「直截根元は佛の印するところ、達磨門下では總じて物に倚るをきらふ」

㋮凡有所問。珠云く、「疑乎、見所乎。」

㋯破執。珠云く、「鴟臭布衫、惡知惡覺、悟れは大きな病、迷へば大きな病、自己をまるだしにさせる。」

㋰初無實義。定實の法義なし。珠云く、「醫者定りの藥方はない、病に依つて藥が定る。」

㋱後來墖生。來問を招くに喩ふ。珠云く、「墖は師家箭は學者、昔は病人から醫を招ぐ、今は醫から病人を招ぐ。」

㋲形於語言。已上は總じて普說の因由を論ず、珠云く、「毒塔の話は如何、柏樹子の話は透りはしたがたんどと。」

㋳眞淨和尙。名は克文、黃龍南に嗣ぐ。

㋴三佛以來。佛果克勤、佛鑑慧懃、佛眼淸遠の三人、共に東山五祖法演の下に出づ、故に世に東山下の三佛と稱す。

㋵怒罵。珠云く、「目を付くべきところに付けざせるなり。」

㋶大心衲子。大心ありて佛道に入るを菩提薩埵と名づく、皆大乘根器の衲子なり、珠云く「四弘願にむちうつ大心大機の衲僧たち。」

㋷塑造工。造修工夫なり、大慧

書に「所謂鈍工を下さしむ」といふが如し。工は即ち工夫なり、已上は別して普說の源委及び其の巨益を評す。珠云く、「もつとすゝめ〳〵と、かひ〴〵しく精進工夫せしむ。」

㋸近世宗師。珠云く、「知識と稱する宗師。」

㋹間。珠云く、「ちよこ〳〵親切らしく。」

㋺尙。珠云く、「文章體裁多きことをばはなやかに書きのべることをよしとして。」

㋻場屋中論策。場屋は登第の場なり論策の策は簡なり、珠云く、「但だ是れ策の中、政治經義等を論ずる此れを論策と云ふ、其の文の格體數多を尙ぶこと、登第論策中に文飾を尙ぶが如し。」

㋼攻其所從。來由を攻問す。珠云く「胸臆中より出づる處を考へ見るなり。

㋽藥貼上語。藥の銘を謂ふ、眞藥に非ずとなり、頌古にも見ゆ。珠云く、「やつぱり藥の能書。」

㋾紛紛。珠云く、「互にわれも〳〵と混雜して。」

㋿當本參。從本參得し來る底の公案に當てる。珠云く、「わが參究し得て大切のやうに。」或抄に「本は平素の義、平生の參學なり。」

㌀我王庫內。これは涅槃經第八の如來性品にある故事なり、祖宗家、元來文字を立せず。已上は近世普說の弊を畢げ、普說の序、致せり盡せり矣、珠云く、「宗門の大事はこのやうなことではやくにたゝぬ御藏へ納める大切の寶ではない。」

㌁德山道。珠云く、「此れを見れば十方の諸佛に所有の寶を供養するよりは自己に向つて供養するが無上の供養。」

㌂亦無佛亦。珠云く、「本來脫躰見成の上。」

㌃老朦聃。朦は朦朧たり、聃は胡に作る、是れ臭穢下賤の老胡の謂なり。

㌄乾屎橛。珠云く、「釋迦老子は、一切衆生の三毒を取つてやる道具じや。」

㌅十二分敎。顯孝錄に見ゆ。

㌆神鬼簿。俗にいふ過去帳、死し去る人の名や月日をかく。

㌇四果。預流、一來、不還、阿羅漢の四果なり。

㌈三賢。五停心觀、別想念處觀、總念處觀、之を三賢位と爲す、これは小乘にていふ、又菩薩乘は乃至地前の十住、十行、十回向、の三賢位と爲す、これは大乘にていふ。聖に隣するを賢といふ。

㌉守古墖。寶林の結夏に出づ。

㌊盡皆自救。珠云く、「誠の處はいけないわいやい。」

㌋是則一期。珠云く、「已下虛堂が、德山の語を判す、釋迦の法に依らず、達磨の法に依らず。」

㌌早是蛇。珠云く、「一期の方便已むことを得ず、是の如く說くのみ

て、邪正を辨得す。㋓是れ孃生下にして便ち會するにあらずと、㋔此れ亦古人欺かざるの語なり。

今の學者、㋕其の妙を得ざることに、㋖病自信不及の處に在り、㋗病得失是非の處に在り、㋘病我見偏執の處に在り、㋙病限量窠臼の處に在り、㋚病機境不脫の處に在り、㋛病少を得て足れりと爲る處に在り、㋜病一師一友の處に在り、㋝病勞宗別派の處に在り、㋞病位貌拘束の處に在り。㋟病自大了一生小不得の處に在り。

㋠此の幾種の病は、障道の媒なり。人皆之あり、㋡要は當人の退步して、㋢楷磨淨盡して其れをして入作するに門なからしむるに在り。㋣一條の古路の上に向つて、㋤蕩蕩地にして、㋥拘もなく撿もなく障もなく礙もなく、㋦拈じ

實を以て之を論ずれば穩山蛇を系がいて足を添ふじや、利口めいても大いたあやまり、釋迦迦葉なんどの邪魔になることか。」溪曰く、「德山與麼の說話、是れは則ち一時期の方便なり、然も用處大だ過ぎて早くこれ巧を弄して拙と成す。」この故事は史記の楚の世家に出づ、已上は把住門の證を引く。

㋢臨濟道。この語は臨濟錄にあるの意をあぐ。

㋣毘尼。此には律と譯す、律藏なり。

㋤披尋經論。上に所謂律と經と論と三つのもの之を三藏と謂ふ。披尋は力を盡してひらきみた。

㋥方知是濟。本錄には濟世の藥表顯の說と作す、其の意に云く、「如上の三藏教は皆是れ世法露布の言にして、秘密の妙法に非ず。」珠云く、「世間を濟度し、煩惱を治するの法、名句を表顯するなり。」

㋦遇善知識。黃檗や大愚に。

㋧道眼明白。珠云く、「たゝきすゑられて、道眼明白、必ず參禪の功もつまずして、めつたなことを云ふな。」

㋨是孃生下。孃と娘と通ず、俗に母を稱して孃といふ、珠云く、「親のうみ付けたからだではない、骨を折つて」と。

㋩此亦古人。已上は放行門證を引く、二次老の語を引いて、縱奪時に臨むの鑑となす、虛堂の評語なり、これ下は着眼すべし。

㋪不得其妙。珠云く、「眞實の妙陳操登樓にある。」

㋫日信不及。外に向つて馳求すればなり。珠云く、「本來成佛の自己に付いて求むるより外はない、さるに依つて佛も希

有なる哉、一切衆生、如來の智惠を具す」と。

㋬得失是非。計較安排なり、珠云く「智見解會、又揩得を見て終する。」

㋭我見偏執。已に泥んで移らす、珠云く、「自己の見識を是とす、一偏一著に。」

㋮限量窠臼。境界に隨在す。珠云く「柳は綠、花は紅、山は山、川は川天を呼んで地と爲さず、地を呼んで天と爲さず、之れを限量といふ悟のねどころをこしらへる、之を窠臼といふ。」

㋯機境不脫。機は揚眉瞬目等、境は拈椎豎拂等、言ふ意は是の如くの機境に繫縛せらる。珠云く、「初入の一機一境。」

㋰得少爲足。楞嚴の九に、「心中明かならず、賊を認めて子と爲す、又復、中に於て少を得て足れりと爲す、第四禪の無明比丘の如き、妄言現を證す、天魔已に墜つて衰相現前すれば、阿羅漢も後有に遭ふと誇つて、阿鼻獄に墮す。」珠云く「見聞覺知を認めて眞實とする。」

㋱一師一友。諸方の正師善友に親しむ、四種無礙ならざるが故に。」珠云く、「偏局の叢獨參を忌まず、珠云く、「人我法我ども」

㋲勞宗別派。或は正傳を貴んで勞宗を賤し、或は同門を重んじて別派を輕んず、情に寓して理に寓せざる故なり、珠云く、「人我法我ども」

㋳位貌拘束。位階容貌之尊貴に墮して拘束して容易に問はず、珠云く「おれは和上だ、僧正だのと云ふて」と。

㋴自大了一生。自ら大事了畢と謂つて、然して一生の間、小分の所得なし、之を突腹高心と謂ふ。忠曰く、「點じて病自ら大に、一生を了じて小不得の處に在り」と。自大は自ら尊大にするなり。是を以て一生涯を了畢して、小分も利益を得ずとなり。又の義に、自大了一生小不得とは、謂く、了は助辭、上に屬して自ら尊大にして了る故に、珠云く、「めつたに自らたかぶる。」

㋵此幾種病。已上は障道の病を示す十種の病なり。

㋶要當人退步。外求を遮めず。珠云く、「纔に退步すれば安樂なり、只だ是れ背て退步せず。」

㋷楷磨淨盡。調心の法。珠云く、「人我妄想なくする。」

㋸其入作門。其れとは上に所謂種病を指す。珠云く、「如上のわるい了簡、無門とはより付き處ないやうにすれば、病はおこらぬ。」

㋹一條古路。萬古當行の一路なり、香嚴の頌に、動容揚古路とは是なり。珠云く、「古人の白崖山頭四十年の如く、未到底は竹篦背觸、已到底は山河を一句子となして。」

㋺蕩蕩地。法度壞の貌。珠云く、「法身捨命法に於て自由自在。」

㋻無拘無檢。東なり、本來自性の上には。

來つて便ち用ひ、㋚撥著すれば便ち殺し、㋛機に臨んで縱奪して、秋亳許りも凝滯なきこと、圓石を㋜千仞の上より轉ずるが如く、他日㋝祥光發現して、㋞範を後昆に垂れんこと、㋟誠に忝とせざらんや、苟し一念も㋠佛法を希求するあらば、却つて佛法の二字に㋡籠罩せられて、㋢油の麵に入るが如くにして、永く脫することを得ず。

㋣山僧少かりしより、參學に意ありき。㋤坐すること一二年、略所入なし、㋥但だ心眼俱に淸きことを覺ゆ。後來江湖の間、㋦人に親近すと雖も、他儞を見るに、㋧是れ箇の中の蟲豸にもあらず、㋨誰か肯へて儞を淘汰せん。㋩但だ風に臨んで影を弔して、㋪之が去留に任す。後㋫金山に在りしとき、㋬運先菴師の㋭招かれて、

㋚撥著。珠云く、「頭々上に明かに、物々上に作用す。」

㋛縱奪。珠云く、「著は除去なり、佛に逢ふては佛を殺しじや、物に滯著せぬ。」

㋜臨機縱奪。珠云く、「縱は放行奪は把住。」

㋝千仞之上。珠云く、「今日の是の上にも非の上にもとゞこならぬ。」

㋞祥光發現。祥瑞の光明發現すとは一佛の出世を表す、法華の本光瑞如、此の如きの類。

㋟垂範後昆。言ふ意は出世開法して、後世の模範と爲るに足る。

㋠誠不爲忝。忝辱とする所あらず、珠云く、「人天の供養を受くるに愧りなし。」

㋡希求佛法。珠云く、「若し殊勝を求むれば。」

㋢籠罩。珠云く、「五時八教、かごあみに入れて。」

㋣油入麵。大惠の書に云く、「油の麵に入るが如くにして、永く出づべからず」と。已上は火活路に據つて諸般の病を治することを示す。

㋤山僧自少。珠云く、「以下虛堂が身の上のものがたり。」少壯とは十六七歲のころなり。

㋥坐一二年。珠云く、「一二年の間は觀懷禪を終す、ちつとも」

㋦心眼俱淸。是れ坐禪の驗しのみ。

㋧雖親近人。珠云く、「德ありげな人にたよりたく思へども、先では虫ともおもはぬ。」儞は師自らを謂ふなり。

㋨箇中蟲豸。豸は丈餘の切、蟲雅に「足あるを蟲と曰ひ、足なきを豸と曰ふ。」言ろは他の江湖の諸師我れを見ること箇の蟲豸の如くだも爲さざるなりと、其の人の看待を爲さざること知るべし。箇中は祖宗門

雪上に過ぐるに邂逅す、入室に與ることを得たり、只だ是れ下語すること得ず、纔かに口を開けば、便ち道く、儞且く㋩款款地なれ、㋪茅廣なることを要せざれ」と。室中㋫常に古帆未掛の因緣を示す、纔かに口を開けば㋬便ち罵らる。一日、侍者寮に在つて㋭之を思ふに、古帆未掛、甚の會し難きことかあらん。其の實は只だ是れ㋮一漚未發已前の事、㋯一念未興已前の事なり。者の僧也た㋰これ箇の乖底なり、㋱却つて宗師をして㋲倒に來つて他の窠子に入れしむ。㋳歲頭㋴他の來處を見ること分曉なり、便ち他に㋵闌口に一築を與ふ、之を㋶人に一牛を得て、人に一馬を還すと謂ふ。何ぞ人をして㋷下語せしめざることを得んや。遂に者の一擔の見解を㋸擔つて、方丈に去つて呈す。問聲未だ

下蟲豸ははたらき、手脚、人天衆前にはだかにて出づるを云ふ。

㋩誰肯淘汰儞。言ふ意は我が爲に沙を去つて金を取る人なしと、珠云く、「誰れも心得て、指南してくれ手がない。」

㋪臨風弔影。親面の接遇を得ずとなり。珠云く、「かなたこなたと見まはせど、相談の同伴もない。心ぼそし。」或抄に云く、「誰も吾れと親しむものは無き故に、吾れと影ばうしと相問訊するまでぞとなり」古文の陳情表に形影相弔ふとやら有つた。同じ義なり。

㋫任之去留。已上は行脚の初め慈航に遇はざるを逃ぶ。珠云く、「あゝ是非もなや、どうなりともなり次第、但だ影と身とを去留するのみ。」

㋬金山。鎭江府にあり、行狀に「道より金山を過ぐ、掩室和尙一見して、甚だ器重す。」掩室は松源岳に嗣ぐ、師の法叔。

㋭運菴先師。期せずして會するを邂逅と曰ふ。運菴、鎭江府の普照に住するの時なり行狀を考ふべし、珠云く、「存じもよらぬ、護法の神のおかげじや。」

㋮招過雪上。雪は側洽の切、湖州府なり、行狀に見ゆ。運菴師を招き、携へて道場に過ぐること行狀に見ゆ。珠云く、「招は伴僧に誘はれて、運菴も此れ箇の器とおもはれて。」道場山は安吉州にあり。

㋯款款地。款は徐なり、又は忠實のことなり、まことなり、中情既と款款などの類。

㋰茅廣。草昧の意、言句の所據なきを謂ふ。珠云く、「無分曉なり、又迂濶なり、碧岩六十六則の下語に「茅廣漢如レ麻如レ粟。」或抄に「雜亂して檢

絶えざるに、先師道く、「儞何ぞ狗口に合取して㊀靜地裏に密密に體取し去らざる。毎日只管者裏に來つて、古人の是非を論量せば、甚の了期かあらん。」歸つて寮中に到るに及んで、覺えず㊁躁悶す。忽然として古帆未掛の話、「㊂清淨行者不入涅槃」の話を會得す。其の他の近淺の話頭、㊃漸く通曉することを覺ゆ。來日㊄打鼓を聞いて入室す、先師我が氣貌の稍自から同じからざるを見て、却つて古帆未掛の話を拋下して、我れに㊅南泉の貓兒を斬却することを問ふ。山僧便ち一轉語を下して道く、「㊆大地載不起」と。先師㊇低頭微笑す。

然も是の如くなりと雖も、半年を過得するまでに、心頭舊に依つて鬧し。人に拶著せらるるときは、㊈依然として去ること得ず。㊉後來、

束なきを云ふ。」かやをきりみだしたといふより出た語。つまりいへば妄想するなといふ意。

㊁古帆未掛。禪門類聚十五に、「嚴頭豁禪師、僧問ふ、古帆未掛の時如何と、師云く、小魚大魚を呑むと、岩頭、僧問ふ古帆掛けて後如何と、師云く「後園の蘆草を喫すと。」是れ兩僧の問なり、珠云く、「古帆は二義あり、古の字にすれば義に依れり、孤の字にすればひとつなり。」小魚呑二大魚一は珠云く、「あひるの卵の内で、茶うすを引かれば知れぬこと、後園蘆喫レ草は、こりや雲門の菴内の人と相談するなり。」

㊂便罵。珠云く、「怒罵呵嘘せらる。」

㊃思之。行狀に不蘊務侍者とす。

㊄一孤未發。楞嚴の六に云く、命空の大覺の中に生ずることは海の一漚の發するが如し、有漏微塵、國皆空に依つて生ずる所。」珠云く、「世界未だ起らざる已前。」或抄に、「依報に就いて謂ふ、陰陽未判、天地未分の處なり。」

㊅一念未興。一漚は器界に約し一念は有情に約す。或抄に「これは正報に就いて謂ふ。」

㊆是箇乖底。常に乖背する底なり、珠云く、「心行好からざるなり、すねものやつかいもの。」或抄に、「者の僧、天地未分、一念不生の處を問はんと欲して、却つて古帆未掛と謂ふ、此れ廻互して誠を轉じ來る故に乖といふ。」又云く、「常底、とりそむく底なり。」

㊇却教宗師。珠云く、「宗師は岩頭をしてじや。」或抄に云く、小魚呑二大魚一といふ荅話の邪解、此に在り。」

㊈倒來窠子。特に古帆の窠子を設けて、宗師を陷れんことを要す。珠云く、「さかにかゝつて、他は己が問を設くる學者を指す。」或抄に、「倒來は賓主を陷れんと欲す、故に倒と云ふ。」

㊉見他來處。來處は纎を呈し來る處

㊋關口一箭。關は遮なり。一箭は小魚呑二大魚一の苔を謂ふ。珠云く、「關は遮なり、口は學者の口なり、云はせも果てず、あたまからつきくづされた」

㊌得人一半。珠云く、「所謂拳し來れば踢をもつて報ずといふが如し。」或抄に「人は岩頭をさす、一馬は荅へなり。」

㊍下語。著語を下すの意で、短評を下すことなり。

㊎撈。珠云く、「になつて物見せんと鼻あぶらを引いて。」

㊏靜地。或抄に、「靜地に自己に返照せざる。」

㊐躁悶。大休歎を得るの前、相當に此の如くなるべし。珠云く、「心中もだゆる、心中安堵せず。」

㊑清淨行者。篠は行狀に見ゆ。珠云く、「漏盡くる底なり。」大寶積經百十六文殊說般若會に曰く、「文殊師利言く、一切の業緣皆實際に住して、來らず去らず、因果に非ず不因果に非ず、何を以ての故に、法界無邊、無前無後故に、是の故に舍利弗、若し犯重の比丘、地獄に墮せず、清淨の行者涅槃に入らざるを見ん、是の如くの比丘は、應供に非ず、不應供に非ず、盡漏に非ず、何を以の故に非ず、不盡漏に非ず、何を以の故に、諸法の中に於て平等に住する故に。」又大般若經五百七十四に、「曼殊室利分に曰く、犯重の蕊芻、地獄に墮するに非ず、淨持の戒者涅槃を證するに非ず」と。

㊒梢。ちつくり。

㊓打鼓。入室の鼓なり。

㊔南泉貓兒。緣は碧岩の六十三則に詳なり、又前の錄にも出づ。大燈國師の道歌に一猫の子をひつさげみれは一二三、斬却すれば無孔の鐵鎚」と、無孔の鐵鎚はとりえがないことなり。

㊕大地載不起。これを龍溪は「本分と注してゐる、珠長老は不可なりとて肯はず、珠云く、「虛堂古帆未掛の骨より出た語じや、「清淨の行者は涅槃に入らずのどんぞこから出た、耨合よく云ふをみよと。」この語くはしく行狀に見ゆ。或抄に云く、「南泉の斬貓の端的、廣大にして大地ものせ起さず、外面は此の如く見て、底意は此の句巴鼻と見るべし。」玄沙の語に出づ、「大地載不起、虛空包不レ盡、豈是小事」と。

㊖低頭微笑。許可の儀狀。

㊗依然去不得。珠云く、「やはりとりさばき系ずで、安澄し得ず。」

㊘從來疎山壽塔。珠云く、「行狀に、崑崙院疎山壽塔の因緣に於て發明するを思ふとあり。

疎山の壽塔の話を看ること、三四年の間なり。㋟一日無心の中にして、忽ち㋠大嶺の古佛光を㋡放つ底の時節を會得す。方に自在を得て、人に謾却せられず、㋢從前所看了底の話頭を將つて再び把り來つて一看を打するに、大いに日前の所見と同じからず、信に知んぬ㋣此の事は斷斷、言語上に在らざることを。

㋤遊山して㋥漢上に到つて、夏に荆門の玉泉に在るに及んで、因に㋦覺範の㋧僧寶傳を閱す。㋨舉上座の㋩琅琊を訪ふの因緣を見る、琅琊問ふ、「近離甚れの處ぞ。」舉云く、「㋪浙江。」琊云く、「㋫船來か陸來か。」舉云く、「船來。」琊云く、「船甚れの處にか在る。」舉云く、「㋬步下。」琊云く、「㋭程途に涉らず、一句作麼生。」舉、坐具を以て㋮一撼して云く、㋯杜撰の長老、麻の如く粟に似たり」といつて、㋰便ち走る。將に出で去らんとす、琅琊親ら㋱且過に到つて問ふ、「是れ舉上座なること莫し麼、適來㋲不合に相觸忤す。」舉便ち喝して云く、「長老㋳何年にか汾陽に到る、我れ浙江に在りしとき、早く儞が名を聞く、㋴見解止だ此の如し、何ぞ名、宇宙に播ることを得たる。」琅琊云く、「㋵某甲が罪過」といつて便ち禮拜す。相見の處、㋶此の如く分曉なり。㋷覺範の傳の中に、却つて下面に來つて㋸幾句を添へて道く、「琅琊曾て㋹此を以て㋺慈明に舉似す、明笑つて云く、『舉が見處、㋻纔かに能く自了す、㋼面も汝負墮す、何を以てか人の爲にせん』と。」㋽山僧此に到つて、覺えず卷を掩ふて長歎す。㋾若し果して然らば㋿甚の緇素かあらん。(イ)二大士の相見、(ロ)蒼龍の珠を玩

㋟一日無心中。珠云く、「廬山、東林の且過堂に在つて夜坐、無心の中おもひもよらぬところ。」

㋠大嶺。羅山閑禪師岩頭菴に嗣ぐ、大嶺庵に住す。

㋡放光底時節。珠云く、「眞實龜毛數丈長きことを見得した。」此の一緣は徑山後錄に詳なり。

㋢所看了底。珠云く、「悟了底の古則公案。」

㋣此事斷斷。斷々專一の義、或は重重決定の義、珠云く、「此の一大事因緣はじや。」斷々は大學の註に誠一の義とあり。書經に「斷々猗無二他技一」と、守りて變ぜざること、又專一なること。

㋤遊山。珠云く、「遊方行脚、則ち諸山遊歷を云ふ。」已下差別の因緣を理論し、覺範雪竇等を批判す。

㋥到漢上夏。行狀に、「江淮湘漢に遊び祖塔を巡禮し、荊門の玉泉に坐夏す。」一統志を按ずるに「荊州府の形勝に東は吳と會とに連り、西は巴蜀に通ず、南湘と源とに極る、北は漢と沔に據る、皆險塞なり。」玉泉寺は行狀に見ゆ。當羽の建立の寺、當陽縣に在りと。

㋦覺範。此の師の傳は、本叢書の第二卷の林間錄の解題及び其の本錄の序と、脚注とにくはしく出づ。參看せられよ。

㋧僧寶傳。覺範、湘西の谷山に居りしとき、曹山雲門等の祖師八十一人を取りて、其の章次を序いで、各讚辭を爲つて分つて三十卷と爲し、禪林僧寶傳と名づく、忠曰く、「私按ずるに云く、今此に舉ぐるところは僧寶傳に異なり、只だ大惠廣錄普說四に依る文乎。」虛堂は實に正法眼藏に依る。

㋨舉上座。法華全舉。

㋩琅琊。慧覺二人とも汾陽照に嗣ぐ。

㋪浙江。「杭州浙江江口に山あり、江中に居る、湖水山に投じて十折して曲れり、故に浙江と云ふ」と一統志に出づ。

㋫船來陸來。珠云く、「これは何の用で問ふ。ふねできたか、あるいてきたか」と。

㋬步下。水際を步と曰ふ、韓文の羅池廟の碑に「步有二新船一」などの類。珠云く、「船つきあがり場なり。」それはうらべに於て來たとなり、柳文鐵爐步志に曰く、「江之滸、凡舟可二際而上下一曰レ步」とあり。「水際渡頭を步と曰ふ」と正字通にあり。

㋭不涉程途。珠云く、「人を殺さば須らく血を見るべしじや。」

㋮一撼云。字彙に「撼と撼と同じ、楚革の切、音策、うつなり。」珠云く、「拂著なり、はらひうつゝけるなり。」

㋯杜撰長老。杜撰のことは前文にも委しく出づ、草率にして詳審の工夫なき底を云ふ。如麻とは法華の方便品に「稻麻竹葦の如く」と。似粟とは阿含宮の賦に庾に在るの粟粒よりも多し」と、皆無數の義なり、珠云く、「思案分別もなう、出ほうだいを云ふ、諸長老はじや。」

㋰走將出去。珠云く、「やにはに身拵へして出でゆかんずる。」

㋱且過。「たんぐわ」とよみくせするなり。堂の名、遊方行脚の人、到る處に將に門に及ばんとす、包を下し捧げて且過に入る、百丈清規の裝包等に見ゆ。休息する寮舍なり。

㋲不合相觸忤。不合は「ふと」、觸は犯、忤は逆なり。珠云く「只今はぶちやうほふしましたと。不合はいらざることに

び、飢鷹の食を搏つが如し、ト甚麼の狼藉底か有らん。若し是の如くならば、チ甚の好慈明をか討ねん。覺範は リ知見廣大にして、ヌ嘗て楞嚴を箋釋す、其の ル宗を扶け教を樹つるの文、叢林に遍し、豈に肯て無益の詞を以て、ヲ後世學者の眼を瞎せんや。

ワ南嶽に在ること二年、一箇の カ同人を討ねて此の狐疑を決せんと欲するに、ヨ而も不可得なり。タ雲居に到るに及んで、レ寮中に大慧廣錄一部あつて、ソ弊せること甚だし。人言ふ、「ツ禪者あり、ネ梅陽謫居の時寫し得て、寮中に捨在す」て。借り來つて看ること ナ三兩卷、ラ恰好に者箇の話頭に撞著す。大慧道く、ム我れ每に笑ふ、洪覺範、偏に ウ胡亂の穿鑿を要することを。當時舉上座道く、「箇の杜撰の長老、麻の

ユ何年。珠云く、「いつの世か西河の師子を弄することを得たるの一なり。

メ見解止如此。珠云く、「お悟りはこれぎりじやの」と。

ミ某甲罪過。珠云く、「重々不訓法、此に重々の穿鑿あり、見事かどうだか。」

シ如此分曉。珠云く、「少しもまちがひはない、師が僧寶傳をみての評判なり。」

エ覺範傳中。慈明の章なり、僧寶傳の中にあり。

ヒ添幾句道。珠云く、「學文自慢に次分添へごとして、」琅琊會以レ此と、これ以下、爲人といふところまでは、二十七字諸錄にはなし。只だ覺範の僧寶傳のみ此の事を添ふ、此れ覺範誤りて之を附會するなり

モ以此。上の問答なり。

セ慈明。琅琊の師兄。

ス纔能自了。珠云く、「ようく、弁じまへだけのこと。」

イ而汝負墮。珠云く、「へたの上の智解、それに手をとられた」まけをとること甚だし。

ロ山僧到此。珠云く、「已下師の判語なり。」

ハ若果然。珠云く、「若しさうならば、やみらみつちや泥田稼じや。」或抄に「慈明の評の如くならば」と。

ニ有甚繩墨。或抄に云く、「黑白を知らず。上の如くならばちあかぬとなり。」

ホ二大士相見。琅琊と法華舉と

ヘ蒼龍玩珠。主客共に優劣なし珠云く、「出合ひがしらにひつとつてかむ。」

ト有甚麼狼。離披雜亂してのこと、報恩錄にも見ゆ。珠云く、「さつぱりとりみだすことはない。」或抄に、「主賓底はなし。」

如く粟に似たり」と。チ己に是れ琅琊を將て、梵天に托上す」と。山僧此れを見て、リ暑中に氷雪を沃ぐが如し、ヌ又鄙者の所執を證得す。ル大慧は眞の絕世の宗眼なり。ヲ後面の幾句に又道く、此れは是れ ワ文殊普賢大人の境界なり、凡情の測るべきに非ず」と。又道く、「カ覺範は眞淨の處に在つて發明す。ヨ多時ならずして、タ事に因つて出院す。」師を離ること太だ早し、所以に到處あり不到處あり。

レ且つ ソ龍牙の ツ翠微に參ずる ネ因緣を編するが如きんば、ナ牙問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」微云く、「我が與に ラ禪版を ム過し來れ。」牙禪版を過して翠微に與ふ、微、ウ接得して便ち打す。牙云く、「ノ打つことは即ち打つに任す

オ要且つ祖師西來意なし」と。又臨濟に問ふ、「如

チ甚好慈明。慈明若し如是の判を著けば甚の好處かあらんとなり三文がものもない、或抄に「若し如是とは蒼龍等を指す、琅琊何ぞ慈明を討ねて舉似することを用ひん。」

リ知見廣大。珠云く、「以下學者の眼に至るまで、虛堂時に覺範を疑ふ。」

ヌ箋釋楞嚴。覺範、華嚴合論十卷を作り、以て箋註釋解す、箋註は本文の間に書きそへたる解釋なり。

ル扶宗樹教。祖宗を扶くるは僧寶傳等、佛教を樹つるは楞嚴等を云ふ。

ヲ後世學者。此の一節は邪正を辯ずるの中、先づ疑を生ずるを述ぶ。

ワ在南嶽二年。行狀に「其の時無土月和尙、嚴を主る、龍象を奔走す、師往いて之に依る、即ち藏を典らしむるを命ず。」嚴は一統志に「衡州府衡山縣の雲寄峰に在り」と。

カ同人。同參同見の知音を云ふ珠云く、「一人にてはさつぱりと定めにくい。」

ヨ而不可得。珠云く、「古今ありにくい。」

タ雲居。雲居は廬山に在り、行狀を按ずるに、師廬山に遊ぶことは南嶽の先に在り、又南嶽の後、北禪の禮和尙に到る蓋し雲居に住するか。

レ寮中。衆寮なり。

ソ弊甚。弊は敝に作るべし敗なり、破損がひどいとなり。

ツ有禪者。珠云く、「此の禪は昔し大惠禪師謫居の時に在りて寫し得置くなり。」

ネ梅陽謫居。事は佛祖贊の大慧の讃に見ゆ。大惠禪師が梅陽に謫流せらるゝの時なり。

ナ纔兩三卷。本傳に「淳熙の初め、其の全錄八十卷を賜ふて

大藏に隱つて流行ぜしむ」と。

テ恰好者僧。大惠普說第四に行者祖慶請中に之れあり、珠云く、「ちやうどもつてまゐつた。」擡著はでくはしたなり。

ム我每笑。珠云く、「笑止に思ふ。」

ウ胡亂穿鑿。珠云く、「たわいもない　ぜくりどとを云ひたがる、その胡亂を見よ、さ、當時。」

ヰ已是琅琊。珠云く、「名人と名人の出合ひ、禁敬此の上なし。」

ノ碧中沃冰雪。疑心熱悶、頓に清冷を得たり。珠云く、「かうありさうなことと、心地よかつた。」

オ鄙者之所執。鄙者は師自ら謙して稱す、言ふ意は大惠の此の語を以て、前頭の卷を掩ふて、長歎する底の所執を證據し得たり。

ク大慧眞絕。「絕世は世間に超越する、宗門の眼目なり」と珠はいへり。

ヤ後西。大惠の語の後面。

マ文殊普賢。珠云く、「琅琊と舉上座との出合はじや。」この語原は、もとこれは彼の大惠普說の第四に出づると同文同意味なり。

ケ覺範眞淨。眞淨克文は雲菴といふ覺範は法を眞淨に嗣ぐ。

フ不多時。珠云く、「悟後差別の大事其の妙を盡くす。」

コ因事出院。將に知んぬ、覺範も亦自ら悟處あり、即つてこれ師を離ること太だ早し、他眞淨に參ず、一日客あり、眞淨に問うて曰く、「洪上人參禪如何。」淨曰く、「惠洪、有る時は也た到處あり、有る時は也た不到處あり云云、」次の日偈事に因つて院を逐ひ出さると。又羅湖野錄の上に載す、「翌日因レ逆二神規一遣二刪去一」、時年二十有九」と。本叢書の二の卷の同錄四十四頁を參照すべし。

エ且如編。珠云く、「前をふんで再び覺範を評す。」

テ龍牙。居遁、洞山僧に嗣ぐ。後唐の莊宗同光元年寂す、日本の醍醐天皇延長元年に當る。

ア聚蚊。無學、丹霞然に嗣ぐ。

サ因緣。語說の則、碧岩第二十則に出づ。

キ牙問。珠云く、「うぬが悟つた西來意は、知つたかしらぬかと識主問なり。」

ユ禪魔。この事は寶林解夏に見ゆ。傍版除勞と譯す。今禪版と呼ぶ。

メ過。忠曰く、「通雅に云く、辰州の人、謂へり、物を以て人に予ふるを過と云ふ。」或新抄に、「過來はちよつととつてくれの意」と。

モ接得。珠云く、「受取るなり。」或新抄に「それを受取るや否や、すぐさまなぐつたの意。」接得とはおゝきに御苦勞とでも、いふことをさす。

レ打即任打。打つなら打つてもよろしいがとなり。

ロ要且。要はつまり、要するに結局の意。且はそれでも、又は打つたとての意。あなたの手の拳か

何なるか是れ祖師西來意。」濟云く、「我が與に蒲團を過し來れ。」牙蒲團を過して臨濟に與ふ、濟、接得して即ち打す。牙云く、「ヒ打つことは即ち打つに任す、要且つ祖師西來意なし。」又洞山に問ふ、「如何なるか是れ祖師西來意。」山云く「フ洞水の逆流せんを待つて、却つて汝に向つて道はん。」ヘ他者裏に到つて イ心路絕し、伎倆盡きて、只だ禮拜することを得たり。後の學者ロ己眼明かならずして、他の洞山に承嗣するを見て、便ち道ふ、「當時翠微臨濟に見ゆるの時未透なり」と。ハ一犬虛を吠ゆれば千猛寶を唾む。ニ雲門は睦州に見えて發明して、却つて ホ雪峯に嗣げり。

惟だ雪竇のみあつて、ヘ他の骨髓を見徹す。頌古の裡面に、ト劈頭に便ち道ふ、「チ龍牙山裡龍ら祖師西來の意が飛び出しはしませんよと。「たゞへんてつもなきあばら骨かなと悟り込んだ、西來は無意じや」と珠長老はいへり。

ヒ蒲團。ちよつと、あの蒲團をとつておくれといふ、とつてわたすと、大きに有りがたうと云ひざま、びしやりと打つた、この蒲團は坐禪するときにしく座蒲團なり、厚く坐物をしき、寬く衣體を掛くるなり。

ヘ打即任打。珠云く、「打つことはすゝはき程もお打ちなされ祖師西來に何んにも用はない。」

フ洞水逆流。珠云く、「帆掛け船を止めたとき。」

ホ他到者裏。珠云く、「漸くこゝに到つて此の大事を悟了した碧岩にも、「龍牙の則は後人の機關となる」ともある。

イ心路絕伎。珠云く、「今迄は無意を以て是非ともとおし立てきた、是れは洞水逆流じやゆゑ、今は心路絕しゝ云、」西來意でもない、有意でもないを知つた、古の道歌に「さゝがにのいとのかよひぢたえはてて、かゝる方なき吾が心かな」とあり、渓抄には「按二龍牙傳一所レ編」とあり、之を略す、今師は其の大旨に據つて之を詳にする耳。

ロ己眼不明。珠云く、「差別の眼。」

ハ一犬吠虛。猿は當に獵に作るべし、努力の切、惡犬長毛なり、猿は猴なり、義に非ず、唾は吾崖、犬のたゝかふ貌、かみあひなり、なんでもないことをほえまはる。

ニ雲門睦州。雲門は初は睦州に見ゆるも。

に眼なし」と。此の語辛辣にして近傍し難し。蓋し㊀他の用處㊁多くは此に類す。㊂只だ楞嚴の辨見の處を頌するが如きんば、㊃吾が不見の時何ぞ㊄吾が不見の處を見ざる、若し不見を見ば㊅自然に㊆彼の不見の相に非じ、㊇若し吾が不見の地を見ずんば、㊈自然に物に非じ、㊉云何が汝に非ざらんと、釋迦老子、㊊脫白露淨に說き得て、多少か分曉なり。他却つて頌じて道く㊋「全象全牛醫不殊、㊌從來作者共名模、㊍如今要見黃頭老、㊎刹刹塵塵在半途」。譬へば衆盲の象を模するが如し。其の象を知ると雖も、而も㊏其の全象を見ず。㊐庖丁が牛を解くが如きんば、其の牛を解くと雖も、而も未だ其の全牛を得ず、㊑全象全牛の地に到るが若きんば、㊒之を理極り情忘すと謂はん。雪竇却つて道ふ

㊓雪峰。龍牙、初は翠微、臨濟に見ゆるとき、已に透關し了つて、後に洞山に亦嗣す、今雲門の事を引く、碧岩の評にこの龍牙の評は第二十則にあり、參照すべし。珠云く、「是れを引くも虛堂きこえぬ、雲門の睦州下で悟つたと、龍牙の要且無西來意と云つたとくらべものにはならぬ。萬里のちがひじや。」と

㊔見徹他骨髓。珠云く、「他は龍牙、凡見のあたはぬ他の全體を見とほされた。」

㊕劈頭便道。珠云く、「まづ最初謂ひだしに。」

㊖龍牙山裏。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊗他用處。雪竇。

㊘多類此。類を引いて上の頌の意を證せんことを要す。

㊙楞嚴辨見。碧岩九十四則、楞嚴二の上にあり、辨見は八還で、明暗、通塞、空有、染淨の八である。

㊚吾不見時。珠云く、「吾れは佛自ら稱す。不見時は隻手の音聲手に入るとき、觀感を活用させない時。」

㊛吾不見處。活用させないで、自已に內在させてをる觀感。珠云く、「なぜ印龍の中の富士山を見ぬ。」或抄に、「吾れなにも見ぬ處をば見屆けることはならぬ。」

㊜自然。勿論といふやうな意味の副詞なり。

㊝彼不見之相。彼は不見を見られた人を指す。珠云く、「實相無相の體じや。」或抄に「不見は無相なれば形もない。」相は客觀の意。

㊞吾不見之地。珠云く、「不見の地は萬象森羅、本地の風光となる。不見は個位へ切つて出でば、そこに坐斷して居てならぬから。」或抄に「地は處に同じ、」こゝでは地も處も主觀の意に使つてある。

㊟自然非物。珠云く、「本來無相の自然有相有爲の物でない、」或抄に「物はこれは相と同義で、客觀の意。」或新抄に「外物に非ず、所有の物は目に見ゆれども、不見の處は物でない、青でも赤でもない。」

㊠云何非汝。抄云く、「大地山河全身紫金光じや。」或抄に、「これはどうしてそれが自已でないと云ふことがあらう。それは自已であるといふの義」と。或新抄に云く、「汝が眞見の性ぞとなり、物でない故に、自已佛心でなくては」と。「この公案は今の哲學的の議論である、陶分初學者には難解を免れぬ」と或は名師は云ふている。

㊡肱白露淨。珠云く、「まるはだか、人人具足の如來じや。」

㊢全象全牛。全象はこれは涅槃經第三十卷にある印度の寓話で、象は佛性に盲は一切無明衆生にたとへる、宇宙の實體を見ること出來ずして、兎や角批議し論評するを愚なりと諷刺するに用ひた語なり、全牛は莊子の內篇養生主にある「庖丁、文惠王の爲に牛を解く手の觸るゝ所、肩の倚るところ、足の履むところ、膝の踦るところ、三年の後、未だ嘗て全牛を見ず」といふ話に基いていへり、翠は眼中に入つた、ほこりのやうなものを云ふ、つまりいへば宇宙の實體は無限廣大である。そんな象や牛などでない。本來をいへば

「儞直饒ひ全象全牛に到ることを得とも、㊡他の幻翳と何ぞ殊ならん」と。却つて釋迦老子の○指出して、人に似す底を把つて、㊣一時に潑撒し了れり。㊤此の老の用處、動著すれば便ち是れ砒霜狼毒なり。覺範却つて道ふ、「雪竇㊥死水睛龍を以て之を罪す」と。㊦分明に是れ活祖師意、㊧却つて死法の會を作し了れり。㊨他分明に道ふ、「㊩龍牙山裏龍無眼、㊪死水何曾振古風、㊫禪板蒲團不能用、㊬只應分付與盧公」。」者箇便ち杜撰の長老と㊭麻の如く粟に似たり、㊮伯仲の間なり。雪竇人の曉らざらんことを恐れて復た一頌を成せり。「㊯盧公付了亦何憑、㊰坐倚休將繼祖燈」㊱堪對暮雲歸未合、㊲遠山無限碧層層」と。㊳者裏千門萬戶、一時に打透す、是れ覺範、雪竇㊴頓放の處を知

㊡幻翳。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊢他用處。雪竇。

㊣一時に潑撒。珠云く、「まるはだかの人人具足の如來じや。」

㊤此の老の用處、動著すれば便ち是れ砒霜狼毒なり。珠云く、「本來無相の自然有相有爲の物でない、」或抄に「物はこれは相と同義で、客觀の意。」或新抄に「外物に非ず、所有の物は目に見ゆれども、不見の處は物でない、青でも赤でもない。」

㊥死水睛龍。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊦分明に是れ活祖師意。珠云く、「まづ最初謂ひだしに。」

㊧却つて死法の會を作し了れり。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊨他分明に道ふ。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊩龍牙山裏龍無眼。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊪死水何曾振古風。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊫禪板蒲團不能用。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊬只應分付與盧公。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊭麻の如く粟に似たり。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊮伯仲の間なり。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊯盧公付了亦何憑。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊰坐倚休將繼祖燈。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊱堪對暮雲歸未合。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊲遠山無限碧層層。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊳者裏千門萬戶。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊴一時に打透す。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊵是れ覺範、雪竇。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

㊶頓放の處を知。珠云く、「龍牙を梵天に托上した。」龍は龍なれども目が見えぬ、大地山河見えなば、水旱に雲雨を施すことはならぬ、可惜許。

眼の中に入つたほこりに等しいものであると。珠云く、「全象は見、全牛は不見、本則の前では全象も全牛も眼中の翳。」と、又云く、「あまり漏逗、それが雪竇の氣に入らぬよし、たとひ世尊此の法の全體をくり返し見終せても、衲僧の面目は未だ全身を見ず。」と、或抄に「此の頌は雪竇無類の名作じや」と。

ナ 作者共名模。珠云く、「四七二三、天下の學者名を付けたり、形を形容して見れども、一つもほんたうのことでない。」或抄に「天下の名士(作者)が、これが神じやとか佛じやとか大騒ぎをしてをるが、つまり彼等は犬象を名模してをる群盲たるにすぎぬ。」名模は名貌のあて字で、品評とか批判とかの意、模模のあやまりで、手へんと木へんとが古來まちがへられてゐる。

ラ 見黃頭老。黃頭は梵には迦毘羅といふ。佛、迦毘羅に生れ玉ふを以て、生處に就いていふと、此の解或は非ならん。紫磨金身といふの意より轉じていふなり。珠云く、如來の本懷本則の意を見やうとならば。」

ム 刹刹塵塵。刹刹はこれは唐譯の八十華嚴經にある刹塵、即ち無數國土を意味する語である、刹とは梵語、差多羅、刹土のことなり、刹々塵々は詩的に重疊したるものなり、珠云く、「佛體と明めてもなにもかも皆牛迹、なんたる智者でも在二牛迹一」とは是れ眞正の擧揚、雲門宗の鳥居、雪豆の肝腦、雖雖、此れをば虛堂の辨ぜられぬが殘念じや。」或新抄に「刹界塵界、諸方に瀰論してありながら、牛迹にあり、釋迦も彌陀も修行最中で、牛迹にては出來上つたとは云はせぬ雪豆が德雲老古錐、幾たびか妙峰頂を下る、他の痴聖人を衝ふて、雪を擔つて共に井を塡むと、これ等の句に參せよ、看ん、鶴林曰くこれは雪豆の秘曲塗毒鼓なり」と。

ウ 不見其全象。各異端を說いて全象を見ずとなり。

イ 庖丁解牛。或抄に云く、「庖丁、全牛を見ずなどと云ふ、色即是空なり。」

ノ 全象全牛。是れ亦全象を見て全牛を見ざるの地位なり、珠云く、「無上道の全體を見徹したる端的。」

オ 理絡情忘。絡妙窮玄、適に情謂の境界を忘れず。珠云く、「正位のどんぞこに至り、」至極の理極つた處は、妄情意識の沙汰はたきなり。」

ク 與他幻翳。珠云く、「實體のないからくりじや、祖師門下と自雲萬里。○指出似人底。或抄に、「見性を眞に指出し、人にしめす、眞見處底を云ふ。」

ヤ 一時潑撒。潑は潑散をいふ、撒は揮散をいふ、分散して微塵と作すの意なり、これ掃蕩の義なり、水をすてる、水をまくなり、珠云く「翳と珠ならずとならば、潑撒し了る雪竇がかきちらした折、水をすつるやうにうちやつてしもふた。」

雲溪曰く、「經に或は見といひ或は不見といふ、雪竇、全象全牛を以て見と不見との妙處を喩ふ、言ふ意は全象全牛の妙處に到るも、眼中の翳と殊ならずとなり、情を盡して掃蕩し了れり、上に所謂辛辣にして、近傍し難き處なり。」

マ 此老用處。雪竇往往に箇の毒辣の樫を用ふと。

ケ 死水躍龍。覺範が僧寶傳の龍牙の贊に云く、「雪竇以二躍龍死水一罪レ之、龍牙聞レ之、必大笑」と。珠云く、「龍が直に死水、是の故に出身なし、天堂を見ず、地獄を見ず、首尾が見えぬ、能見所見なり、是れから西來意なしと云ひ出した。」之をは龍牙をさす、珠云く、「これは虛堂の粗相だ」と。

フ 分明活祖師。雪竇の頌を辨揚す、珠云く、「これは虛堂の評なり、是れも一時の料簡あつて、云ひ出したもしれぬか。」

コ 却死法會。覺範の例を抑下す。珠云く、「覺範却つて死法は智解の會をしてしまふた、活法の處に錯つてじや。」

エ 他分明道。雪豆ははつきりと頌してゐる。

テ 龍牙山裏。傳燈の二十九龍牙頌には、「龍牙山裏、龍形非二世間色一」と、」蓋し世間の形に非ず、故に今の無眼を以て正眼と作す。」或抄に「龍牙和尙は湖南の龍牙山妙濟院の住持であつたから、この龍は活眼がない、古人のやうな殺活自在のはたらきは出來ない」と。珠云く、「雪竇こゝには一手擡一手搦。」無眼は二字で天まで托上す。

ア 死水何曾。珠云く、「死水は洞水逆流の下、心路絕二伎倆一盡して、只だ禮拜したる端的、寂寂無相、西來無意正位の死水、千古の眞風を振はん、活龍の境界はしらぬ。」或抄に云く、「死水はたまり水、古風は古法の意、丸で水溜の子子(ポフ)のやうて、あんなことで古人のやうな殺活自在の働きは迚も出來ぬ。」と死水あまなつて。

サ 轟板蒲團。珠云く、「龍牙もあはれなことかなじや、二大老十分に與へたけれども、」或抄に「龍牙が活用が出來ぬならば。」或抄に「餘意を云ふ、雪竇氣を以て云ふ。」

キ 分付盧公。盧公は碧岩二十則の評に、往々六と作すは非なり、又云く昔し雪竇自ら呼んで盧公と作すと雪豆が祖英集に晦迹自貽すといふに題して云く、「圖畫當年愛二洞底一、波心七十二峰青、而今高臥思二南事一。活得盧公倚二石屏一」と雪竇は盧氏でないから、盧行者の六祖となすは非なり、雪豆別に據りどころありて自ら比するならん分附は吩咐のあて字かと云ふ說あれども、これは單に、「やつてしまふ」の意ならん、同則の評に、「龍分付して人に與ふ、臨濟や翠微に」とあればなり。珠云く、「おれがみ

ごと用ひてみやう。」

㋙如麻似粟。前の舉上座の因緣。

㋚伯仲間也。一類の義、兄弟のことを伯仲といふ。詩經の何人か斯に「伯氏は塤を吹き、仲氏は篪を吹く」と、才の優劣なきを云ふ、珠云く「どちがどちとも分らぬ、よく似た語路じや。」

㋛盧公付子。碧岩の評に、「何の憑據か有らん、直に須らく、這裏に向つて恁麼(當體)に會し去るべし」、或抄に「憑はちやうほふとせず」。或抄に云く、何憑は俗に云ふ「しようがない」の意で、盧公にそんな禪板や蒲團をやつてもしかたがないといふが全句の意である。」珠云く「おれに度したとて、なにたのみにし、憑冨はせぬ。」

㋜坐倚祖燈。珠云く「坐は蒲團、倚は禪板、なぜ禪板蒲團、西來意の分際で、なにしに一大事の逆磨の正法眼藏を相續するもので。」龍溪云く「蒲團に坐し禪板に倚る耳にして祖燈を繼ぐに意なし。或抄に云く「祖燈は佛祖の命脈を傳へることの業はとつくに廢しだ、そのやうな人には禪板も蒲團も丸で盲人に眼鏡である。」碧岩の評にも、「雪豆時に拈じ了れり、他情の轉身の處あり、末後自ら箇の消息を露はす」とあり。

㋝暮雲歸未合。珠云く「うちながめてゐるまで。」又云く「西來無意を云つたを頌したと云ふたは、わけをしらぬでござる。」或抄に「暮雲は春の日の晚景で堪對の二字に情あり。」碧岩の評にも「些子の好處あり」と、又云く「雪豆の意は、什麼の處にか在る、暮雲の歸つて合せんと欲して、未だ合ぜざるの時傾道へ、作麼生と。」或抄に「ああ夕陽西に傾き、暮雲が山の端に搦曳してゐる樣子は、實に何とも云へぬ風景じや。」

㋞遠山無限。洞庭あたりの風景じや碧岩の評に、「舊きに依つて(或は坐或は倚)鬼窟裏に打入し去る、這裡に到つて得失是非一時に坐斷して、洒洒落落として始めて些々に絞れり。」又云く「是れ文殊の境界か是れ普賢の境界か是れ觀音の境界か(智行慈悲)」。或抄に「遠くの山山は幾層にも幾層にもなつて、藍碧紺青の樓臺でも積み重ねたやうになつて、祖師西來意を表するに活躍してゐる。めいめいごらんなさい」と。珠云く「雪豆何を云ひ出した、宗旨じやと云ふ乎、宗旨と云はば、見成と云はば、みな三十棒。」溪注に曰く「全く向上無心の境界、是れ禪板蒲團、用ひ得る底なり。此の頌に據らば、龍牙の守る所の實を知るに足る」と。

㋟千門萬戶。珠云く「者裏とは對するに堪へたりとのこと、千門萬戶とは如來の一代藏教、列祖の折角語訛の因緣もこの中にあると云ふこと。」溪云く「龍牙の底理を剖析するなり。」

らずんば、㋠蓋し用一時に在つて、㋡失千古に在り。

學道の人、若し一番㋢胡孫子の死することを得ずんば、如何が邪正を辨得せん。若し㋣一番胡孫子の活することを得ずんば、如何が生死を脫得せん。適來㋥如許多の家具子は、衲僧九十日の內、㋦暫く掛くる餅盂なり。若し㋧挨拶不透ならば、則ち㋨行脚の大事に孤負せん。若し㋩挨拶得透ならば、㋪白衣拜相の如く、平生を慶快せん。其れ如し未だ然らずんば、更に㋫彌勒生下して、㋬化緣劫空じて、復た涅槃に入つて再び出頭し來つて、㋭未盡を垂接するを待つとも、也た未だ了當なることを得ざること在らん何が故ぞ。」拂子を擊つて、「㋮勸君得處披衣坐、㋯莫折松枝拂蘚痕。久立。」

㋠頓放處。頓放頓置、みな施設をいふ、忠曰く「擲出の如し放つて下に在るなり」、「劍を頓(おろ)す」などと戰國策三上にあり。

㋡蓋用在一時。只だ是れ一時の施用のみ。珠云く「文章に任せ、はたらきわざをやられた」

㋢失在千古。然も其の弊失、千古の後學を疑誤するに到る。己上は僧寶傳龍牙章の錯を判す。珠云く「しぞこなひいつがいつ迄もじや。」

㋣胡孫子。胡孫は攀緣の心に喩ふ、法語に見ゆ。珠云く「論心なり、是れ虛堂一丈なれば拄杖も又一丈。」

㋤一番胡孫子。珠云く「背觸がさつぱりすまず、陳操登樓がらちあかぬ」と。溪曰く「若し不如是ならば他の邪正を辨じ自らの生死を脫すること能はず」と。此の一節は直に本旨に歸して、上の數段の義を結ぶ。

㋥如許多家具子。珠云く「普說の中の因緣話頭。」

㋦暫掛餅盂。滯餅、鉢盂、家具子に應じて皆家常受用底の話柄の故なり。珠云く「九十日の內、暫時の示敎なれどなくてかなはぬ。」餅盂なり、家常底なり。

㋧挨拶不透。珠云く「一挨一拶一問一答、竪に究め橫に究めずんば。」

㋨行脚大事。平生撥草、參玄を以て念と爲ればなり。珠云く「相逢して後代に空しく悔いん。」

㋩挨拶得透。珠云く「一挨一拶右を左を推し究めてあるならば。」

㋪白衣拜請。顯孝錄に見ゆ「できぶげん。」

㋫彌勒生下。佛滅より彌勒の生るるに至るまで五十六億萬歲

雙林夏前告香普說　終

㊀化緣功突。珠云く、「化度因緣、世界が盡きて。」

㋐垂接未盡。珠云く、「濟度しのこりたる無眼子を手を垂れ引き上げらるる。」

㋑勸君得處、虚堂が穿さくにかけると、すぢ骨をぬかれる。こゝに鋼勒の下生をまたず、直下そこばくの毒箭を設けてあたれがしと、閻處作主。

㋒莫折松枝。言ふ意は隨處に領らく立夏すべし、岩間石上を惹ふこと莫かれ」と。雪竇、喜三禪人遇レ山の頌に云く、「別レ我遊方意未レ論、耕孟還喜到三雲根一、舊岩房有三安禪石一、再折三松枝　拂三蘚痕一」と、今韓じて結す。この頌は祖英集にあり。

靈隱立僧普說

㊂靈隱。支那五山の第二なり、第一代は惠理禪師、西域の人、永明壽、宏智覺など古名僧住せり、杭州臨安府にあり、武林山に在り、晉の咸和の初に建つ、北山といふ方丈を直指堂といふ、飛來峰又は小桑峰冷泉亭北高峰あり、靈隱は淨慈に對する故に、南北の名あり、呼猿洞又は白猿洞とも云ふ、石蓮峰、合澗橋、鷲嶺、九里松徑、壑雷亭、蓮峰堂、楠檀林あり、寺外に九里の松あり、道を夾む。唐詩に靈隱は山の名、許由隱居するより乃ち其の山に名づく。詩格に云く、「盧野涉三靈隱一、」冷泉亭詩に曰く、「問梁何以名三靈隱一、山曰三當年隱三許由一。」

㊃立僧普說。百丈清規下の一に「立僧の首座を請す、其の事、嚴重輕々しく擧ぐべからず。」無着和尚の犂耕に「忠曰く、舊說に曰く、立僧は謂く、衆僧を成立するなり、定まれる人なし、首座頭首の外に、別に西堂或は禪堂及び諸書狀の中に於て、有道傳達の人を擇び教請衆の爲に開法せしむ焉、或は大方の尊宿を請じて之に充つるあり、極めて重任と爲す矣、夫れ前堂首座の主に代

侍者淨覃編

㋐威音那畔の一著子、往古の宿衲、軀命を忘れて㋑力めて之を行ふ。㋒務めて拈華面壁の風墜さざらんことを要して、以て㋓佛祖の深恩を報せんことを圖る。

近年叢林㋔凋弊して、學者㋕宗猷を本とせず、㋖外學に浸淫して、㋗無明を滋長して、㋘千百羣居すと雖も、未だ㋙龜紋を爆するが如くなるあることを聞かず、以て末世㋚滅胡種族と爲るべし良に悲しみつべし也。

若し是の如く㋛行脚し、是の如く㋜人に見えば則ち其の利甚だ輕うして、其の害甚だ重からん

りて說法する者な、尙ほ人に乏し日本古へ之を闕くことあり、況んや立僧の名、實相符ふて豈に多く得易らん耶、名德首座の如きんば則ち前堂の中に稍々德ある者を擇んで之と爲す。甚だ得難きにあらざるなり。」蘇尾の行狀を按ずるに曰く、「婺の寶林に迁る五年、冕冠の難に罹りて松源の塔下に歸す、東谷和尙冷泉に主たり、立僧に辜せんと欲す、衛就せざるを恐れて納子再三懇請す、師之に從つて開室普說して、三轄語を垂れ、滿堂泊あること罔し。」忠按するに、「虛和尙、是の時七十歲に垂んとす又曰く、「舊說に退位爲人は是れを却來の首座と爲す、」忠曰く、「正に今虛堂退位爲人、却來の首座、」方丈の行者袢袱を以て入室普說の二牌を盛りて、即ち座下に於て大衆と同じく拜請して、普說の牌を掛く、預め照堂に鋪設し、(禪椅、拂子、主丈、燈燭)、鼓を鳴すこと一通衆集つて立定す、立僧鈇座、兩序問訊、住持問訊、立僧普說、說竟云云」と百丈淸規の下にあり、東谷和尙の名妙光、明極祚に嗣ぐ、祚は宏智覺に嗣ぐ。

㋓ 淨罩。偈頌の部に、淨罩藏主遊方の頌あり、後錄の眞贊部にも淨罩藏主の請あり。

㋔ 威音那畔。說は延福の入寺に見ゆ珠云く、「本地の風光本來の面目のこと、此の一句題目じや、是れ脫體見成の一着子。」この文十二段なり。

㋕ 力行之。臨濟の曰ふが如し、夫れ法の爲にするものは、喪身失命を避けず。

㋖ 拈華面壁。佛祖の風規地に墜さゞるなり。珠云く、「是非とも務め須めて佛の惠命を、末世に傳へて利益せんため。」

㋗ 佛祖深恩。佛は拈華に應じ、祖は面壁に應ず。已上は本宗の大綱を標す。

㋘ 凋弊。凋零衰弊。

㋙ 不本宗猷。猷は道なり。珠云く、「拈花面壁の風。」

㋚ 浸淫外學。說文に「浸淫は理に隨ふなり、」心外に法を見る底なり、珠云く、「浸漸耽淫。すきこのむなり。」

㋛ 滋長無明。滋は益なり、大惠呂郎中に若ふる書に曰く、「書を讀得ること多き底は、無明も多し」と、是なり。

㋜ 千百群居。此彼に。

㋝ 爆龜紋。頓悟開發を表す。珠云く「一超直入、はつしとわれて勝負つくやうなことはない、」又云く、「命根截斷底の袖子あることを見ず、又冷灰豆爆の類の如し、頓悟圓地下の時ないふ。

㋞ 滅胡種族。珠云く、「佛の惠命を滅する。」西竺を稱して胡と爲す、又達磨を碧眼の胡僧などと云ふ、佛種族といふが如し。

㋟ 行脚。永嘉の所謂江海に遊び山川を涉り、師を尋ね道を訪ふを參禪となす、豈に然らざらん耶。

㋠ 見人。珠云く、「師家に相見せば。」

㋡ 捱到頭白。捱は延び捱む。偈頌の僧母を省するを送る等に見ゆ、延は及なり、此には老を謂ふ。珠云く、「俗に延び緩むを捱と曰ふ、猶ほ漸々と言ふが如し。

㋢ 孤燈獨照。命根將に斷せんとすることを表す。珠云く、「行燈の火の消ゆる時の如く。」此には死を云ふ。

㋣ 滄糟徹白業。黑白の二業白は善業なり。所謂幾卷の經を看幾座の佛を念じ、佛前に多體幾拜する底なり。珠云く、「あながち是れで成佛じやと云ふにはあらず。」

㋤ 田舍翁去住。珠云く、「田舍翁の妻は働き、夜は休む、無造作なるもの。」大慧の書に云ふ「三家村裏省事の漢じや。」

㋥ 無許惡知。所知障なきが故に去住自由なり、已上は旁流の邪黨を遮る、珠云く、「他とは田舍翁、惡知は分別、惡覺は六根に觸れてさま〳〵の妄想。」

㋦ 疎山矮師叔。この錄の前の端巖錄に見ゆ、香嚴と同參なれば、嚴、特に矮師叔と稱す、「凡て法の親眷を尊んで、師兄、師叔と呼ぶ、香嚴爾かいふより已後に、林下の口實と爲る」と傳燈十七にあり。

㋧ 向聲色裏。寶誌大士の大乘讚に「若し道の眞體を悟らんと欲せば、聲色言語を除くこと莫れ。」珠云く、「寂寞無人聲の處に足を止めるな、偏正三昧音聲を止め、帆掛船を止むる庭、甚深の境界。」

㋨ 不落聲色。話頭を轉じて問著す。

㋩ 頭白く、齒黃み、

㋪ 孤燈獨照の時に捱到して

㋫ 遠く白業を精修する底の、

㋬ 田舍翁の去住自由なるに如かじ、蓋し他

㋭ 許多の惡知惡覺なければなり。

㋮ 疎山の矮師叔、探道の心甚だ切なり。一日溈山の會裡に在つて、衆に示して、「行脚の高士は直に須らく

㋯ 聲色裏に向つて睡眠し、聲色裏に坐臥して始めて得べし」と。疎山便ち出でて問ふ「如何なるか是れ

㋰ 聲色に落ちざる句。」溈山拂子を竪起す。疎山云く、「

㋱ 此れは是れ聲色に落ちざる句。」

㋲ 溈山便ち方丈に歸る。老子

㋳ 他の病此に在ることを知つて、

㋴ 千聖も眼を著け及ぼさゞる處に向つて、箇の消息を通ず。却つて乃ち

㋵ 坐ながらに家堂を坐鎭して、圭角を露さず、既に契はずして、

㋶ 遂に香嚴を辭す。嚴云く、

く、「何ぞ且く住まらざる。」疎山云く、「某甲、和尙と緣なし。」嚴云く、「何の因緣の契はざるかある、試みに擧せよ看ん。」疎山前話を擧す。嚴云く、「某甲、箇の道處あり。」乃ち云く、「㊆言發聲にあらず、色前物にあらずと、此の語は是れ㊇機に對して、溈山の疎山を㊈點發するものなり。矮子聞き得て、㊉眼睛便ち活す。」乃ち云く「元來㊋此の中に人あり」と。遂に香嚴に囑げて云く、「某甲㊌且く去らん、師兄住處あらば、㊍却來して相見せん。」溈山晚に至つて香嚴に問ふ「聲色の話を問ふ底の矮閣梨在りや否や。」嚴云く、「己に去り了れり。」溈云く、「子に向つて甚麼とか道ひへ。」嚴云く、「某甲、他に對して道ふ、言發聲に非ず、色前物にあらずと。」溈云く、「他甚麼と道ひし。」嚴云く、「他深く之を肯ふ。」溈山㊏溈山拂子。珠云く、「是りや、衆中至、衆中到。」

㊐此是擺色。珠云く、「やつぱりそりや拂子、こりや主丈、雀はちう〳〵、鴉はかあ〳〵。」

㊑便歸方丈。珠云く、「それにごされと、便ち方丈に歸る、此に爲人があるか。實に一千五百人の善知識。」

㊒他病在此。珠云く、「實相無相の正位の病を執して、差別の如用を知らず。」溈云く、「老子は溈山を、他は疎山を指す、下の圭角に至るまでは師の判語なり、」或抄に「此に在りとは擺色に落ちざる底。」

㊓千聖著眼。拂子を豎起する處珠云く、「千聖著レ眼不レ及とはどこじや、豎拂の處か方丈に歸るの處乎。」

㊔坐興家堂。方丈に歸るの處。坐はゐながらと訓す、圭は上圓く下も方にして角あるの玉なり、物の角立てること、言語又は舉動の他と融和せざること。孟子の序說に程子曰く「便有二圭角一」とあり、今は機鋒ないふ。珠云く、「是れが落ちぬところじやの、落ちた處じやのと云はせぬ。」

㊕遂辭香嚴。このとき香嚴智閑は上首たり、一老たり、首座たり。

㊖言發擺色。三平の偈に「所謂此の見聞に即して見聞に非ず餘の擺色の君に呈すべきなし」の意なり。珠云く、「こちの溈山老子は、くど〳〵くどけれども、詞でない擺でない(言發非レ擺)、豎てた拂子が拂子でない(色前不レ物)。」

㊗對機。珠云く、「御挨拶申しじや、擺色裏擺色にあらずと云ふにもあたる。」

㊘點發。珠云く、「指點開發。」

㊙眼睛便活。珠云く、「はつと勢

㊚失笑して云く、「我れ將に謂へり、者の矮子長處ありと。元來只だ㊛者裏に在り、㊜此の子㊝向去、設ひ住處あるも、㊞山に近うして柴の燒くなく、水に近うして水の喫するなけん。」應庵和尙道く、㊟如今箇の言發聲に非ず、色前物にあらざる底を討ぬるに、早く是れ得がたし。更に他の溈山の說話を會せんと要するをやと、㊠行脚の人、還つて緇素得出す麼、㊡背地裡に强項にして、自ら高ぶること莫れ。㊢若し經緯分たずんば、㊣本色の衲子と名づけじ。」

疎山又㊤湖北の金鑾寺の裏に在つて夏を度る。夜間に僧の福州㊥長慶の懶安和尙の衆に示して云く、「㊦有句無句は、藤の樹に倚るが如し」といふ因緣を擧するを聞く。疎山聞き得て道く、「我れに一轉語あり、去つて者の老子に問はんがついて。」

㊧此中有人。香嚴を嘆美す。

㊨且去。珠云く、「此の度は且く去らん。」

㊩却來相見。珠云く、「師兄の香嚴さん、あんたが住處あらば(出世なされば)香嚴さんよりありがたいものはなし、かへつて來て御目にかゝらう」と。

㊫溈山失笑。珠云く、「此の笑ひはこはいぞ、是れ疎山が笑ふたか香嚴を笑ふたか。」

㊬在者裏。これのみの見解で留めたか。

㊭此子。矮子の疎山。

㊮向去。このまき。

㊯近山燒柴。言ふ意はよく徹したとき、徹のさたないと。

㊰如今箇言。應庵錄の小參に曰く、「溈山又云く、此の子、向去設ひ住處あるとも、近レ山無二柴燒一、近レ水無二水喫一」と、爛泥裏に刺あり、然れども古人の言必ず妄にあらず矣、在今天下一箇言發非レ擺色前不レ物底を討するに、正に地を掘つて天を覓むるが如し、何ぞ況んや溈山の說話を會せんと要せば、言はずして知るべし、然りと雖も、切に忌む、龜を鑽り瓦を打することを、」珠云く「六七百年前もかやうであつたよな、ああ、說話は向上の話なり、方丈に歸るの端的」

㊱行脚人還。即今今時の行脚の人分明に辨別するやどうじやと、緇素は是非黑白。

㊲背地裡强。背地はかたかげ。珠云く、「かげ辨慶がならずものじや、强項は加せざるなり」珠云く、「鳥なき里にゐては、天下を併呑して自慢ばかり。」

㊳經緯不分。縱を經と曰ふ、橫を緯と曰ふ、左傳に「天地を經緯するを文と曰ふ」とあり順序正しく治めとゝのふを云

ことを要す」と。夏罷んで遂に㊀閩に入つて、懶安和尙に見ゆ、又㊁之を溈山和尙と謂ふ。㊂裴相國閩に帥たり、溈山より請じて長慶に住せしむ。疎山彼に到る、師の泥壁するに値ふ次で、疎山便ち問ふ、有句無句は、藤の樹に倚るが如しと、是れ和尙の語なりや否や。溈山云く、「是。」疎山云く、「忽然として樹倒れ藤枯るれば句何れの處にか歸せん。」㊃溈山、泥盤を放下して、㊄呵呵と笑つて方丈に歸る。疎山云く、「某甲三千里外、㊅布單を賣却して、特に此の事の爲に來る、和尙甚としてか某甲が與めに說かざる。」溈山云く、「㊆侍者錢を將つて、者の矮闍黎に與へて去らしめよ、他日㊇獨眼龍といふものありて、汝が爲に㊈點破せん。」後に明招に到つて、前話を擧す。招云く、「溈山頭正しく尾正しふ。珠云く、「根本の差別正偏空假。」俗語の「いきさつ」なり。

㊁本色衲子。已上は辟色の話を評して辨明の切なるを示す。

㊂湖北。荊州にあり。

㊃長慶獨安。和尙牛頭の嗣、長慶の安、南岳の瑞、みな三安の一なり。この緣は瑞巖錄に見ゆ。

㊄有句無句。珠云く、「敎相では臨濟の二見に墮す、獨安の手元に於ては、向上宗乘の大事」

㊅入國。三千里外はる〳〵と。

㊆訓之溈山。私に云く、「第二代の住持となる。溈山に在ること三十年、第一代の溈山を助く、百丈海に嗣ぐ、第一代とは同參、獨安は福州長慶大安禪師と傳にあり、獨安は異名じや、溈山は潭州、長慶は福州。」

㊇裴相國。裴休、字は公美、河東の聞喜の人なり、法を黃檗希運に得る、師は前に釋す、國は福州府、周の時は七國の地と爲す、唐には國州なり。

㊈溈山泥盤。珠云く、「この解は前に見ゆ、溈山の手元は向上宗乘、疎山は有無の二見にとどこほるものゝ笑ひてどうしよう。」

㊉呵呵。おはあ〳〵なり。

㊊布單。衣類なり。

㊋侍者將錢。或抄に云へ、「溈山の底意、そこばく有句無句の落處を示された、草鞋錢を與へて更に行脚せよと勸めらるるなり。此れ他の未徹在、行脚の事未だ了畢せずと責めらるるなり。」

㊌獨眼龍。羅山閑に嗣ぐ、閑は岸頭鑿に嗣ぐ、鑿州明招德謙禪師なり、羅山の印記を受け一隅に滯らず、玄旨を擧揚す人皆其の敏捷に畏れて、敢て

只だ是れ㊍知音に遇はず。」疎山云く、「忽然として樹倒れ藤枯るれば、句何れの處にか歸せん。」招云く、「㊎更に溈山をして笑ひ轉た新ならしむ。」疎山當下に省あり、乃ち云く、「㊏元來溈山㊐笑中に刀あり」と。

㊑如今の兄弟家、㊒只だ前を瞻ることを解して後を顧みることを能はず、僩纔かに溈山の笑裏に向つて覓めば、便ち是れ錯り了れり也。須らく是れ有句無句は、藤の樹に倚るが如しといふ處に向つて、一轉語を下し得で㊓親切ならば、略㊔下面許多の㊕閑絡索を去けて、方に㊖溈山㊗明招の千古の下、㊘人に檢點せ遭るることを免れ得ん。」僩若し一向に泥盤を㊙放下して、笑つて方丈に歸り、㊚更に溈山をして笑轉た新ならしむといふ處を認著して、㊛盲禪瞎證、遞に相

鋒に當るもの鮮し、左目を失するが以て、遂に獨眼龍と號す、祖庭事苑頌古の註に見ゆ。

㊍點破。いひわけを云ひきかすであらう。

㊎頭正尾正。珠云く、「首尾一直して見事な。」「泥盤放下、始終みごとなり」と或抄にいへり。

㊏不遇知音。珠云く、「殘念千萬高山流水、聞き手がない。」

㊐更使溈山笑。重新に笑ふべしとなり。珠云く、「まだ笑ひが不足か、もつと笑ふてほしひか。」

㊒元來。珠云く、「泥盤放下した處。」

㊓笑中有刀。唐の李義府、高宗の朝に參政に拜せらる、狡險忌克。人と語るに嬉怡微笑、陰中に之を傷む、人、笑中に刀あり、柔にして物を害すと謂ふ、又李猫と曰ふ。

㊔如今兄弟。珠云く、「巳下虛堂の語、修行の人の工夫法あることを示す。

㊕解膽前。珠云く、「はあ、笑中に刀ありとかゝ合點して。」或抄に云く、「溈山大笑（上の句）。」珠云く、「有句無句は藤の樹に倚るが如しと云ふわけな。」或抄に云く、「有句無句の處（下の句）。」

㊖親切。珠云く、「同意同等ならば。」

㊗閑絡索。珠云く、「閑葛藟といふが如し。」閑落索とかく、くされなはの事、なんの用にも立たぬ、落し語なり。

㊘溈山。伯牙。

㊙明招。鐘子期。

㊚遭人檢點。珠云く、「人にさま〴〵評判にあづかることはおるまい」と。

㊛下面。珠云く、「泥盤を放下するより、疎山省あり」に至るま

恁麼に流へ將ち去らば、只だ㊀他人の口頭の聲色を認得するのみにして、儞が自己分上、並に悟入の期なけん。㊁弄して極處に到るとも、終に㊂話墮と成らん也。

㊃疎山復　洞山に歸り、一日深夜に、㊄雲嵩所傳の㊅寶鏡三昧を以て、密に曹山に付せんと欲するを聞いて、疎山身を几下に潛めて㊆竊聽す。其の付し畢るを伺ふて、出で來つて掌を拊つて大笑して道く、「洞山の禪、分付し了ることあり」と也。亦㊇悟本の記に遺ふ。

後香嚴の約を爽へず、直に㊈鄧州に造る、一日香嚴上堂、僧あり、出でて問ふ、㊉諸聖を慕はず、己靈を重んせざる時如何。」此の語は是れ㊋石頭南嶽に使ひせし時、曾て此の問を與す。

讀和尚道く、「子が問㊌太高生、何ぞ向下に問はざる。」石頭云く、「㊍寧ろ㊎永劫に沈淪すべくとも、㊏諸聖の解脫を求めず」といつて、乃ち㊐清源に回る。㊑當時香嚴、者の僧の話に答へて道く、「㊒萬機休罷し、㊓千聖携へず。」疎山座下に在つて、㊔嘔吐の聲を作して云く、「是れ何の言ぞ歟。」嚴問ふ、「阿誰そ。」衆云く、「師叔。」嚴云く、「㊕山僧を請せざる那。」疎山、衆を出でゝ云く、「是。」嚴云く、「師叔、道ひ得ること莫しや。」疎山云く、「道ひ得てん。」嚴云く、「試みに道へ看ん。」疎山云く、「㊖若し某甲をして道はしめば、須らく師資の禮を還して始めて得べし。」㊗嚴乃ち下座し、大いに坐具を展べて、禮三拜して前問に㊘準ず。疎山云く、「萬機休罷するも、㊙猶ほ物の在るあり、千聖携へざるも、㊚亦人に從つて得、㊛何ぞ背浩全きことを得ずと道はで。」

㊀放下。珠云く、「鴻山受用底。」

㊁史。明招のはやされた爲人底

㊂百丈睛證。珠云く、「目くら禪法、さぐりさとり。」

㊃他人口頭。珠云く、「鴻山、明招のくちさきのありさまやうす。」

㊄弄。珠云く、「ひねくりまはして。」

㊅話墮。話墮ば、かたりおとす、言句の上に墮在す、自己悟入の分なき故に、縱使拈弄し得て、極處に到るとも、法に於て終に負墮ぜり。忠曰く、「自ら詞を吐く、自らの負墮なり」珠云く、「言句の窠窟なり、話墮也は言語になつんで理に叶はざる義なり。」已上は有句無句の話を擧して、工夫を用ふる處あることを示す。

㊆疎山復洞山。已下盜法の因緣を述ぶ。

㊇雲嵩。曇晟、藥山嚴に嗣ぐ、「嚴は石頭に嗣ぐ。

㊈寶鏡三昧。五位顯訣、三種滲漏は人天眼目に見ゆ。

㊉竊聽。珠云く、「黃だ鄧劣なること。

㊋遺悟本之記。悟本は洞山价の嫡なり、記は即ち倒圓の病の懸記なり、僧寶傳に曹山乾章傳云く、「矮師叔の盜法の事を載す。」已上は疎山盜法の事を述ぶ。

㊌鄧州。香嚴所在の地。

㊍不慕諸聖。佛祖を用ひず、己をも立てぬなり、珠云く、「不レ慕二諸聖一は鹽月の扇子の如し、不レ重二己靈一は脫屣の如し、なんとも存ぜぬ、是れは緣覺乘、一且、隻手の音聲にふみ込んだ、端的にあることじや。」

㊎石頭使南嶽。青原思禪師、石頭の希遷なして、書を持して南嶽讓和尚に與ふ。

㊏太高生。あまりさしすぎたぞといふ心なり、落し語。

㊐寧。俗語の「いつそ」のこと也

㊑永劫沈淪。或抄に、「已靈を重んぜず。」

㊒諸聖解脫。或抄に「諸聖を慕はず。」

㊓清源。當に青原に作るべし、吉安府の青原山、吉安は吉州なり。

㊔當時。一日上堂のとき。

㊕萬機休罷。已靈を重んぜずと千聖不携、諸聖を慕ばず、珠云く、「佛祖とても手み取り合はぬ」言ふ心は萬機休罷、徹底無心なるときは、則ちたとひ是れ千聖も亦提携誘引せずとなり。或抄に「休處は賊の塊宝に入るが如く、一物も携へぬぞ。」

㊖作嘔吐聲。此の答を聞いて臭穢な見るが如くす、故に嘔吐す。

㊗不諾山僧。珠云く、「おれが答話な背語せざるな。」

㊘教某甲道。「どうもできすぎものじや、勿慢ない」と珠はいへり。

㊙乃下座。珠云く、「なんぞ趙過したる語があらふか」と。乃下座とはこんなうろついた悟りでは面白くもない。

㊚準。珠云く、「擬なり、猶ほ舊に依るが如しといふが。」

㊛有爲在。珠云く、「休罷のしてがある。」

㊜徒人得。珠云く、「人があるからのことじや。」漢注に「針頭猶削レ鐵」

㊝何背浩全。全きことを得ざるものは背も亦背する處なし、諸も亦諾する處なし、謂なり珠云く、「何ぞ道はざると、おれが了簡ではあんまりすぐれた處もないと思ふ。非常にち

ざる。」嚴云く、「㋕肯ふことは又箇の甚麼をか肯ひ、㋖諾は又阿誰をか諾する。」疎山云く、「㋗肯ふことは即ち他の千聖を肯ひ、諾は即ち自己の靈を諾す。」嚴云く、「㋘饒ひ懶與麼なるも、也た須らく三十年倒屙すべし。設使ひ住山すとも、山に近うして柴の燒くなく、水に近うして水の喫するなけん。分明に記取せよ。」㋙後疎山に住す。果して記する所の如し、二十七年に至つて病愈ゆ。云く、「香嚴師兄、我れを三十年倒屙すと記す、今三年を少く」といつて、食し畢るに至る毎に、手を以て㋚抉して之を吐いて、以て前記に㋛應ず。

後㋜鏡清に問ふ、「㋝肯重全きこと得ずして懶作麼生。」清云く、「㋞全く肯重に歸す。」疎山云く、「㋟全きことを得ずといふ、聖。」清云く、「㋠

ひもあるまい。」忠曰く、「此れはこれ疎山正しく肯諾全きを得ずと如何の問ひに答ふるなり。」

㋝肯又箇甚。珠云く、「何が氣に入り納得するか。」

㋞諾又阿誰。珠云く、「なるほどうはがふは。」

㋟即肯。歸依し。

㋠饒懶與麼。珠云く、「是れにかぎらず、疎山もと人がらのわるいやつゆゑ。」

㋡疎山。撫州府にあり、疎山の疎山寺。

㋚抉。くじつてなり。

㋛應。あたる、當なり。

㋜鏡清。慈道者、前に見ゆ。雪峰の法子。

㋝肯重不得全。會元には重を諾と作る。珠云く、「肯の重のと云ふものあつては、山河大地、一全身となり得ることはならぬと云つたが。」或抄に云く、「肯は諸聖を肯ひ、重は已靈を重んず。」

㋞全歸肯重。重は會元には諾に作る。問を轉じて答ふ、是れ全意全重の意なり。珠云く、「こりや尤もじや、此方からば金屑は眼中の翳と見開いて、眞實肯重の端的じや。」

㋟不得全。傳燈には不得全肯者作麼生に作る。珠云く、「肯重では眞人どのがうろつかるるかたわになるると云ふが、こりや又どうじや。」

㋠箇中無肯路。全肯の中に於て肯路の界分なし。珠云く、「肯ふた端的、肯た相なし。」或抄に、「箇中は指す處。」

㋡納僧家。俗語でいへば、禪坊主はみな〳〵の意。已下二大老に至るまでは虛堂が上を判するなり。

㋢到此。珠云く、「疎山と鏡清との問答の端的なり、二大老は

箇の中肯路なし。」疎山云く、「方に病僧の意に愜へり」と。

㋣納僧家、㋤此に到つて推窮得出す麼、二大老の㋥肝膽を見得す麼。㋦當時香嚴、若し者の僧に答へ得て諦當ならば、何ぞ必ずしも下座して、疎山を禮拜せん。疎山若し香嚴を點破し得て、明白ならば、安ぞ倒屙の患を受くることを得ん。㋧者裡に到つて、也た須らく㋨些の納僧の眼を具して始めて得べし。山僧今日、㋩路不平を見て、却つて者の公案㋪を斷つて、我が五湖四海の衲子に㋫供養せんことを要す。㋬香嚴者の僧の話に答ふる、㋭神龜の圖を負ふが如し矮師叔、倒屙の患を招くことは、㋮順水に舟を流る、㋯若し盡天地の人をして倒屙せしむとも亦未だ必ずしも㋰横に點頭だもするものあらず

㋣納僧家。珠云く、「證悟の極處。」

㋤此。珠云く、「此の折角訛の處。」

㋥肝膽。珠云く、「些子の納僧、向上宗乘の眼、差別智又ば擇法眼じや。」

㋦當時。香嚴上堂の時。

㋧到者裡。珠云く、「路見不平。大法裏して行はれず、猶ほ道路の不平なるがごとし、珠云く、「こゝのらちのあかぬ處か。」

㋨些。判斷なり。

㋩路不平。大法裏して行はれず、猶ほ道路の不平なるがごとし、珠云く、「こゝのらちのあかぬ處か。」

㋪公案。判斷なり。

㋫供養。法供養なり。

㋬香嚴者僧。珠云く、「萬機休罷……不携。」

㋭神龜負圖。この解、前にも見ゆ、今は香殿直下に萬機休罷の剝文已に現在す。譬へば神龜の自ら喪身の兆を取るが如し。珠云く、「疎山に打ちくだかれずばならぬ、われめが早や見へえる。」

㋮順水流舟。疎山、香嚴の剝文を見て點破し來る、譬へば順水に舟を流るが如し、自然に力を費さず、珠云く、「自ら此の病うけねばならぬ。」

㋯盡大地人。珠云く、「縱ひ香嚴能く盡大地の人をして倒屙せしむとも、亦香嚴を肯ふものあるべからず。」

㋰橫點頭。珠云く、「極めて肯はず。」

㋱一句合頭語。是の故に縱ひ倒屙の患を招くとも、點破せずんばあるべからず、語は船子の傳に出ず。珠云く、「頭は助辭なり、驢みつなぐくひ、驢をして自在を得ざらしむ、今理味墮して自在を得ずと、諸聖が慕はず、萬機休罷すと、香合の蓋を合はせた。」已上は肯諾の話を舉して判擇して要路を示す。

㋲金以石試。結前生後、この言

何が故ぞ。㋑一句合頭の語、萬劫の繫驢橛。所以に、㋺金は石を以て試み、人は言を以て試む。㋩若し道眼明白ならば、在今天下豈に人なしと曰はんや。㋥者裏に到つて、㋭聰明強記を使ふこと㋬得ず、㋮波辯臆說㋯を使ふこと得ず、須らく是れ㋰自ら羞を識ること一番子して、㋱方に究竟と爲す。

㋲白雲端和尚、㋳楊次公が外集を見るに、中間㋴一偈あり、曹洞の宗旨を發明す。「㋵丹山鷄凰來ニ阿閣一、㋶秘殿簫韶奏ニ九成一、㋷野老不レ知黃屋貴、㋸六街猶聽靜鞭聲。」㋹乃ち云く、「㋺他は是れ過量の人、㋻古人の心髓を見徹す」と。洞山㋼季運の時に當つて、法門の㋽寢く衰ふることを恐る、故に㋾金剛般若の三句を用い、㋿五位君臣を設け、㌀三種の滲漏を立つ。㌁大爐鞴の如くにして、㌂末學を烹煅し、一箇箇をして、各〻㌃本來の契券を執つて、㌄祖父の田園を繼紹せしむ。

後來大悲、因に普說す。㌅東を聲し西を擊つて、㌆薄に議する所あり。學者既に㌇正知見無うして、往往に㌈矮子の戲を看るが如し、借使洞上の五位、㌉以て輕しく議すべくとも、則ち臨濟の㌊三玄要、㌋四料揀、㌌四賓主、㌍四照用、亦議すべけん也。汾陽の㌎十智同眞、㌏浮山の九帶、㌐黃龍の三關の如きんば、㌑國家の兵器の如し、己むことを得ざればなり。㌒初めより實義なし。佛眼、五祖の會裏に在つて㌓分化して方に歸る、佛果纔に見て便ち道く、「臨濟の三句作麼生。」分明に是れ㌔寶を鑒つて賊を引く。㌕他一夜思量して、明日佛果に謂ふ

㋑聰明強記。珠云く、「耳ゝ眼と記は記持。」
㋺不得。珠云く、「はたらけぬ。」
㋩識蓋。悟證か云ふ。
㋭方爲究竟。珠云く、「はじめて眞の下載の清風、大事成辦といふべし。」溪云く、「自ら蓋を識るは即ち眞正の見解なり。」已上は實參實悟の要を示す。
㋯白雲端和尚。楊岐に嗣く、茶陵郁山主に依りて剃度す。
㋰楊次公。天衣懷に嗣ぐ、楊傑居士字は次公無爲と號す。諸名宿に歷參す、晚に天衣義懷禪師に從つて遊ぶ、泰山に奉嗣す、雞一鳴、日の盤渤するが如きを觀て、忽ち大悟すと云ふ。
㋱偈。曹洞の五位に據りて。
㋲丹山鷄凰。色なり、正に屬す、山海經に曰く、「丹穴の山に鳥あり、其の狀鶴の如し、五彩にして文あり、名づけて鳳と曰ふ。」阿閣は樓の重屋なり、三階など王宮など類、君位なり、珠云く、「偏中正、了に分明の位。」正位なり、是れ五位修行なのべたるものなり、柳も花も我が面目と修行し得たところみな元の正位になつた又正中偏、無佛無衆生。
㋳秘殿簫韶。珠云く、「秘殿簫韶は正中來、偏中正、微妙の曲を調べて一切衆生を皆引入る。」奏ニ九成一は衆中至、九成の事は寶林錄除夜に見ゆ。秘殿も王宮、簫韶は舜樂、共に君位なり。奏ニ九成一は臣位なり。
㋴野老不知。黃屋は天子にたとへるなり。黃屋は車蓋なり、天子の車は黃を以て蓋裏と爲す。珠云く、「衆中到、無功用。」不レ知は「すでのごとくでのと。」大平無爲、堯民の擊壤の如し、これ衆帶なり。

㋵六街猶聽。六街九陌、九市以て九品の人を致す。靜鞭は蓋し天子の前驅、警蹕の者の執る所以で、其の喧囂か靜むるの鞭なり。珠云く、「丹山じやげで、秘殿じやげで、悟つたがよいげで。」已上は理事無礙の故に、蓋し洞上の大旨、細か會して大に歸するが故なり。六街は御所のうちなり。
㋶乃云。白雲。
㋷他是過量人。楊次公が識量、大いに人に過ぐるか嘆するなり。
㋸古人心髓。古人に洞山を指す此の語正燈錄等には載せず。珠云く、「心髓は內證秘訣。」
㋹季運。澆季末運。
㋺寢衰。浸か衰に作る、子鶴の切、漸なり。
㋻金剛般若。珠云く、「初中後善の三句。」
㋼證五位君臣。珠云く、「五位か設くるゝ本意にあらず、しかし末世をあはれむが故に。」この五位君臣を安立するの事はこの叢書第二卷の林間錄の上の三十七頁に出づ、參照すべし。又人天眼目にも出づ、ともに參照すべし。
㋽立三種滲漏。一には見滲漏、（二字とももりもる、異義なし。）謂く柳位を離れずんば、毒海に墮在す、二には情滲漏、謂く、智常に向背して、見處偏枯なり、三には語滲漏、謂く妙宗か失す、機緣始に昧しと、大天眼目に詳なり、滲漏は報恩にも見ゆ。三種と云ふは差別の法門。
㋾如大爐鞴。この語も瑞岩錄にも見ゆ。鍛冶屋の火ふいごたゝらなり。
㌀烹煅末學。上はにる、湯にする、下は火に入れ、ねりきた

ふるなり。

ノ本來契券。珠云く、「本來の面目、本地の風光、威音王元祖よりのわりふ、券なり、わりふ、契書なり。」人人父母未生已前よりあり來るうり券なり。

オ祖父田園。珠云く、「先祖代代の什物なり。」

ク肇東擊西。橫竪竪說の謂、珠云く「右往左往。」此の語は大惠禪師の普說第四、行齊德舜請等にあり、薄有所議は處處に痛く以て議破すと、これは虛堂和尙は引き來りて說く。

ケ薄有所議。前にいふ出處を轉じていふなり、薄は迫なり、珠云く、「めつたやたら評判した、其れ故公嚴天と云ふ、」又云く、薄は「ほど」「こゝに」で。猶ほ少のごとし、議は「はかる」で、僉議しおかれたことじや、五位君臣などをさたせらるるなり。

コ正知見。珠云く、「眞正の悟り。」

サ矮子。珠云く、「一寸ぼふし。」欽山逢云く、「矮子の戲を看る、人に隨つて上下す、」寶林錄除夜に見ゆ、今時學者、正慧なくして徒らに火惠の言に隨つて五位の安排を議破す、實に矮子の戲を看るが如し、溪云く、「其れ正知見なくして議すべからざること知るべし。」矮子は疎山をさす。

シ可以輕輩。珠云く、「三玄三要は知ら子とも、古人の語を以て、いと易く議すべからず。臨濟錄并に僧寶傳の鷹鳳章、人天眼目等に見ゆ。珠云く、「雲門宗と相撲をとつならば、おつこころばしさうな、黃密な則じや。」

ス四料揀。奪人不奪境等なり、臨濟錄并に人天眼目に見ゆ。忠曰く、「南院顒、風穴沼に問ふ、汝道へ、四料揀とは何の法をか料揀すると穴曰く、凡を語、凡情に滯らざれば即ち聖解に墮す、學者の大病、先聖之を哀んで爲に方便を施し、機の機を出すが如し。料簡の目は南院に出づ」と。揀は又簡に作る。

セ四賓主。客看主等これも前に同じく錄に出づ。

ソ四照用。先照後用、先用後照、照用同時、照用不同時、これは人天眼目に出づ。

タ十智同眞。汾陽無德禪師錄上に出づ、同一質、同大事、總同參、同眞智、同獨善、同具足、同得失、同生殺、同奇吼、同得人等なり、人天眼目に出づ。

チ浮山九帶。興聖錄に出づ、前に見ゆ。

ツ黃龍三關。この語は本叢書の一卷雲臥紀談の中の五頁に出づ、參照すべし。已上みな臨濟下の宗唱なり。

テ國家兵器。六韜の兵道に「聖王兵を號して國器と爲す、已むことを得ずして之を用ふ、」「兵は不詳の器、天道之を惠む、已むことを得ずして之を用ふるも、是れ天道なて云く、「三句の因緣、我れ會得し了れり也。」先づ ト拇指を倒して云く、「者箇は是れ第一句。」又 ナ一指を倒して云く、「者箇是れ第二句。」遂に佛果に ニ一擱を與へて云く、「者箇は是れ第二句」といつて、 ヌ大笑して趨り去る。佛果、五祖に擧似す、祖云く、「ネ也た好し、蠢。」ノ絃を動すれば曲を別ち、葉落ちて秋を知る。

ハ無爲子、既に白雲の爲に知ら所るゝ、ヒ一偈を作つて之に寄す。「十載聞名楊次公、フ有文堪振我宗風、ヘ分三數六添些子」、ホ直得金烏半夜紅。」次公、此に因つて マ舒郡に至つて、端和尙を訪ふ。夜話の間に、悉く ミ此の老の所詣を知れり。來日上堂、乃ち云く、「ム自古自今、メ理と說き モ事と說くもの、ヤ麻竹稻葦の如し。禪を會するもの更に ユ比比然たり。

り」の三喝に見ゆ。

ヲ初無實義。言は皆これ已むことを得ずして權に化城を立つ楞嚴三に云く、「但だ言說のみあり、都べて實義なし。」已上は曹洞の宗旨由あることを述ぶ、則ち議すべからざることを示す。珠云く、「全くこれがなくて叶はぬと云ふことではない。」

ワ分化。蓋し分衛化度の義。珠云く、「托鉢なり、衆に分施して道業を修す、十方を化度するなり。」

カ鑿實引脫。師の判語。珠云く「引き込んでおいて、手をとらまへて、どうつく。」

ヨ他。佛眼を指す。

タ倒拇指。おやゆびをかつてなり。

レ一指。第二指なり。

ソ一擱。うつ手にてうつなり。

ツ大笑趨去。これはあまり十成とはいはぬ。」

ネ也好蠢。珠云く、「まだそれ位ならばよいじや。」蠢はそれでこそよけれとなり。」

ナ動絃別曲。此の語を著くるは佛眼の頓機靈利なるを明す、語は禪山錄に見ゆ。虛堂の評なり、珠云く、「圓悟がちまろり絃を動すれば、佛眼は直に曲を別ちて見て取つた。」已上は三玄要に次いで古德の相切磋することを示す。

ラ無爲子。楊次公號は無爲子。

ム作一偈寄之。白雲端和尙。

ウ有文我宗風。珠云く、「文とは透關の機、看經の眼、宗風とは單傳、心印の文は文才じやが、天下國家を守護するのみならずじや。」

ヰ分三成六。分レ三則成レ六と、これ直正の成壞、如實の行履を曉す、此の外些子の奇特を添ふ。珠云く、「三を二つに分

㋕一箇家裡の人を討ぬるに㋖天上に月を揀ぶが如し。黄梅の㋗賢宰楊次公、名を聞くこと十載有餘、夜來忽ち訪及せらるゝことを蒙る。元來却つてこれ箇の㋘本分家裏の人なり、㋙杓柄の短長、鍋子の大小、未だ一一に㋚點過せずと雖も、㋛他の數目を看るに、也た甚だ分明なり。謂つべし。㋜如在東溪一日、㋝花開葉落時、㋞幾擬將黄金、鑄作鍾子期。

㋟切切地に説くこと一上、㋠了ずることを得ること能はず。㋡信之通人分上、水乳相投ずることを。在今の天下、那箇か是れ本分家裏の人、全く無しとは道はず、㋢只だこれ正人得難し。

㋣木庵永和尚、㋤鼓山に住す。道江浙に行はれて、衲子奔趨す、以て㋥松源・㋦秀巖・㋧息庵・㋨無用の諸大老、㋩皆聞に入ることを致す。㋪其の作略を觀るに、㋫自ら謂へり㋬石門の門入るべしと、一日㋭鼓を鳴して開室、㋮峻機妙用、㋯獨脱無依なり。㋰皆衽を斂め目を側めて、敢て湊泊することなし。㋱一兩夏を得て、㋲各自に散じ去る。㋳看來れば此の老、只だ能く人を死し得て、人を活し得ることを能はず、㋴唯だ秀巖尚ほ少しく之に留れり。㋵嘉定の間、㋶山僧育王の西塔に在りしとき、㋷之の老子の、鼓山の時の事を説くを見るに、手を以て㋸木菴の眞を點じて云く、我れ者の老和尚に㋹孤負せり」と、㋺又佛照の眞を點じて云く、「我れ者の老漢に、㋻話頭を轉じ了らる」といつて、㋼感じて又泣き又笑ふ、㋽悲喜交攻む。㋾胸中必ず事あらん。㋿平日の提唱、多くは是れ諷歌なり

つと二三が六となる、次公きもにひやりとさて〳〵とこたへる、手なみをみせるきじやゝ我が宗向上の些子をわけてやらうと思ふ。」

㋕直得金鳥。是れ奇特の處なり所謂大悟の端的なり、次公泰山に於て半夜に日の出の湧くが如くなるか觀る。忽ち大悟す、故に爾か云ふ。珠云く、「朝日のかゞやくことはめづらしからぬ。或抄に云く、「これをそへてあるぞ、次公が悟處底を云ふ、直得は日本語の「なんのことはない、それこそなり。」

㋖舒鄧。安慶府を舒鄧又舒州と名づく、同處に白雲山あり。

㋗此老所説。白雲が此の老とは楊次公の遊説するところをばなり

㋘自古自今。忠曰く、「自古自今」は古へより今よりと、此の如く點ずべし。言ふは古へより今に到るまで、今より後に到るなり、舊點は宜しからず。

㋙理。空なり、理論なり。

㋚事。假なり、實際なり。

㋛麻竹稻蓼。その數知るべからず。

㋜比比然。比は質の讃。「ひつ」なり總々のごとし、衆多を云ふ、しきりにの意なり。

㋝一箇家裡人。珠云く、「眞實、尚上宗乘を手に入れたる。」

㋞天上揀月。倫なきの喩へなり

㋟賢宰。大守なり。

㋠本分家裏人。珠云く、「吾が宗門中、本分の大事を知る底の人。」

㋡杓柄知長。他の屋裡の家具子以て、平生受用の伴伴を表す珠云く、「家來と云ふから、以て來た文字、子細に穿鑿はせねども、差別請此の因緣をば」

㋢點過。珠云く、「吟味はせねども。」

㋣他數目。數條の綱目を看る。珠云く、「家具子の數目最の目錄なり、今は置洞宗旨を頌するの一偈を謂ふなり。

㋤如在東溪日。この四句は潭月集二に出づ、潭月大師の古風盤言二十首の内、乾坤有二清氣一、散入二詩人脾一、聖賢遺二清風一、不レ在二惡水枝一、千人萬人中、一人兩人知、憶正二東溪一日、花開落葉時、幾擬下以二黄金一鑄作中鍾子期上今は憶ば如に作り、落葉を葉落に作り、以は將に作る、珠云く、「知音はほしいものじや。」

㋥花開葉落時。春秋を舉して總べて儘す。珠云く、「四時相憶ふなり。」

㋦幾擬將黄金。珠云く、「鍾子期は楊次公に喩ふ、眞實の知音は黄金で、いつまでものこし置きたい。」今でならば銅像にでもこしらへていつまでも芳名をのこしたいとなり、鍾子期の事は報恩錄に見ゆ。今は之を引いて久年曾て次公を思慕するの懷を述べて、以て結束す。

㋧切々地。俗語の「うだ〳〵」なり切々は愛勞なり、珠云く、「切切ば多言の義、白雲端和尚が切々に説かれても〳〵。」已下は虚堂の語にして白雲に係る

㋨不能得了。此の如くなれば則ち了期を得ること能はずとなり。珠云く、「知音どうしの出合ひなれば、はなしをすればもはなしがしかふせられぬ。」

㋩同之通人。白雲と次公と機鋒投合することを評す。珠云く「之を信ずるにと言ふは、白雲楊傑の事緣を見るに、之を信ずること下文の如し。通方達人の分上なればじや。」已下は虚堂の判語。

(ヲ)五祖和尚の會中にも、亦一僧あり、之を(ワ)覺上座と謂ふ。祖一日、室中にして擧す、「釋迦彌勒はこれ他の奴、他は是れ阿誰ぞ。」他轉語を下して道ふ、(カ)烏張三、黑李四、(ヨ)五祖之を然りとす。圜悟、侍司に在つて道く、「和尚更に他を勘して看よ、恐らくは未だ實ならず。」明日再び鼓を鳴して入室、祖復た前話を擧して問ふ、(タ)僧云く、「(レ)昨日和尚に道與し了れり也。」祖云く、「甚麼と道つし。」僧口を開かんと擬す、祖に(ソ)闌胸に一拳して、不是と云はれて、其の僧當下に省あり、後來五祖の門庭の(ツ)冷落するを見て、却つて(ネ)長盧の夫鐵脚の會裏に歸す。後出世して和州城外の開聖に住す。(ナ)夫老の爲に拈出す。拈香の日、忽ち胸中(ラ)一點痛し、便に痛處に就いて、(ム)疽を發して(ウ)殂す。嗣香、

(ヤ)是止人難得。已上は白雲次公和尚底を述して、箇中の人を得難きことを嘆す。

(マ)水庵永。圜菴需に嗣ぐ、大惠三世、福州鼓山に住す。珠云く、「これより已下は師承正しからざるものを擧げて、後學を誡め、此の事を擧ぐることをなす、故に上に正人難得の語を下す。」

(ケ)鼓山。「くさん」とよむべし、「こさん」はあしし。

(フ)松源。名は崇岳、密菴傑に嗣ぐ。

(コ)秀巖。名は師瑞、拙菴光に嗣ぐ大惠三世。

(エ)息菴。名は達觀、水菴一に嗣ぐ、一は遯菴裕に、裕は圜悟に嗣ぐ。

(テ)無用。名は淨全、大慧に嗣ぐ。

(ア)入圓。珠云く、「木菴永の處へ來り、入室參禪。」

(サ)觀其作略。珠云く、「其の初相見の時の作略を、この虚堂がみるに。」

(キ)自謂。諸大老たちが。

(ユ)石門之門可入。珠云く、「石門は鼓山にあり、入室しやすしと思ふた。」人々が勘破せんと思ふに、門を跨げずして透過するありや。

(メ)鳴鼓開室。法を開說するには法鼓を鳴して。

(ミ)峻機妙用。珠云く、「鳥は黑く鷺は白しとの無事禪でない、逆風張帆のありさま、其の迹を留めず。」

(シ)獨脫無依。珠云く、「釋迦の法にも達磨の法にもよらぬ。」

(ヱ)斂衽側目。衽は衣衿なり、これは近前することが得ざるの貌を云ふ。

(ヒ)得一兩夏。珠云く、「虚空を翔る大鵰の如くなれば、取り付くことはできぬ。」

(モ)各自散去。珠云く、「木菴の胸

自る所に原かず、驗を顯はすこと(ヰ)此の如し。在今天下(ノ)風を望んで承嗣するもの、麻粟の如し、(オ)若し一一疽を患へて殂せば、(ク)何れの時か是れ了せん。且く(ヤ)其の間因果を識り、來自を知る。(マ)又作麼生。茲に(ケ)堂頭の(フ)衆を擧げて、山野をして(コ)牌を受けて、兄弟の與に擧話せしむ。此れ叢林(エ)任重の責なり。既に敢て(テ)寧居せじ、恐らくは且夕必ず(ア)諸公の爲に、(サ)室を開いて相見せんことを。古來(キ)籌室(ユ)鍛鍊を以て(メ)重しと爲す。(ミ)近世師法嚴ならず、衲子(シ)殊に意に經ず、(ヱ)法門澹泊なること、一へに(ヒ)此に致る。慈明汾陽に見ゆること二年、入室を容さず、一日情切なり、香を懷にして方丈に詣りて咨懇す、「某甲生死大事、未だ明めざるが爲に、(モ)軍旅を冒し

臆うかゞひにくいゆゑ、鼓山なばめい〳〵に退く。」

(セ)看來此老。珠云く、「この虚堂の眼からは木庵老人を淵にどぶんと沈ませるが、其の上を穿鑿し得ば。」

(ス)唯秀巖瑞。和尚のこの樣は、本叢書の第一輯一卷枯崖漫錄中の四三頁に出づ、參照すべし。

(イ)嘉定間。北宋の寧宗の年號、虚堂の二十二三歲より三十歲許のころなり。

(ロ)山僧育王。山僧は虚堂なり、秀岩育王に住するとき。

(ハ)之老子。珠云く、「秀岩が木菴の鼓山に住するの時の事を、ぐど〳〵獨り言いふ。」

(ニ)點木菴眞。木菴の寫眞肖像を指點して。

(ホ)孤負。珠云く、「そむくはずではなかつたが。」

(ヘ)擧了話頭。珠云く、「木菴下で所證底をぶちかへられた。那箇の話頭をば。」

(ト)佛照。拙菴光、大慧に嗣ぐ、佛照禪師と賜ふ。

(チ)感而又泣。珠云く、「木菴の恩義を感じてなり」と。

(リ)悲喜交攻。珠云く、なきつわらひつ、狂氣。」

(ヌ)胸中必有事。珠云く、「虚堂の思ふに、秀岩の胸の中、必ず不平の事あらん。」或抄に、「畢竟木菴の慈恩を捨てゝ、佛照の法嗣となるは、勢に就くの故なり、依レ之如レ此狂亂す。」

(ル)平日提唱。蓋し秀岩初め木菴の法印并に頂相等を得て、後に佛照に嗣ぐ、故に云ふ、者の老和尚に孤負すと、又平日の提唱多くはこれ謳歌なり、皆嗣香自る所に原づかず、發狂すること此の如し。已上は木菴の峻機、且つ秀岩の事を評す。珠云く、「平日の提唱は偈頌法語等、謳歌は市中のは

やりうた、たわいもない笑ひ草、取り上げどころがない。」

㋖五祖和尚。五祖の演和尚の會中、修行者のあつまりの中にも、師承は大切なるものなるに同じやうなることもあるものじや。

㋗疊上座。長蘆宗頤惠覺大の法嗣。

㋘烏張三黑。烏といひ黑と曰ふ、みな無分別の義、是れ佛見法見に涉らざる底を指出す。珠云く、「云ひ樣に依つて出身の一路あり、誰れ々々と呼ぶに苦へて、由彦のそれこそそれよ、それは其の誰れ。」張三李四は諸錄に出づるといへども未だ本據を見ず、蓋し唐には張氏李氏多きが故に、爾が云ふ乎、三郎四郎、又叛公李公といふが如しどちらがどつちともわからぬなり

㋙五祖然之。珠云く、「五祖てさへ見そこなふた。」

㋚僧云く。疊上座なり。

㋛昨日和尚。珠云く、「此れからがはけがあらはれた。」

㋜圓胸。むねをひつかまれて、關ばつ

㋝冷落。珠云く、「枯淡さびしくなつたな見て、繁昌な長蘆の夫耀師の會中にまはつた。」

㋞長蘆。應天廣照禪師は天衣懷禪師に嗣ぐ、師始め一耶に至る、嬉女あり、母の爲に逼られ、其の房に入りて去らず、師跏趺して且に逮す、叢林、夫識闍と謂く。

㋟蹇夫老拈。拈出す。

㋠一點。ひとかたまり。

㋡疋。七條の切、籠なり。

㋢如此。賞翻此の如し。

㋣梁風承嗣。盛烈德風の時に盛なるものを望んで、自る所に原かずとなり。

㋤若一一悉瘡。珠云く、「そんなやつばらは、みんなかさかやんで死なうなら。」

㋥何時是了。珠云く、「みなさうなくてはかなはぬことじや。」

㋦其間。珠云く、「志あるものは心得てなるものもあるが。」

㋧又如麼生。此の如き底、能く許多あるとなり。巳上は嗣香原かざるの驗か舉ぐ。忠曰く、「因果が識り來山の所自が知るものあり麼と請責するなり。」

㋨堂頭。東谷和尚。

㋩舉衆。珠云く、「明眼の宗匠も、多き内に此の方の如きを選び舉げて。」

㋪受牌。珠云く、「善說の牌を受け舉りて之を掛く。」

㋫任重。おもやく、やくめ重し。

㋬寮居。或抄に、「心が放つてきまに暮しはせぬとなり。」

㋭爲語公開堂。珠云く、「虛堂をつばのいて醫公と同じぐしたいとおもふ。」

㋮則室相見。入室の牌を掛けて、且夕相見すべし。

て席下に至ること今再夏なり矣、未だ某をして衆と與に入室せしむることを蒙らず、㋯恐らくは出家の本志を失せん。望むらくは和尚慈悲。」汾陽、主丈を拈じて便ち打して云く、「儞是れ何れの㋰惡知識よりか來りて、我れを㋱禪販せんとす。」慈明㋲聲を方げて㋳悔謝す、汾陽手を以て㋴慈明の口を掩ふ、明忽然として大悟す。㋵者箇正に㋶大將軍の陣に臨むが如し、當鋒に一刀兩段して、便ち勝負を見る、纔かに㋷擬議するときは則ち㋸利を失す。

適來舉ぐる所の踈山、潙山に見え、又香嚴を勸辨するが如きんば、㋹一知㋺一見、㋻一機㋼一境、能く妙理を窺測する所なるべけん耶。儞若し㋽宿に靈骨あつて、曾て㋾般若の種子を下し蒲團上に㋿一絲一線を挨得透して、言外に向つ

ちをしい。」

㋯恐。珠云く、「あさましい、くの異名なり。

㋰惡知識。ぐわんにんめ。

㋱禪販我。禪は當に禪に作るべし、旁卦の切、細なり、言ろは自己の家珍を運出せず、却つて　陽の語を奪つて世間を商略せんと欲するなり。珠云く、「おれが處で、やす買ひして高うりしようとは。」或抄に「うりものにするとなり。」

㋲方聲。方は大なり、珠云く、「まかほになつて、きり口上。」

㋳悔謝。大信貴。

㋴掩慈明口。或抄に、「これを當聲擊石火、閃電光の如し」と。

㋵者箇。汾陽底なり。

㋶大將軍臨陣。珠云く、「關將軍が青龍刀を提げて、顏陵文周が首を取つたような、汾陽と云ふものは、すさまじいものじや。」

㋷擬議。「擬議も差排もなるものか」と珠はいへり。

㋸醫室。大勢人を度する、方丈の異名なり。

㋹鍛鍊。千鍛百鍊なり。

㋺爲重。任重なり。

㋻近世師法。珠云く、「巳下醫策の語、師家の法令。」

㋼殊不經意。此の事を以て念と爲すなり。珠云く、「衲子も骨なからわ。」

㋽法門澹泊。澹泊は恬靜無爲なり。今は法門の寂寞を謂ふ。

㋾一致於此。致は「きはまる」なり、已上は此の重任を受けて、今時師學衰替を嘆ず。

㋿冒軍旅而。軍は二千五百人、冒は「まぶれて」旅は五百人、冒は「まぶれて」なり、軍中にまぶれてなり、この時亂世に當つて、師兵難を凌いで行脚す、傳の中に見ゆ、この慈明汾陽に見ゆるの因緣は、師學そろふて承嗣のよきか舉示し玉ふなり。

て ㋕一遠に遠得して手に入れば、惟だ踈山を見得し、香嚴を勘辨するのみに非ず、亦便ち汾陽慈明師資の ㋖道合することを知らん。其れ如し然らずんば、更に多く幾雙の草鞋を買つて、四天下を繞つて、㋗走踏して ㋘脚板をして闊からしめて、我れはこれ行脚の僧と道つて、人に逢ふて禪を說き道を說いて、㋙口彷車の如くなるも、㋚一朝 ㋛老鼠の牛角に入つて、㋜路頭既に極つて、㋝憑り藉る所なきが如くなら敎むること莫れ。則ち四大五蘊分離して、千辛萬苦の狀言はずして知んぬべく矣。古德道く、㋞「前路茫茫として、㋟未だ何くに往かんことを知らず」と、驀然として箇の ㋠生死を顧みざる底の漢あつて、出て來つて ㋡衆の爲に力を竭さば、山僧道はん、儞且く住みね、我が ㋢掛牌の時を待つて、㋣却來して商量せよと。㋤久立珍量。

㋕失利。珠云く、「此の世のいとまごひ。」巳上は古時の師法般に、學者後なることを舉して以て今時を激す。
㋖一知。珠云く、「一知解。」
㋗一見。珠云く、「一見解。」
㋘一機。珠云く、「楊眉瞬目。」
㋙一境。珠云く、「拈椎竪拂。」
㋚宿。珠云く、「前生より。」
㋛般若種子。前生より堅固菩提の大願力あつて、般若の種子を藏む、阿賴耶識に於て今世現行する底なり。
㋜一絲一線。工夫の前に一絲線豈子の通路を得るなり、珠云く、「勇猛の一氣でなければ、此の少しのひつかゝりがこぎぬけられぬ。」豈子の絲すげで少しひつかゝつてゐるそれをすつかりおしひらいてなり、挨得は椎圓の意なり、忠曰く「豈子の明處を開き得るなり」
㋝一遠々得。遠は當に趯に作るべし、敎敎の切、超なり、遠は遠なり、頓悟超脫の謂なり、珠云く、「一超直入、一足に飛び越えて。」
㋞合。割符なり。
㋟走踏。珠云く、「三度飛脚、見るやうに、くそぶくろをひろがらせて。」
㋠脚板。足下の坦平なる處、あしのひら。
㋡紡車。紡績車の轉轉止むことなきに喩ふ。珠云く、「絲か卷く車の如く、辨舌とゞこほりなく。」
㋢一朝。臘月三十日、せんじつめられて。
㋣老鼠入牛角。伎倆衰盡、生死到來の時に喩ふ、此の事は顯孝錄に見ゆ。
㋤路頭既極。珠云く、「一生涯路頭、此に於て既き盡くる。」
㋥憑藉。たのみよる。
㋦前路。此の婆婆を暇乞ひして

からば。

㋧掛牌。珠曰く、「此方から用意して內室の牌か掛けたとき。」
㋨却來商量。來日に付在して、謂つべし月に和して珊瑚か賣ると。

㋩未知何往。此の兩句は潙山の警策の文なり。同註に曰く、「妄宰の幻身、曷ぞ眞歸を悟らん」と。巳上は上の數段を回照して、悟を以て急とすべきことを示す。
㋪不顧生死。珠云く、「生死を透脫したる底。」
㋫爲衆竭力。伎倆を用ひ盡して我れと抵捂せんことを要すとなり。會中の衆に代つて、思ふ存分力を竭さばと、商量せんとならば。

立僧納牌の普説

㋙一句子あり、古佛説不到、㋚玉轉じ珠回る。㋛一句子あり、㋜老胡不將來、㋝溝に塡ち壑に塞る。説不到、不將來、㋞笑つて指す、文殊の五臺に在ることを。便ち㋟與麽に去るも、已に諸人の㋠窠臼裏に落つ。所以に古德人をして參禪せしむ。先づ㋡涅槃堂裏の禪に㋢參取せんことを要す。其の間㋣佛心宗を傳へ、佛の慧命を續ぐことは、㋤且く之を一邊に置く。何が故ぞ蓋し涅槃は乃ち㋥死生の切要の地なればなり。㋦眼光落ちんと欲して未だ落ちず、火風散ぜんと欲して未だ散ぜず、㋧刀の肉を割くが如く、箭の心を攢すに似たり。㋨那時㋩萬が一を用ふ

㋛久立珍重。此の一節は格外の那漢を拈出して、以て結座す。

㋜納牌。首座位を退く時掛くる所の入室普説の牌を以て方丈に納るるなり、特に普説して以て謝す、此の文の末に見ゆ。

㋙一句字。珠云く、「好箇の一句子とは何の事じや、久遠劫已前久遠却以後までも、分明なる一句子じや、これは目のさき鼻のさき、あんまり近くて佛でも見付げえない。」

㋚玉轉珠回。八面玲瓏にして、環の端なきが如し。珠云く、「古佛説不到、どうなり人々不足ばない。」

㋛一句子。珠云く、「人人具足じやものを、達磨でももち來ることはならぬ。」

㋜老胡。達磨を云ふ。

㋝塡溝塞壑。周遍法界、皆本分の事を表示す。珠云く、「もてきてくれた悟りではないぞよ塡レ溝塞レ壑。」

㋞笑指文殊。恁麽の時節、溝に塡ち壑に塞る、滿目の文殊、甚の五臺山に在つて垂化とか説かんと、事は頌古に見ゆ、珠云く、「五臺山に文殊降臨し玉ふと云ふ、をかしいはやいうちやつてしまへ。」或抄に、「説法とはをかしいと文殊を笑ふなり。」

㋟與麽去。珠云く、「與麽とは説不到を認むる底、五臺文殊を笑ふ底を指す。」

ることを得んと要するに、不覺不知にして、他に驢胎馬腹の裏に㋩移し入れ、㋥卒に出づることを得難し。

㋭出家兒、尤も㋬宜しく鞭を著くべし。㋮袈裟下に人身を失すれば、萬劫にも復らず。毎日㋯只管に他人の㋰閑事を理會することを要せざれ㋱儞か自己分上、㋲無量劫來、㋳洪波大浪の如く、㋴未だ嘗て休息せず。一日十二箇の時辰、阿那箇の一時か、㋵走作し來ること無き。一粥一飯、㋶走作することなし麼、㋷開單展鉢走作することなし麼。進退揖讓走作することなし麼語言談論走作することなし麼。㋸驀然として箇の困を打し來れば、便乃ち㋹陰界の中に落在して、㋺頭出頭沒す。㋻儞か醒むる時、㋼一段孤明歷歷底、㋽阿誰か主と作る。既に人の主と作

㋾寮臼裏。便ち前面の如く說き將ち去るも、已に諸人腹裏の寮臼に落ちて、未だ實參實悟底の消息と稱せず。已上は先づ本分の大段を標す。珠云く「寮臼とは知解分別、悟りの穴。」

㋿涅槃堂裏。生死切要の譚。凡そ叢林には延壽堂、涅槃堂あり、延壽は病僧に、涅槃は亡僧に備ふ、今指示するところは下に見ゆ。珠云く「命根斷の修行、此の古德は五祖演乎」東嶽和尚曰く「常に數息觀、無性法忍、圓通三昧を修するを是れ便ち涅槃堂裏の譚を參取するなり。」

㌀要參取。珠云く「諸方死して活せざらんことを恐る、我が者裏は活して死せざらんことを恐る。」

㌁傳佛心宗。傳燈錄の達磨の章に「佛心宗を明らめ、行解相應、之を名づけて祖と曰ふ。」珠云く「差別智了了分明ならねば、佛心惠命をつぐことはならねども、それは且くおく」

㌂且置之一邊。此の如き向上の事は、捲ひいて一邊に置いて顧みず、無常迅速、生死事大之を以て急務と爲るが故なり

㌃死生切要。涅槃堂を謂ふ。珠云く「時々刻々、何時の計られねば、死生の急切肝要のところなれば」と。

㌄光眼欲落。この語は本叢書の二卷林間錄下の一一八頁にある、楞嚴經を引くの意を參照すべし。火風を鼎げて地水を惣ぶ、共に半死半生の時なり。

㌅如刀割肉。鐵ば通じて攢に作る、穿つ所以なり、正法念經に云く「命終の時、刀風皆動く、千尖刀の其の身上を刺すが如く、十六分の中猶ほ一に及ばず、若し善業あるときは

則ち多く苦惱せず。」永明の垂誡に萬箇心を鐵す。」と

㋐那時。その時なり。

㋑要得用萬一。平昔修學する底、幾多の道理知解、珠云く「從來の智惠分別、聰明藝能も一つも用はない。平生の工夫底はみな〳〵。」

㋒移入。不覺不知は即ち畜生の報なればなり、珠云く「せうもこりもなく、本の六道の衆生となるべき乎。」

㋓卒難得出。已上は廣く生死の念、急切たることを示す。

㋔出家兒。珠云く「已下親しく平生の用心を示す。」

㋕宜著鞭。珠云く「尤もと、とりわけ、しつかり性にしまねばならぬ」

㋖袈裟下人身。出家兒故に袈裟下と曰ふ、梵網戒の序に「一たび人身を失すれば萬劫にも復らず、壯色停らざること猶ほ奔馬の如し、人の命の無常なること山水よりも過ぎたり、今日存すと雖も、明けなんまでも亦保ちがたし」と、珠云くそこばくの信施を受くる故に、袈裟かけながら、人身を失ふたならば、とりかへしがならぬ。」

㋗只管。珠云く「やれ參禪するの何のかのと智解する。」

㋘閑事。珠云く「是非善惡。」

㋙儞自己分上。珠云く「自己を骨を折つてぬけ。」

㋚無量劫來。生々世々。

㋛如洪波大浪。珠云く「是非彼我の念慮。」

㋜未嘗休息。念々起滅、停らざること猶ほ奔馬の如しとなり、珠云く「佛法の淵源を盡るぬうちは、休息はならぬ。」

㋝無走作來。珠云く「走作は意識境に隨つて奔走造作じや、寂靜無爲に居る。」

㋞無走作麼。口は粥を喫し飯を喫すと雖も、念ば便ち亂走亂作す、下面の走作みな之に効ふ。

㋟開單展鉢。忠曰く「單と名づくるもの種々あり、今鉢單なり、食時に開展す、之に作法あり。」

㋠驀然打箇困。困睡を打するなり、珠云く「ひよいとねむるやいなや。」

㋡陰界中。五陰十八界妄想の中。珠云く「陰は時界中なり、安眠高臥することはならぬ、一日の內見たり聞いたり、思慮分別、謂へば夢境に入るなり。」

㋢頭出頭沒。珠云く「念々流轉水に溺るゝものに比す。」

㋣儞醒時。珠曰く「日の醒めたるときじや、上を轉じて警策す、言ふ意は汝夢中に主と作らず、且く置く書日醒むるとき、亦主と作り得す。」

㋤一段孤明。淨明の覺地を表す、語は臨濟錄に出づ、珠云く「見聞覺知の主なる底はたれじや。」

㋥阿誰作主。惣麼の時、たれか主人と作つて、他の境惑を受けざるか」

㋦陽魂未飛。陽魂陰魄の略なり。

㋧早成隔生。既に主人公なければ、

るなくんば、火風未だ散せず、㋙陽魄未だ飛ばざるに、㋚早く隔生の人と成らん也。大難大難㋛棒、石人の頭を打つて、㋜剝剝に實事を論せよ。

㋝節物速かに化して、法道寂く微なり。㋞此の段に志あつて、㋟切なるものは、㋠師を尋ね友を擇んで、㋡頭然を救ふが如くせよ。終に㋢身衣口食の爲にし、㋣山を覩水を翫んで、悠悠として日を送らざれ。儻若し眞箇信得及せば㋤莫敎あれ、㋥一日に儞に㋦百千の法門、無量の妙義を㋧捱得透し畢らるゝことを矣。便ち能く一切の法を㋨成就し、一切の法を㋩破壞して㋪三界二十五有を㋫出でて、一切㋬有無の障礙を通せん、春花秋葉、雲騰り鳥飛ぶも、㋭皆吾が藏中なり、一事として、㋮眞如に契はずといふことなく、㋯一法として正理に順せずといふことなし。㋰自ら是れ明暗相凌いで、無依獨脫の地に到ることを得ること能はずんは、乃ち㋱新學久參あつて叢林の正氣をして、日に消し、佛祖の慧命を、㋲懇かに絕えしむることを致すあらん。」

且つ新學比丘の如きんば、纔かに門に入り來るときは、先づ生死大事未だ明めざるを以て辭と爲す。㋳笠子を放下して、坐得すること一年半載、既に㋴工を用ふるに善からざるときは、則ち所入なし。便ち錯用心を起して、㋵無明の窠子裏に輥入して、文言義句を以て㋶日益の學を爲す、歲月既に往いて、㋷豪邁の氣日に高く、㋸味道の心日に遠し。殊に知らず、㋹得失心に在つて、㋺煎熬萬狀なることを。㋻臨濟、三年僧

即ち所謂大惠禪師の魂不散底の死人じや。珠云く、「有氣の死人。」

㋙棒打石人頭。珠云く、「石佛の頭をたゝけば、かつちり〳〵となる、如是あざむかず、精を出せ。」或抄に、「直下に石人の。」

㋜剝剝論實事。此の亟は大難容易にすべからず。剝剝は窮剝の切なるなり。珠云く、「剝剝は棒で石を打つ聲なり。已上は別して僧家を戒む。」或抄に云く、「はぎむきだして、信實のみになれとなり。」

㋝節物速化。時節品物、速に變化すとなり、珠云く、「已下四時の盛衰、無常迅速、光陰ふ惜むべきみ逃ぶ。」

㋞此段。珠云く、「此の一段の大事。」

㋟切有。珠師云く、「急切親切。」

㋠尋師擇友。珠師云く、「たゞではいかぬ。師か尋れ友をえらめ。」

㋡如救頭然。華嚴七十八に云く「此の長者子、勇猛精進、志願無雜、深心堅固、恒に退轉せず、勝れたる希望を具して頭然を救ふが如く、顧足あることなかれ」と。然の字は則ち是れ語の助なり、亦ある處には說く、然は火然を謂ふ、頭上の火の然ゆるを救ふが如し矣。禪錄用ひ來る、皆火然の義なり、珠云く、「勇猛の一氣でなければいけぬ。」

㋢身衣口食。臨濟の云ふが如く諸道流に勸む、衣食の爲にすること莫れと。珠云く、「次第次第に法道はよそごとになりて、身衣口食のためにするな」

㋣覩山翫水。永嘉の勸友人の書に苦口に見處なくして、山邊水邊を樂むものを戒む、悠悠はぶらり〳〵。」

㋤莫敎。珠云く、「さもあらばあれは、まかす、まゝにの義なり、こゝろやすい、自由にするなり。」

㋥一日。珠云く、「なほ或時と言ふがごとし、因緣到來の日なり。」

㋦捱得透。捱は延べ緩ぶなり、又推すなり、又排の字の義あり、こゝに當る、又晨と通ず晨は絲なり、きはめてとほりたなばじや。

㋧百千法門。水潦和尙の如きんば馬祖の一踏の下に於て大笑して曰く、「百千の法門、無量の妙義、今日一毛頭上に於て底を盡して根源を識得し去る」と。大慧の書及びこの錄の徑山後錄に見ゆ。

㋨成就。珠云く、「成就亦我れにあり。」

㋩破壞。珠云く、「破壞亦我れにあり、臨濟の云ふが如く、眞正に成壞し、翫弄神變す」と。

㋪出。珠云く、「かうしてゐながら、佛も伺ふことはならぬ。」

㋫三界二十五有。寶林錄に見ゆ

㋬有無障礙。二邊の障礙、無量の故に、一切と云ふ。煩惱有無所知。

㋭皆吾藏中。是の如く開會するときは、則ち無邊剎界、諸の色像皆吾が庫藏中の物なり、所謂三科（五蘊・十二處・十八界）、七大（地・水・火・風・空・見識）、皆如來藏とは是れなり、珠云く、「紫金光聚とも山河大地一法身とも云ふ、その中のことなり。」或抄に云く、「如來藏の物にして、他物にあらず」一事。珠云く、「舉手動足、喉唇掉臂、一事として。」

㋮眞如。法性なり。

㋯一法。珠云く、「邊邪皆中正、善隨の柔和善順、餓鬼のがつ〳〵、虎の皮のふんどしも、

堂を出でざるが如くならんことを要すとも、復た得ることなし也、㋚看よ他一且奮發して、羣を驚し衆を動じ、機に臨んで㋟通變することを、其の㋠影跡を尋ねんと擬するに、㋡了に不可得なり。㋢者箇の田地に到らんと要せば、急に須らく㋣從前の學解、明昧の兩岐を颺却して捱めて通身をして、㋤熱鐵圍子の如くならしめ、㋥死と隣をなして、㋦一箇の古人の話頭を拈じて、面前に㋧抛在して、㋨生寃家の如くにして㋩晝夜芒刺に坐する如くならば、自ら穿透底の時節あらん。切に㋪坐相に泥著することを得ざれ、㋫坐の時には須らく方便を要すべし。㋬裏面既に主宰なければ、徒爾として神を勞す。㋭古德道く、心空に境寂なれば、只だ久しく

㋚看他。臨濟なり。
㋛通變。珠云く、「脫洒自在、離塵師廣、またゝさするまもない。」
㋜影跡。臨濟の機用。
㋝了不可得。臨濟問話已後、大機大用、快活自在の去就、此の如し、本錄の序に所謂、妙應無方、陞迷なる留めざる者なり。
㋞者箇田地。珠云く、「臨濟臨機通變の處。」
㋟從前學解。學解の中必ず明通と昧礙と此の兩岐あべて颺却すべきなり、珠云く、「少しの學得見解、則ち得力明珠とは、差別無差別の境界なり、颺却はあげわけとなり。」
㋠熱鐵圍子。觸處灰滅す。
㋡與死爲隣。隣は賀きなり、大無心と純氣のものと隣近爲るべし。
㋢一箇古人。珠云く、「竹篦背觸、不入涅槃などの。」
㋣抛在。珠云く、「十二時中。」
㋤生寃家。心目之に在り、暫くも忘れず。
㋥如坐芒刺。ゆだんするなと云ふことの、のざ、うばらで、安處自意せざるなり、頌古の跋に見えたり。
㋦泥著坐相。南嶽讓云く、「若し坐禪か學せば、禪は坐臥に非す。」珠云く、「只だ話頭さへあれば、どこでも坐禪。」
㋧坐時須要方便。維摩の問疾品に云く、「菩薩は縛を起すべからず、何なか縛といふ、何みか解といふ、禪味に貪著する、是れ菩薩の縛、方便を以て生ずる、是れ菩薩の解」珠云く、「坐禪の時、睡眠妄想のなかやうにせよ。」「伊沈掉舉睡眠等のとき、精神を抖擻し經行し。」方は法、便は宜。
㋨裏面既主宰。禪に智方便の主宰なれば、則ち但だ是れ平定まつて以て其の寂を窮むるなし、故に云ふ徒爾精神を勞すと、珠云く、「むれのうちなり、(裏面)拈提公案、是れ主宰なり。」
㋭古德道。珠云く、「潙山靈祐禪師の警策に見ゆ。
㋮爲久滯不通。方便の主宰なく一向に沈空滯寂せば、則ち爭が佛道に通ずることを得ん。珠云く、「しつかのぼけものにばかさる。」
㋯活句。珠云く、「古人の纏透雜解の則を云ふ。」主ある體を云ふ。
㋰死句。珠云く、「少しでも手のつけられる則を云ふ。」
㋱殆句下薦得。心空する等は死句、故に今此の語を示す、珠云く、「薦得とは受け取り、合點し、呑み込めばなり。」この本叢書第二卷林間錄

いちりんもちがはぬ。」興教壽の投機の頌に所謂「撲帝非二他物一、縱橫不二是塵一、山河及大地、全露一法王身一」の意。
㋲自是明暗。事相隔礙して通ぜず、故に明暗互に侵凌して獨脫すること能はず。珠云く、「皆々骨折りがたらぬ故、惡は惡と立ち、善は善と互に相爭ふ。」「明暗は有無障礙を云ふ」と或抄に見ゆ。
㋳新學久參。珠云く、「大勢より合ふて居て。」
㋴語絡。學者の所謂、正純に非ざるによるが故に、弊み成すこと此の如し。此の一節は總べて新學久參の過咎を標す。
㋵笠子。行脚の具。
㋶不善用工。工夫を用ふること純ならざる故に、珠云く、「工は工夫の仕用がよくないと得力はない。」
㋷無明窠子。錯錯の心果して妄想に入る、根ばころばし入るるなり。
㋸日益之學。書寫讀誦の學、日日一紙半紙、一句半句を增益す、此の如き底は驗み見ることと多し、菩提の工夫は功を見ること少し、故に皆這の錯用心を起す。
㋹豪邁之氣。智增慢の故に、「珠云く、「豪は俊なり、英なり、智百人に過ぐる者を之を豪と云ふ、邁は過なり、老なり。」
㋺味道之心。慢心日日に增長する故に。
㋻得失在心。珠云く、「是非得失、これは道心遠くなるに隨つて。」
㋼前慘萬狀。道心遠きが故に、得失是非、心に在て相煎し相慘して、急切の苦を受くること千態萬狀なり、珠云く、「菩薩心の溝ひ氣なくなつて、地

㋔滯りて通せざることを爲す」と、參禪は須らく㋗活句に參ずべし。㋳死句に參ぜざれ。㋮死句下に薦得すれば、自救不了なり。此れは是れ新學比丘の㋘程限なり也。

㋫中間久參の宿將は、㋙發足超方すれども、亦㋓打頭に㋢惡辣の手段底の宗匠に遇はざることあれば、㋐見地に坐在す。㋚甘心して志を枯し形を忘じて、㋖之を鑽り之を仰ぎ、㋴之を淘り之を汰ると雖も、但だ㋱己見を裝重する而己にして、㋯鶻臭布衫を脫去すること能はず。㋛一旦時緣成稔して、出で來りて人の爲にするに、㋽取與の間、㋪應機妙ならずんば、㋲蓋し殊勝境の界の中より得て、㋝人に蓋覆し將ち來られて、㋜便乃ち他を辨じ出さゞればなり。所以に㋑性敏なるものは、多く道を得す、自ら高ぶるものは、多く㋺下問を恥づ、此れ㋩酌然の理なり。

㋥法眼會中に一僧あり、名づけ㋭則監院と曰ふ、久しく法眼に依る。凡そ陞堂小參、入室普說、並に趨り赴かす。法眼一日、他に㋬撞見して道㋠く、「則兄儞後生家、㋣白日に茫茫たり、何ぞ問事せざる。」者の僧道く、「某甲、實に和尙を謾ずること得ず。曾て㋷青峯和尙に見えて、箇の安樂の法門を得たり、所以に罷參す。」法眼云く「儞、甚麼の因緣の中よりか得入する。」者の僧道く、「曾て問ふ、『如何なるかこれ學人の自己』青峯我れに向つて道く、『㋦丙丁童子來求火』と、㋸我れ便ち者裏より住す。」法眼云く、「好語、只だ恐らくは儞錯つて會せんことを。」㋾者の僧㋻一寸の鉤、三尺の線を消せざるに、㋕一釣に

の上二九頁、洞山初禪師の語を參照せよ。

㋘程限也。程も亦限なり、是れ分上の謂なり、巳上は別して新學に示す。珠云く「程は式なり、限なり、猶ほ法度といふがごとし。」

㋫中間久參。珠云く「中間とは有病新學と眞參實悟久參との病。」上は初參底の人人、巳下は第二に久參の病を說く。宿將は舊宿の禪將。

㋙發足超方。珠云く「大悟の後方外に遊ぶ。」

㋓打頭。最初の義、あたまからの意。

㋢惡辣。珠云く「命根を奪ひ、見地を奪ふ底の宗匠なり。」

㋐坐在見地。巳見の執を打破せざるなり。珠云く「惡辣こゝを救はんため、龍陽新錄の樓」又云く「佛を見ず、衆生を見ず、三世古今貫通した。」

㋚甘心枯志。珠云「山居したり、あつちへこつちへと、骨を折り折りして、聖胎長養すれども、悟りをです。」又云く、「甘心はあゝ、心よい」と。枯志はものを思いぞ、さはればにごる、と。

㋖鑽之仰之。論語の子罕に出づ。珠云く「きりこまざいても見たり、又は尊んでも見たり。」之とは法身をさす、法身法性のきはまりないを云ふ。

㋴淘之汰之。珠云く「此れが面目じや、此れが煩惱じや」と、淘は米を淅(かし)ぐなり。甘心巳下の數語は、皆修錬楷磨の義なり。

㋱裝重巳見。之を裝飾し鄭重にするの義なり。

㋯鶻臭布衫。心中所有の不淨潔底に喩ふるなり、巳見を立て免ることを得ず、洞山初の因緣を再び引くなり、この本叢書の第二卷林間錄上の二九頁を參照せよ。

㋛一旦時緣。稔は穀の熟するなり、出世衆望の時と五種緣との熟するを謂ふ、珠云く「年よれば、みなが取り立て、善知識とする。」

㋽取與之間。取は奪取なり、凡そ宗師衆に臨むに、抑揚襃貶擒縱與奪等の手段あり。

㋪應機不妙。珠云く「それ〳〵應病藥法不妙は。」

㋲蓋。珠云く「見性に坐在する處より。」

㋝被人蓋覆。珠云く「人にのみこまれてしまう。喩へば殊勝な有りがたいと云ふ人は、人の善惡がみえぬもの。」忠曰く「人は此の久參人の見るところの宗匠なり、蓋覆とは許可證明なり、但だ惡辣の鉗鎚に遇はざるのみにあらず、卸つて泛々宗師到る處、許可證明す。」或抄に「蓋覆は巳見をそだてられ。」

㋜辨他不出。珠云く「此の客人殊勝境界になる故に、他は舊參をさす、修行者の泥著するところの病を辨することならぬ。」溪云く「既に惡辣本分の宗匠に遇はずんば、只だ如法殊勝邊の知識より得て、其の知識特に瑕子の瑕疵を蓋覆して、以て印證を授く自巳此の如き故に、他の學人を辨じ出さず。」

㋑性敏者多。蓋し久參の宿將の病も、亦此の如し。珠云く「鈍根になりかへりなりかへり、荊棘にかけこみかけこみ。」この事は本叢書卷三の大惠書の上の五十四頁陳少卿に荅ふる書に「今時の士大夫云云」を參照すへし。

㋺恥下問。久參の故に、自高學

便ち上つて道く、㋑丙丁は火に屬す、㋺火を將つて火を覔むるは、㋩自己を將つて自己を覔むるなり。」法眼大笑して道く、「我れ僧に向つて道ふ、僧青峯の意を會せじと。」者の僧㋥無明を鼓起して、㋭起單して前み去る。㋬是れ他般若の因緣、成熟の㋮時節至れり矣。行いて三兩日を得て、忽然として思量して道く、「法眼和尚は是れ五百衆の㋯肉身の大士なり、我れを不是と道ふ、㋰必ず長處あらん」といつて、回り來つて誠を投じて誨を請ふ。法眼道く、「僧我れに問へ。」者の僧便ち問ふ。「如何なるか是れ學人が自己。」法眼舜を厲して道く、「丙丁童子來求火」と。㋱者の僧豁然として大悟す。山僧尋常、多く兄弟に問ふことを要す、問處一般、荅も亦別ならず、那裏か是れ者の僧の悟處。其の間㋲手脚

するなり、蓋し下問を恥づる故に、一生上達すること能はず、之に依つて論語の公冶長篇に曰く、「敏にして學を好み下問を恥ぢず」と。

㋳的然之理。一に灼然に作る、昭灼なり、あきらかなり。

㋴法眼會中。珠云く、「已下性敏自高の事緣を引く。」

㋵則監院。法眼益の法嗣、金陵報恩院玄則の傳に此の緣を載む。久參の證を引く。監院は監寺と同じ。

㋶白日花々。廣大の貌、蓋し心據なきの謂なり、珠云く、「今は廣大の貌では通ぜず、光陰迅速のことなり。

㋷撞見。撞著相見。

㋸不問事。參禪問道大事因緣の事を。

㋹青峯。諱は義誠、石門の徹に嗣ぐ、洞山价の玄孫なり。

㋺丙丁童子。丙丁は火の神なり

自身火の神でありながら火を求む、自己を將つて自己を覔む。」

㋻我便者箇。我れ者の道理より得入安住して、參問を罷むとなり、大梅の云ふが如し、馬大師、我に向つて道ふ、即心是佛我れ便ち這裏に向つて住すと。

㋼者僧。これは虛堂の語。

㋽一寸釣三尺。消ぜずとは不用意の義、珠云く、「末だ釣かだしもせぬに、釣に上りきた」

㋾一釣便上道。者の僧、許多の餌餌を消ぜざるに、一釣に便ちとりて道理を說くなり。」

㋿丙丁屬火。珠云く、「丙丁は火の神なるに。」

㌀將火覔火。珠云く、「自身火の神でありながら。」

㌁將自己覔自己。珠示く、「自身佛なり、佛でありながら自己を覔むるなり。」

未穩の者は、未だ㋷躊躇することを免れず。自在なることを得んと要せば、當に則監院の㋸再び法眼に見ゆるが如くなること一番子して、以て㋹久參の驗を表すべし也。

然して㋺虛玄の大道、無著の眞宗、㋻得て苟も求むべからず。㋼生れながらにして知れるもの學んで知れるものあり、㋽各〳〵其の器に任す。阿那箇か是れ生れながらにして知れるもの、㋾趙州和尚是れ也。纔かに㋿數歲にして、㌀本師に隨つて南泉に詣して戒を請ふ。本師先づ南泉和尚と㌁人事する次で、㌂沙彌を引いて禮拜せしむ。㌃適〳〵南泉の偃息するに之ふ、臥處に就いて他の作禮を受く。南泉道く、「僧は是れ㌄那裡の受業ぞ。」趙州道く、「㌅瑞像。」南泉云く、「僧還つて瑞像を見る麼。」趙州云く、「某甲、瑞像を

㋷鼓起無明。鼓は動なり、昏惑の無明が鼓動するなり、珠云く、「ばらかたてゝ、まつくらになつた。」

㋸起單前去。包單を捲起して辭し去る。單位といふて自らのすわる場所なば辭し去るを起單といふ。

㋺是他。他は叢院なさず、無明が鼓起した處が覺醒じや。

㋻時節至矣。大疑下に必ず大悟ありとの故に。

㋼肉身。生身のこと。

㋽大長處。別に理長の處あり。

㋾厲聲道。われ鍋こゑでうなつた。

㋿手脚未穩者。手脚が著くること得ず、故に未だ穩ならずとなり、珠云く、「徹底せぬものはじや。」

㌀躊躇。猶豫なり、又足を住むるなり、共に進前することを得ずとなり、人々自己の自在

なるを得んことを肝要とすること。

㌁再見法眼。珠云く、「はぢも恥辱もいらぬ。」

㌂久參之驗。久參の人、再鍊を經ること、則監院の如くして當に始めて自在を得べし。

㌃虛玄大道。虛玄は道の眞體を喝す、無著は宗の大用を明す是れ則ち千聖不傳底の宗猷なり。珠云く、「已下、上を轉じて生知と學知とを示す。

㌄不可得而苟求。是れ豈に苟且にして求めんや、須らく請益再鍊して始めて得べし、已上は別して久參に示す。珠云く「參禪有脚の大事ぢ。」

㌅有生而知之者。これは論語の季氏篇にある「生而知之云云」を引き來る。珠云く、「得られぬとて、すてゝはおかれぬ、亦生死海一たび自己を見ればかなはぬ。

見ず、即今箇の臥如來を見る。」南泉物見えて ㋓主眼卓竪す、㋔矍然として起坐して乃ち問ふ、「儞は是れ ㋕有主の沙彌か。」趙州云く、「某甲、㋖不敢。」南泉云く、「作麼生か是れ儞が主。」㋗趙州近前叉手して道く、「孟春猶ほ寒し。」伏して惟んみれば、㋘和尚萬福、者箇無量劫來、㋙熏鍊成熟するに非ざるよりは、安ぞ能く此に及ばん。未だ其の ㋚淵奥を極めずと雖も、看よ他の ㋛題目已に自ら分曉なることを。㋜豈に生れながらにして知れるものに非らんや。

㋝稜道者は、此間の鹽官縣裏の人なり、行脚して ㋞福州の靈雲に到る、上堂に遇ふ。㋟他便ち出でて問ふ、「如何なるかこれ佛法的的の大意。」靈雲道く、「㋠驢事未だ去らざるに、馬事到來。」是の如く雪峯、玄沙、靈雲の三大老に參じて、

㋡各任其器。此の一節は總べて生知學知の者を標す。珠云く「今生器量のすぐれたは前の骨折りじや、親も佛もこれにはかなはない、今任すとは虚堂和尚等力が少したらぬ。」或抄に「その人の器量次第」と。

㋢趙州和尚。珠云く、「生知の證た引く。」

㋣數歲。七八歲なり。

㋤本師。剃度の師、頭をはじめてそりてくれた師匠。

㋥人事。人事は寒暖を序し、安否を問ふ、日本でいふじこうのあいさつなり。

㋦沙彌。趙州なり。

㋧之南泉。假恩。之は趙州の本傳などには値に作る。之は助詞なり。

㋨那裡受業。どこの小僧じや。

㋩瑞像。寺の名乎。

㋪物見主眼。珠云く、「ほほうこの小僧油斷はならぬと目をくばる。」雲林錄の佛生日上堂の終に見ゆ、目かどがよかつたゆゑ云云、目をつけかへて問ふ。

㋫矍然。左右に驚顧す、一に目く、視く遽てる貌。ちらりとみるなり。

㋬有主沙彌那。主は師をいふ、うぬは師匠もちじやなとは、面目を持ちてをるなと。

㋭不敢。珠云く、「ないでもござりませぬ。」さうではないといふこと。」

㋮近前叉手道。珠云く、「見事なものじや、孟春云云。」

㋯和尚萬福。端的師資の禮を行ふ、珍重にござる。

㋰熏鍊。熏習鍛鍊じや、安んぞよく此に及ばんと、この答はこれほどの器量に及ばんとなり。

㋱淵奥。平常心是道の因緣に於て、始めて南泉の淵奥を極

二十年、㋲省發すること能はず。一日雪峯の會裡に在つて、因に籠を捲いて、豁然契悟す、乃ち㋳投機の頌あり。玄沙、雪峯に謂ふて云く、「恐らくは是れ㋴意識の註述ならん、又須らく㋵勘過して始めて得べし。」稜道者㋶忽ち面前に在り、雪峯云く、「道者子。備頭陀未だ儞を肯はず、儞若し眞正に契悟せば、更に須らく道ふて看るべし。」稜道者㋷口を接いで、再ひ一頌を述して道く、「㋸萬象之中獨露身、㋹爲人自肯乃方親、㋺昔年謬向途中覓、㋻今日看來火裏氷。」雪峯、玄沙を回顧して云く、「者箇又喚んで註述と作し得てん麼、㋼豈に學んで知れるものに非ざらん歟。」㋽今の人、㋾心機を用ひ盡して、他の田地に到らんと要すとも、㋿終に是れ得難からん。

む。如レ此答ふといへどもじや。

㋳投機。大綱なり、表を謂ふ、淵奥は裏を謂ふ、珠云く、「出合ひがしらに經書の題目の如く。」

㋴豈非生而。而上は生知か學くるなり。

㋵稜道者。長慶慧稜は雪峯に嗣ぐ、杭州鹽官の人なり、靈隱も亦杭州にあり、故に此問といふ。

㋶福州雲。福建名勝志之一に「靈峰寺後靈雲菴と改む、志勘禪師の道場。」

㋷他。稜道者なり。

㋸題事未去。珠云く、「好若語なり、方語に一心二用なし、閑事連續の義なり。」謂く、「人惑未だ去らざるに法惑制來す」と。珠云く、「方語はこんな方語で、なんと佛法の大意と是れで勘合が定ふかな、不可々々。」或抄に云く、「わけもなき用もなき、ふつゝき來るどなり。」

㋹不能省。其の間、七僧の淵奥を坐破す」

㋺投機頌。頌に曰く、「也大差也大差、捲二起簾一來見二天下一、有レ人問三我解二何宗一、拈二起拂子一劈口打。」珠云く「也大差はおゝまちがひ〳〵、見二天下一は、天下どころか地獄の底までも見とほした。

㋻意識註述。珠云く、「分別で云ふたらしい」と。或抄に云く、「註は又著に作る、識情妄想なはなれえまい」と。

㋼勘過。再び。

㋽忽在面前。雪峯再勘の手を下してあれば。

㋾備頭陀。玄沙師の傳に「雪峯其の苦行を以て呼んで頭陀と爲す。」頭陀、此には抖擻と云ふ、煩惱を抖擻するが故なり

後來㋐閩王、請じて㋑長慶に住せしむ、衲子の萬象の中獨露身といふに泥むを見るが爲に、㋒遂に些の鎖口の訣を用ひて道く、「萬象の中獨露身是れ㋓萬象を撥ふか、㋔萬象を撥はざるか」と。會中の龍象、悉く皆下語すること得ず、以て法眼、㋕漳山主、㋖悟空の輩、㋗皆契はざることを致す。㋘遂に泉南に遊ぶ。一日㋙湖外に出でんと欲す、回りて㋚漳州に到る。城下㋛雨淋淋地にして止まず、遂に城邊の小院に入つて雨を避く。枯薪を拾ふて、僧堂の地爐に入つて火に向ふ、只管に「㋜三界唯心、㋝萬法唯識」といふことを論じて、以て㋞肇論の「天地と我れと同根、㋟萬物と我れと一體」等の語に至る忽ち老僧あり、入り來つて㋠火に附く、乃ち問ふ、「山河大地と、上座の自己と是れ同か是れ別か」修山主道く、「㋡別ならず。」老僧㋢兩指を豎起して去る、那時方に知る、是れ㋣地藏の琛禪師なることを、未だ免れず胸中各〻少しく㋤疑を置くことを。雨稍晴れ、㋥業已に成つて行かんとす、老僧復た來つて、相送つて行いて佛殿前に到つて、花壇の石を指して云く、「諸公適來道く、「三界唯心」と、且く道へ、者の一塊石の心內に在るか心外に在るか。」㋦法眼云く、「心內に在り。」地藏云く、「行脚の人、者の一塊石を置いて、心頭に在らしめば、多少か不自在ならん。」㋧是の如くして三人、㋨主丈を拗折して、者の老和尚に參ず、各〻契悟することあつて、名天下に滿てり。㋩後來法眼の一宗、大いに世に行はるゝことは、蓋し雪峰玄沙の㋪氣脉の中より來れり、㋫所謂㋬祖父㋭田舍翁の陰德あれ

其の苦行十二種あり、名義集に詳なり。

㋐閩王。王審知なり。

㋑長慶。本傳には「閩の帥、請じて長慶に居らしむ、超覺大師と號す。」

㋒遂些鎖口訣。珠云く、「遂に一拶を入れた、些のとは天下の人の舌頭を坐斷する底のなりる。

㋓今日看來。冰は唐音「ひん」、禪話沒蹤跡、所謂萬象の中獨露身の故なり。「氷の字、眞の韻にあらざるも、唐人の詩亦韻に拘らざるあり」と、忠の說なり、犂耕に出づ。珠云く、「眞箇活眼で看來れば、一まいにして他物にあらず。」

㋔擧而知。珠云く、「今生苦學して。」

㋕今之人。珠云く、「今時の人、淺劣のゆゑに。」

㋖用盡徹機。珠云く、「かれこれあせりぬいて。」

㋗終是難得。已上は擧知を擧ぐ

㋘閩王。王審知なり。

㋙住長慶。本傳には「閩の帥、請じて長慶に居らしむ、超覺大師と號す。」

㋚遂些鎖口訣。珠云く、「遂に一拶を入れた、些のとは天下の人の舌頭を坐斷する底のなり

蓋し人口を鎖却する底の秘訣なり、是れ長慶門下の宗唱なり。忠曰く、「鎖口訣とは是れ篇章の名にあらず、但だこれ撥不撥の機關にして、他の口門を塞斷し、他の知解情量を絕するものなり。

㋛撥萬象。珠云く、「うちはらひのけて、獨露身乎。」

㋜不撥萬象。珠云く、「はらひのけず、そのまゝ指して置いて獨露身乎。」

㋝修山主。龍濟なり。

㋞悟空。清涼院休復悟空禪師、法眼のこの二人ともに、地藏琛に嗣ぐ。

㋟皆不契。法眼の傳に、「福州に抵りて長慶に參ず、大いに發明せず。」珠云く、「是れつらのことば納僧はなんでもないことなれども、れきゝが謂ふことを得ず。」

㋠遂遊泉南。福建の泉州府、珠云く、「法眼等の歷々つひに、」

㋡湖外。下の註を看よ。

㋢漳州。東湖西湖あり。莆湖の外に出でんと欲して、回つて泉南の漳州府に到る。

㋣淋淋地不止。淋淋は山水の下ること、今は間斷なきの義に取る、水そゝぐなり、雨淋淋として下るなり。

㋤三界唯心。欲色無色。

㋥萬法唯識。色聲香等の萬法。華嚴經、唯識論の大旨、法眼各領あり、人天眼目などに見ゆ

㋦肇論。肇法師の傳は高僧傳六にあり、四論を著はす、一に物不遷論、二に不眞空論、三に般若無知論、四に涅槃無明論、總じて肇論と名づく、今鼓の話は涅槃無明論の語。

㋧萬物與我。天地山河、草芥人畜。

㋨附火。附は向なり。

ばなり。

爾看よ、雪峰㊁一たび嶺を出で來るときは、先づ㊂一把の杓頭を買ひ、一條の㊃手巾を㊄縮つて、到る處に㊅行益結緣す、㊆誓つて頭堂の飯を喫せず。德山の會裡に到るに及んで、先づ㊇占めて飯頭と作る。以至三たび㊈投子に到り、九たび㊉洞山に上り、千辛萬苦して、道業を成就す。後來大伽藍を建て、㊋大法施を開いて、一千五百衆を聚む。每に云ふ「一千五百箇の㊌布衲子は、老僧が杓頭より㊍皆み得來る」と。又㊎玄沙和尚の如きんば、頭陀の苦行を㊏精持して日間には㊐僧を開いて粟を稗る、水を引いて㊑蔬に灌ぎ、夜間には㊒香燈持淨掃地を㊓勤む。㊔閻王不時に㊕宣して㊖禁中に入れて說法せしむ、歸り來れば其れ苦行す、寒暑にも易へず、

爾看よ、他衆に示して道ふことを、直に㊗秋潭の月影、㊘靜夜の鐘聲の、㊙扣擊に隨つて以て虧くることなく、㊚波瀾に觸れて散せざるに似たるも、㊛猶ほこれ生死岸頭の事なりと。㊜豈に是れ尋常の導師の說く底の話ならんや。

㊝又藥山和尚の如きんば、遊山して澧陽に到る㊞人家に一座山の好きあるを見て、便ち㊟他を化して道場を建てんと要す。百姓從はず、便ち他の㊠牛闌裏に入つて坐禪す。人家之に惱されて已まず。乃ち牛を牽いて、㊡屋裏に歸して火を縱つて牛闌を燒却す。他　牛闌の基に在つて坐禪す、㊢太守聞き得て、之が與に山を買つて、一所の庵を建てゝ、之に㊣扁して牛闌と曰ふ。後來叢林と成つて廣衆を安ず、以て㊤雲巖、㊥道吾、㊦船子、㊧高沙彌、㊨李翺相公の

㊀不別。珠云く、「智解を以てやつと云ふた。」

㊁豎起兩指。意は頌古の部に見ゆ。珠云く、「不別と云へば早や二つじやと、三人がすぐみはてた。」或抄に「山河大地と自己と二つでござるとなり。」

㊂地藏琛禪師。玄沙の法嗣、漳州羅漢院桂琛禪師の傳に、「時に漳の牧王公、精舍を建てゝ地藏と曰ふ、師を請じて開法せしむ。

㊃置疑。珠云く、「豎起兩指したところ。」

㊄纔已成行。珠云く、「發足の用意支度も出來たから。」

㊅法眼云。珠云く、「佛も昔しは凡夫にてじや。」

㊆如是三人。珠云く、「兩度の藥に偷心死し盡して。」

㊇拗折主丈。決して他に行かざるの意、むりやりになる。

㊈後來法眼。

㊉雲門文偃—雪峰義存—玄沙師備—羅漢琛

㊋清涼文益（法眼）

㊌氣脈中。珠云く、「氣息血脈の中に、同氣の中に。」

㊍所謂。「此の語は光明藏の橫州の言に本づきたるなりと。」珠はいへり。

㊎祖父。珠云く、「雪峰玄沙のちいさまたち。

㊏田舍翁陰德。珠云く、「身ないやしめ質朴にして居られた。」已上は前段萬象の中の言に結じて、法眼等の悟由を述して又後段雪峰玄沙、苦行の基を開く。陰德は識もしらぬ德、會下の學者達。

㊐一出益來。飛猿嶺なり、江西の建昌府にあり、雪峰の傳に「飛猿嶺より去る云云。」珠云く、「最初行脚に出る時。」

㊑一把杓頭。一本の杓子を買ひ求め。

㊒手巾。こしおび、まへだれ。

㊓縮。まとひわがれて。

㊔行益結緣。忠曰く、「行は食を行くなり、益は食を益すなり、行は猶ほ付與の如し。言ろは杓頭手巾に、自ら甘んじて雜務を領して、衆の爲に行益結緣する樣なり。行益は衆僧利益の事を施行するなり、故に洞山に在つては、飯頭と作つて淘米の話井に斫槽の話あり乃ち德山に到つて亦飯頭と作る、是れなり。」或抄に「行益はかろき役なり。」

㊕誓頭堂飯。誓ふて知事飯頭等の雜務を領じて、故に頭首堂單の鉢位に飯せずと、或る義に初頭堂は僧飯し、第二堂は行者飯す。一番座のことを云ふ。

㊖占作飯頭。占は固有なり、自此の職を固有するなり。忠曰く、「人の命ずる所なきに自ら進んで據り掌るなり。又人之を作さんと欲するを進み侵して自ら作すなり。」

㊗投子。投子山大同は翠微學に嗣ぐ。

㊘澧山。良价なり。

㊙大法施。珠云く、「出家からは大法施、在俗からは財施、本來互のものじや。それから色法の二身かそだつる。」人々安樂を得せしむるの法施なり。

㊚布衲子。衣きているばうず。

㊛皆得來。皆は以對の切、抒曰なり。抒んで下して之を取るなり。已上は雪峰の苦行が舉ぐ。

㊜精持。精勤護持。

㊝同舍種粟。田舍翁と同樣に。

㊞蔬。蔬菜園。

㊟香燈。燒香然燈。

㊠持淨掃地。持淨は淨頭の役を

輩得て以て㋺授道の地と爲すことを致す。毎に云ふ、「老僧無福なり、敢て衆と、もに食を同じうせじと、毎日只だ兩粥を喫す。首座他の㋻眼腦精明なるを見て、必ず別に飲食を置くと謂へり、一日堂に赴かずして、藏れて方丈の㋼僻處に在つて、藥山の堂上に赴くを待つて、門に入つて㋽銚子裡より氣の出づるを見る、揭開すれば乃ち是れ㋾黃菜葉、㋿煮麥麩少許なり藥山云く、「老僧年來、㋀衆に陪するに力無うして、是の如くするもの十年なり矣。今首座に㋁齟齬せらる、與に外に知らしむること勿れ」と、乃ち㋂麥麩にして飯し、㋃牛闌にして禪することとあり、古人の刻苦なること、此の極に至れり矣。所以に㋄後世に光明して、㋅子孫今に至るまで絶えず。

執持す、雪竇さうじまでもして。

㋆國王。王審知、忠懿と謚す。

㋇宣。日宣なり。

㋈禁中。傳燈錄の師の章に曰く「國の帥王公、請じて無上乘を演べしむ、侍するに師貴の禮を以てす。學徒八百に餘れり」

㋉秋潭月影。其の明見るべし、珠云く、「見性了々、分明なる處を指す。偏正三昧迷悟の沙汰はない。

㋊夜鐘聲。其の響き聞くべし靜夜はうしみつころなり。珠云く、「衆機に應じて、引接すること。」

㋋隨接擊以。大音小音それ〴〵に鳴る、鐘聲を云ふ。

㋌觸波瀾不散。珠云く、「波瀾と世の是非長短、自己の心月、少しも散ぜざるに似たり。」秋潭月影を云ふ、徹底無心、應緣無碍の機を表す。

㋍猶是生死。無心猶ほ一重の關を隔つる故に。まだ〴〵そこは是非におつることじや。

㋎豈是尊當。巳上は玄沙の事を擧ぐ。鵲林大師も、「慮堂近比の評判じや」といはれたり、珠云く、「こりや、もちあつかつた評判じや。」或抄に、「尊當は凡情じや。」

㋏藥山。澧州の南九十里に在り上に芍藥山に多し、長嘯峰あり、昔し惟儼、嘗て夜る山に登つて、雲開いて月現ず、大嘯一聲、數里に聞ゆ、因つて名づく。

㋐人家一座。或人、家のほとりに、一座は一所と云ふが如し一箇の如し。

㋑化他。他を教化して。

㋒他牛闌。他の人家の牛部屋。闌は當に欄に作るべし。

㋓歸屋裏。自らの居宅へかへり

㋔太守。李翺相公をいふ、藥山

又㋕百丈大智禪師の如きんば、「一日作さゞれば、一日食はず」といつて、年九十五歲に㋖高くるまで、㋗鉏頭刀釪、㋘蓑衣笠、㋙曾て身を離さず、㋚黃檗、㋛五峰、㋜平田、㋝古靈、㋞溈山、㋟懶安の龍象、門に滿てり。其の作務に忍びずして、㋠密かに之を去く。百丈云く、「老僧無福なり、坐ながら信施を㋡消せんや」といつて、遂に食を絶つて殂す。

又㋢老南の黃檗に住せし時の如きんば、入室より退いて必ず淚下る、其の故を問ふものあれば乃ち云く、「老僧はこれ佛法中の罪人なり、一堂の兄弟、人の一轉語を下し得て、㋣切當なるなし、㋤法門の興衰、亦知んぬべし矣」室中毎に擧す、「㋥鐘樓上念讃、㋦牀脚下砰レ栄。」㋧勝首座、一轉語を下して道く、「㋨猛虎當路

闌法の居士、朗州刺史。

㋬局。額をうつて。

㋭賞嚴。參晟なり。

㋮道吾。宗智なり。

㋯船子。惠誠なり。

㋰高沙彌。

㋱李翺相公。巳上五人は藥山に承嗣す。

㋲授道。珠云く、「承授大道の地。」

㋳眼腦精明。珠云く、「あまり顏色がよいゆへ。」

㋴僻處。方丈のどつかの閑處、かくれまゝかたかげ。

㋵銚子。溫器。てうしなべ。

㋶黃菜葉。きいろにかれたなつばとこむぎかすとが、ちんびくそほどあつた。

㋷煮麥麩。こむぎかす。

㋸陪衆。衆と同じやうに食することはできぬ。陪は共なり。

㋹齟齬。みやぶられた。

㋺麥麩而飯。まづいものをくひこむぎのかすを。

㋻牛闌而禪。きたない處に居て牛の中間入して。

㋼光明後世。珠云く、「彼の田舍翁い除德からして末末までも

㋽子孫至今。巳上は藥山の操持を擧ぐ。

㋾百丈大智禪師。百丈懷海禪師は洪州南府の大雄山（一名百丈山）大智院に住ぜられたので、通名が百丈大智禪師となつてゐる、唐の玄宗開元八年日本の元正天皇養老四年に生れ、唐の肅宗元和九年九月十七日日本の嵯峨天皇弘仁五年に寂す、年九十五、日本ではその翌々年の弘仁七年に、空海が高野山を開かれしなり、唐長慶元年大智禪師と謚を勅す。

㋿嵩。たくる、たける。

㌀鉏頭刀釪。鉏はすき、釪は音けつほこほこのやうで刄なし

坐。」㋓他便ち黄檗を退いて、㋔他に與へて住せしめて、㋕自ら積翠庵に居す。古人法門の爲にするの㋖切なること此の如く、㋗道の爲にするの切なること此の如し。

㋘今の兄弟、儻し能く仰いで㋙上古の風を體せば、㋚牛頭を按じて艸を喫せしむることを待たずして、㋛孜孜焉として、自ら叢席を成して四方に㋜傳頌せん、㋝偉ならざるべけんや。㋞誠に老拙が此に在つて、手を炙りて熱を助くるに孤かず也。己事未だ明めざるものは、㋟愼んで多く新語を出すこと勿れ、新語は㋠乃ちこれ自得の妙にして、㋡先聖の所得所傳の妙を會通することを能はず。深く恐る、古道の淪沒せんことを。山僧凡そ江湖抱道の士と往來議論するに多く前輩の遺言往行を引いて、遞に相激勵す。

㋓他。他便。惟勝なり。
㋔與他。惟勝なり。
㋕積翠庵。黄檗にあり、老南曾て黄檗にあるとき結ぶところ。
㋖切如此。珠云く、「切は親切なること、如此とは一轉語を尊重することかやうである。」法と道と一つにみるべし。
㋗爲道之切。此の兩句は總結なり、上の句は老南の法門の衰替を痛むことを結ぶ。下の句は、前の數段の諸老道の爲めに苦切なることを結ぶ。
㋘今之兄弟。珠云く、「記いて今日に入れて警策す。」
㋙體上古之風。珠云く、「風儀をばじや。」體は身を舉げて爲るの謂、或は體窮の義、體達、體性、履踐などの三義あり、諸品要義の下に出づ。忠曰く、「履踐の義なり」。
㋚按牛頭喫艸。强ひて信ぜられども自然に化門を成就するを謂ふなり牛のかしらをひつとらへて、むりに艸なくらはしむるなり。
㋛孜孜焉自。上古の風を勤むるならば、自ら叢林の法席となる、桃李蹊をなす如し、珠云く、「湯でくへ水でくへと云はれども、いづれ自分からつとむると、自然と法懷が盛んになる。
㋜傳頌。誦なり、頌古の解に見ゆ、珠云く、「頌は歌なり。稱述なり。」
㋝可不偉哉。偉は說文に奇なりと、徐曰く、「人才の傑偉なり、增韻に大なりと、珠云く、「佛事門中、廣大の德者と云ふものではあるまいか。」
㋞老拙。珠云く、「虛堂、年耀りよつて、大衆が東谷に依つて修行するは、東谷の智惠の火であぶるが如くじや、それに虛堂が東谷の法幢を助くるは、火に薪を添へて熱を助くるなり。」忠曰く、「言ふは火衆若如くなり。」
㋟愼。老南なり。
㋠乃。乃。
㋡先聖。老南なり。
㋢孜孜焉。珠云く、「孜孜は勤むるなり。」忠曰く、「孜孜は勤むるなり。」
㋣會通。會は說文に合なり、通は說文に達なり。
㋤切如此。珠云く、「切は親切なること、如此とは一轉語を尊重することかやうである。」法と道と一つにみるべし。
㋥爲道之切。此の兩句は總結なり、上の句は老南の法門の衰替を痛むことを結ぶ。下の句は、前の數段の諸老道の爲めに苦切なることを結ぶ。
㋦今之兄弟。珠云く、「記いて今日に入れて警策す。」
㋧體上古之風。珠云く、「風儀をばじや。」體は身を舉げて爲るの謂、或は體窮の義、體達、體性、履踐などの三義あり、諸品要義の下に出づ。忠曰く、「履踐の義なり」。
㋨孜孜焉自。上古の風を勤むるならば、自ら叢林の法席となる、桃李蹊をなす如し、珠云く、「湯でくへ水でくへと云はれども、いづれ自分からつとむると、自然と法懷が盛んになる。
㋩傳頌。誦なり、頌古の解に見ゆ、珠云く、「頌は歌なり。稱述なり。」
㋪可不偉哉。偉は說文に奇なりと、徐曰く、「人才の傑偉なり、增韻に大なりと、珠云く、「佛事門中、廣大の德者と云ふものではあるまいか。」
㋫老拙。珠云く、「虛堂、年耀りよつて、大衆が東谷に依つて修行するは、東谷の智惠の火であぶるが如くじや、それに虛堂が東谷の法幢を助くるは、火に薪を添へて熱を助くるなり。」忠曰く、「言ふは火衆若如くなり。」忠曰く、「言ふは火衆若し能く孜々として叢席を成さば則ち亦虛堂の此に在つて、東谷和尚の法幢を扶翼するの窟に負かざるなり。」忠又曰く、「手を炙るは大衆の修行に比す、熱を助くるは薪を加ふるなり、熱は東谷の法幢を建つるに比す、助くるは虛堂の其の法幢を扶翼するなり、今字を借りて義大に別なり、卷末の行狀に曰く、「東谷和尚、冷泉に主たり、立僧を舉げんと欲す、衆して就かざるを恐れて、衲子再三禮請す、師之に從つて室を開いて普說す。」龍溪曰く、「今東谷和尚の勞、炤威光以て手を炙るべし、熱を助くるとは之を借り承けて、助け發するなり、楞嚴に云ふが如し。文殊師利、佛の威神を承け偈を說いて佛に對する義は、若し是の如くならば、誠に孤負せざるなり、隆冬苦寒の時を顧みずして、閑室普說の親切なることを」と。
㋬多出新語。珠云く、「才智あれば子細らしくこと云ひたがる。」或抄に「已見を立つるは。」

皆耘耕の具なり。
㋭蓑衣箬笠。說文、楚には竹皮を謂つて箬と曰ふ、たけのかはのかさ、日本で農家に用ふる「みのかさ」なり。
㋮曾。ついに。
㋯黄檗。希運なり。
㋰五峰。常觀なり。
㋱平田。普岸なり。
㋲古靈。神贊なり。
㋳鳥山。靈祐なり。
㋴懶安。長慶大安、已上六人とも百丈に法嗣す。
㋵密而去之。こそりとその作務の道具をかくしておく。この作務の事は本叢書の二卷の林間錄の上の四八頁に、「百丈寺は絕頂にあり云云」とあり、參照すべし。
㋶消。珠云く、「費の義として見るべし、已上は百丈の勤勞を舉ぐ。」
㋷老南。黄龍慧南、登んで老南と稱す。其の孫嚴漢系南を小南と稱す。
㋸切當。珠云く、「親切契當。」
㋹法門興衰。珠云く、「みごと、下し得るものあれば、法門の興隆なり、著し下し得ずんば法門の下衰なり、更に變時至ること悲むべし。」
㋺鐘樓上念讚。珠云く、「此の則はさつとしたやうながら、黄龍宗の要切なる則。」佛殿前の鐘樓前で、一心頂禮萬德圓滿といふが如く。
㋻林脚下排菜。珠云く、「僧堂内の林脚下で、齊時の汁の味にせんと云ふことか。」
㋼膝首座。黄檗惟勝眞覺禪師、黄龍に嗣ぐ。
㋽猛虎當路坐。當路はまん中、頌古の都に出づ、威勢あつた人の平人の如くなり、かへつたは夏にみがたく知りがたしと。

㋙ 庶はくは昭昭然として、古人の㋚情狀を見ることを得んことを。

㋛ 夫子は一代の儒宗たれども、但だ㋜述して作せず、㋝若し作せば恐らくは夫子文章なからん耶。周室の下衰して、禮樂㋞崩壞するを見るが爲に、㋟詩書を删り禮樂を定め、㋠區區教を立つ。以て堯舜禹湯文武周公の道を明かにして、㋡以て後世に貽す。㋢楊子、㋣太玄眞經を著はせり、天下の人之を非つて謂く、「夫子すら曾て經を作らずと、其の詞の㋤簡澁に近からんことを以てなり。門人之を告ぐ、楊子が曰く、「世、我れを知らず、㋥當に子雲といふものあつて復た生ずべし矣。」漢より今に及ぶまで、楊子が道盛に行はる、大抵言を立つることは、㋦只だこれ當らんことを要す、㋧千古の下、豈に識者なからんや。

㋨ 玆來㋩至節遷きに在り、㋪久しく首座寮に在つて入室せしむ。殊に不便を覺ゆ。㋫山門、人を請ずる次第を妨げんことを恐れて、㋬方丈に牌を納る。㋭既に緣會すること許時なり。㋮道義を以ての故に、遂に些の古人㋯履踐の處を擧して、㋰以て末後の殷勤に當つ。第だ衰老して㋱語を出すこと太だ過ぎたり、㋲望むらくは兄弟、㋳之を救せ、幸甚。

㋴ 記得す、潙山向火の次で、仰山に問ふ、「終日向火す。甚に因つてか㋵全く暖氣なき。」仰山向火の勢を作す、潙山云く「子只だ㋶物體を得たり、㋷能所は來在。」仰山云く、「某甲只だ此の如し、和尚作麼生。」潙山亦向火の勢を作す仰山云く、「和尚只だ物體を得たり、能所は未

㋸ 乃是自得。珠云く、「乃是とは我が手にこたへたことを吐き出すものじゃ、自得とは淺深麁細があるものじゃ。」

㋹ 先聖所得。廓庵云く、「有る般底は一向に只だ自己の會を作して古人の用處を棄却す、誰だ自己の事を明むと道ふことを知る、古人の方便、却つて如何か消遣せん」と。報恩の除夜に詳なり。珠云く、「先聖は釋迦達磨、所傳は迦葉惠可。」

㋺ 庶。なにとぞ、どうぞ。

㋻ 情狀。こゝろのありさま。宗鏡の一に云く、「且つ西天上代の二十八祖、此の上の六祖乃至洪州の馬祖大師等の如きは並に博く經論に通じて、自心を圓悟す。所有の徒に示す、に皆誠證を引く、終に自らの胸臆より出して、妄に指陳することあらず、是を以て歲華を綿歷して、眞風墜ちず。」已上修入開化の意を示す。見は見得なり、情狀は情實ていたらく。

㋼ 夫子。孔子を謂ふ、「嘗て魯の大夫と爲るを以の故に夫子と云ふ」と孝經の序の注にあり子は男子の通稱、孔子は大聖孟子は大賢、例して只だ子と稱す。

㋽ 述而不作。論語の述而篇に、「子曰、述而不レ作信而好古」と。珠云く、「述は舊を傳ふるなり、作は創始なり。新語出さるを證據す。

㋾ 若作。珠云く、「作爲しようとおもへば。」

㋿ 崩壞。崩裂、破壞。

(1) 删詩書禮。事は史記の孔子世家に詳なり。

(2) 區區立教。珠云く、「區々はすこしき貌、微細の義、貴賤老少、五倫の道、區々まち〳〵に教法を立つ。」

(3) 玆來。珠云く、「玆來とは遷して、前段の義を證す。珠云く、「どこゞでは有道の人の言は知る人があるもの、それで智眼あるものはないと云はれぬ。」

(4) 至節在遷。冬至乘拂の頭首、遷寮の時なり。珠云く、「已下總じて納牌の義を結叙す。」或抄に「冬至に首座を立てゝ乘拂せしむ。」

(5) 久在首座寮。謙退の謂なり、殊覺不便とは珠云く、「人の爲めには勝手がわるいと云ふことなり。」忠曰く、「學者をして入室參問せしむ、然るに至節には則ち乘拂、首座は首座寮に入るべし、我れ此に在つて、人の入來を妨ぐ、故に事に涉て便宜ならず」と。

(6) 恐妨山門。首座寮を虛にして次の人を請すべきが故に。

(7) 方丈納牌。或抄に「入室と書設の牌なおくり入れ、首座を

(8) 以貽後世。中庸に所謂「仲尼は堯舜を祖述し、文武を憲章す」とは是なり、珠云く、「今日是の如く五倫五常の道を知るは、孔子の遺德なり。」

(9) 楊子。名は雄、字は子雲、楊は揚の方正し。

(10) 太玄眞經。珠云く、「十卷あり新に述作した。」

(11) 簡澁。詞簡略にして義通曉し難し、故に人之を非る、簡略澁滯。

(12) 當有子雲。忠曰く、「盛に行ることは、法言耳」。前漢書揚雄が傳の贊に曰く、「雄の沒してより今に至るまで四十餘年、其の法言は次に行はれて、玄は稍に顯はれず、然も篇籍は具に存す。」

(13) 只要是當。理に當らんことを要す。珠云く、「道にかなふを干要とす。」

(14) 千古之下。已上は古人立言各

在。」潙山云く、「㋑如是如是」と、盡く謂ふ、㋺潙仰、器を傳へて受くと、㋩殊に知らず、父子の義、㋥各自に背馳することを。今夜忽ち㋭箇の衲僧あつて、出で來つて道はん、㋬老和尙、儞也た㋮儘儘に㋯古人を檢點することを要することなかれ、㋰客舍の下、㋱隆冬苦寒、㋲又孤峰絕頂に在つて、㋳儞底の暖氣、㋴阿誰か知らざらんと。山僧只だ㋵手を以て面を掩ふて、㋶波瀾を收捲することを得たり。何が故ぞ。㋷我れを知り我れを罪す。夜深久立。

㋸辭す。
㋹以道義故。珠云く、「世間門でなし。」
㋺緣會許時。衆と因緣會遇すること幾許時なり、言ふは其れ多時なり。
㋻覆錢。珠云く、「受用の處。」
㋼以當末後。以て留別するなり。珠云く、「此の一會をおはりのなごりに。」
㋽川語太過。珠云く、「衰老の故にことばもくどくなる。」
㋾望。願望。
㋿教之率菴。珠云く、「衰老にめんじて之か教せ」と。巳上は即今退位の意を述す。

傳ふるか如し、更に遺餘なし。瓶器は殊なりと雖も、水は則ち別なし」と要覽の寫瓶傳器の注に見ゆ。
㋷殊不知。諸方は。
㋸各自背馳。西秦に向ひ東魯に行くの義。特に此の判か著て人をして思索せしむ。忠曰く、「同じく向火道ふ所亦同じ。什麼としてか却つて背馳と云ふ」寶林錄の此の話の拈語を參照せよ。
㋹儞納僧。珠云く、「氣量ある底。」
㋺老和尙。虛靈が自らいふ。
㋻儘儘。盡は伶に儘に作る、緘なり、皆なり、珠云く、「氣儘一ばいじや。」

㋼記得。巳下拈提。
㋽全無暖氣。佛法の溫和なきに喩ふ。
㋾得物體。珠云く、「根本面目は得てなる、潙仰宗の大事じや」
㋿能所未在。一片を得て該り具へざるなり、寶林錄の冬至、此の緣の下に出ず。珠云く、「能所とは差別の境界はただじや。」と、未在は徹底せぬを云ふ。
㌀如是如是。珠云く、「おつおつと印可す。」
㌁傳器而受。珠云く、「一器の水を以てじや、阿誰佛法か領受す。瓶水を寫して之を別器にや。」
㌂撿點古人。珠云く、「あまりに古人のことを吟味し評判せられぬがよからう。」
㌃客舍之下。立僧に請ぜられて、客位に安排するが故に。珠云く、「なぜなれば客舍の下じや、松源塔下や。」

より來て、靈隱の首座寮に客たるなり。
㌄隆冬苦寒。不自在の故に、仲冬苦寒知るべし。珠云く、「仲冬殊にこゝえぬく時節。」
㌅又在孤峰。蓋し鷲峰菴は北山の絕頂に在り。珠云く、「吹きはなしのてつぺんにゐて、おれこそは時節にかゝはらぬとて大口きかる。」
㌆儞底暖氣。言ふ意は其れ多からずとなり。珠云く、「儞はそこゝと、大口きけども、わづかのこと、寒中の暖氣の如くじや。」
㌇阿誰不知。之を知るに難からず、珠云く、「みんな知つてゐることじや。」
㌈以手掩面。珠云く、「おふ〳〵はづかしはやい。」

㌉收捲波瀾。辨瀾を收むとなり。
㌊知我罪我。我れの非を知る故なり。事は續息錄に見ゆ。巳上は舉古結座此の四字で普說がいき回つた、是れ什麼ぞ。「とかくなんにも云はぬがよいと云ふやうな語勢なり」と珠長老はへり。

普說　終

昭和三年十月二十日印刷
昭和三年十月三十一日發行

國譯禪宗叢書
第二輯第六卷

編者　國譯禪宗叢書刊行會
東京市神田區錦町一丁目十六番地
發行者　宮下軍平
東京市神田區今川小路一丁目六番地
印刷者　中村倍吉
東京市神田區今川小路一丁目六番地
印刷所　昭陽社印刷所

不許複製

發行所　東京市神田區錦町一丁目十六番地
國譯禪宗叢書刊行會
振替口座東京四六〇一六番

終